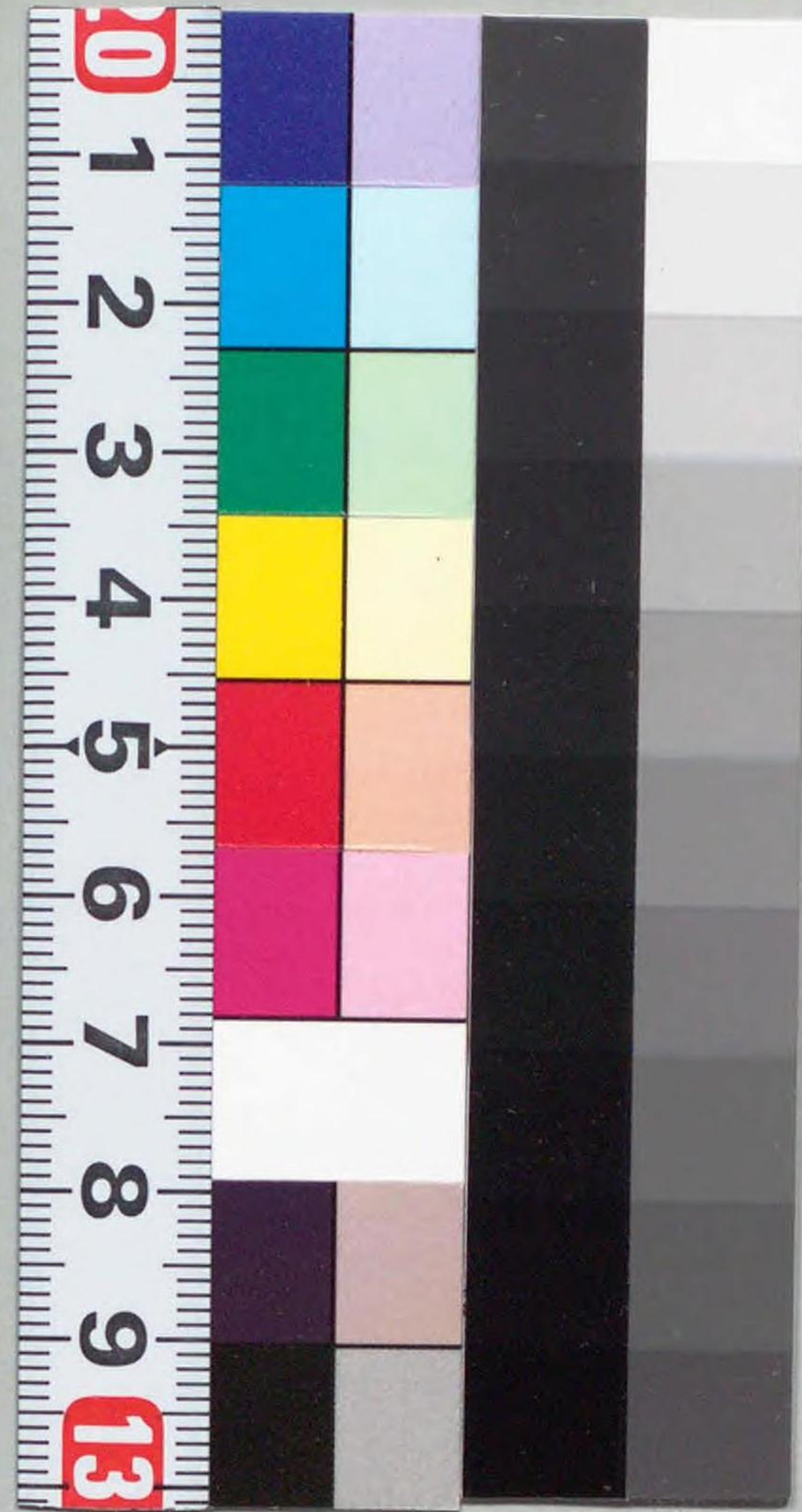


グリム童話名作集
森の小人

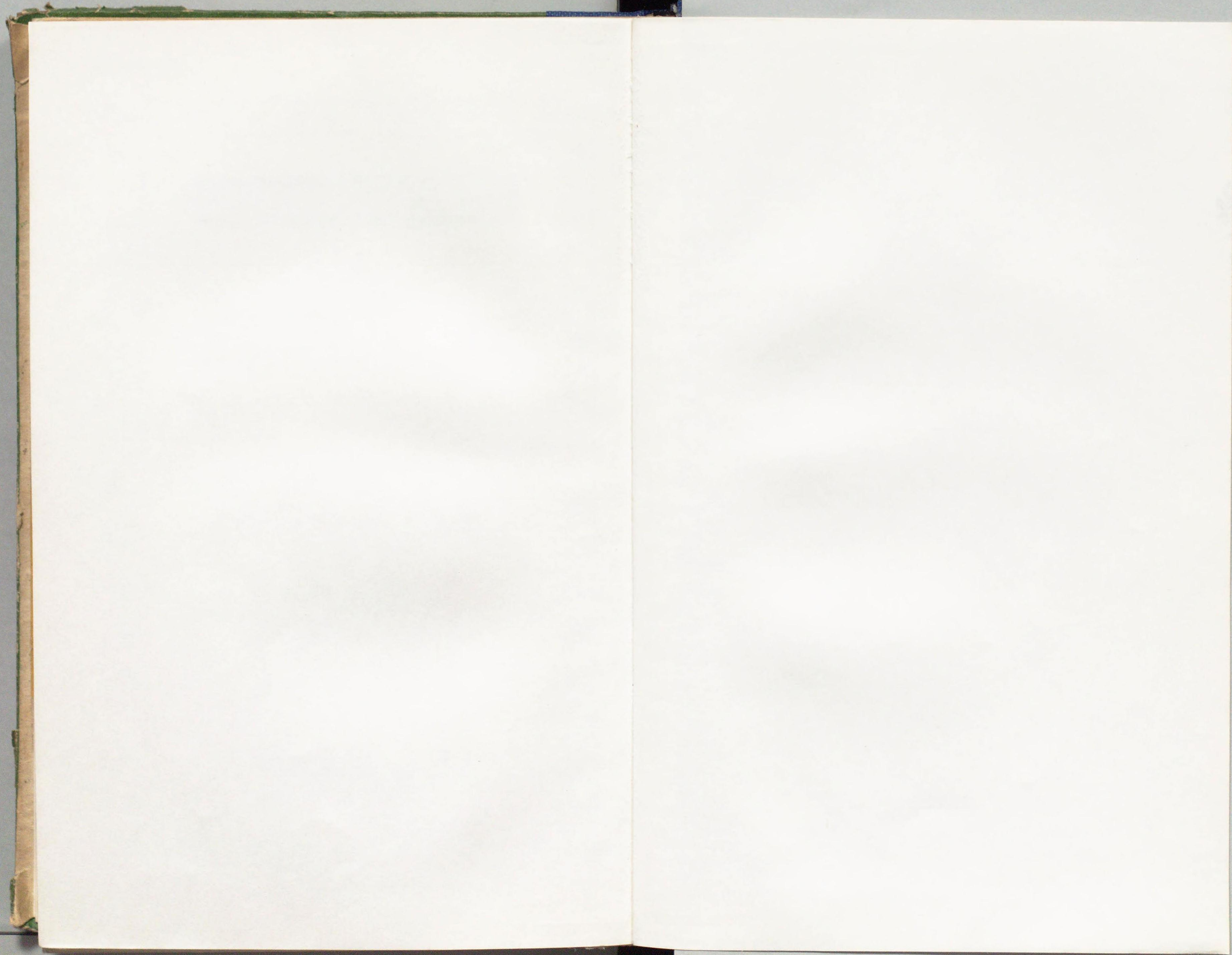


世界おとぎ文庫

11







6020

世界おとぎ文庫

(11)

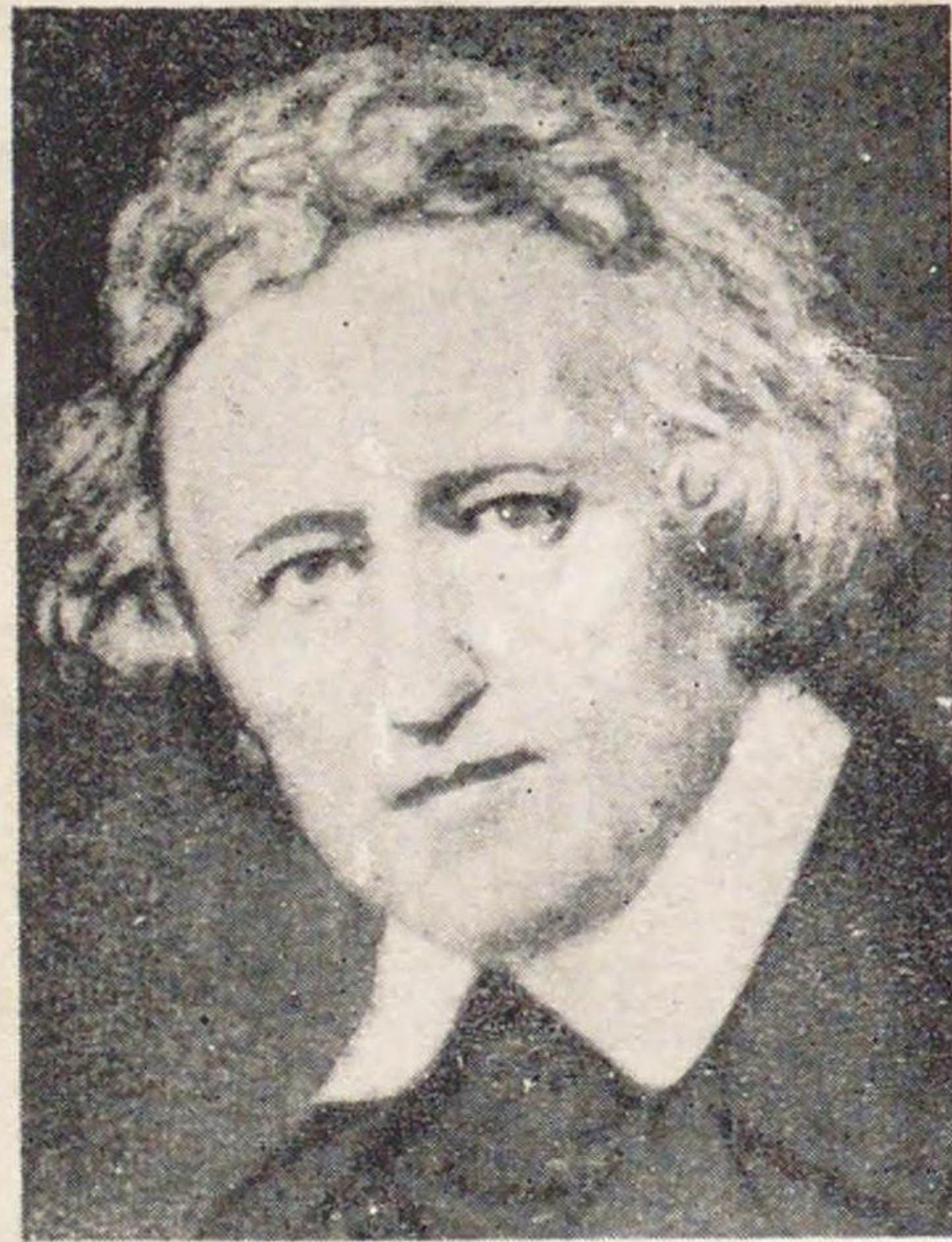
森の小人

楠山正雄編著

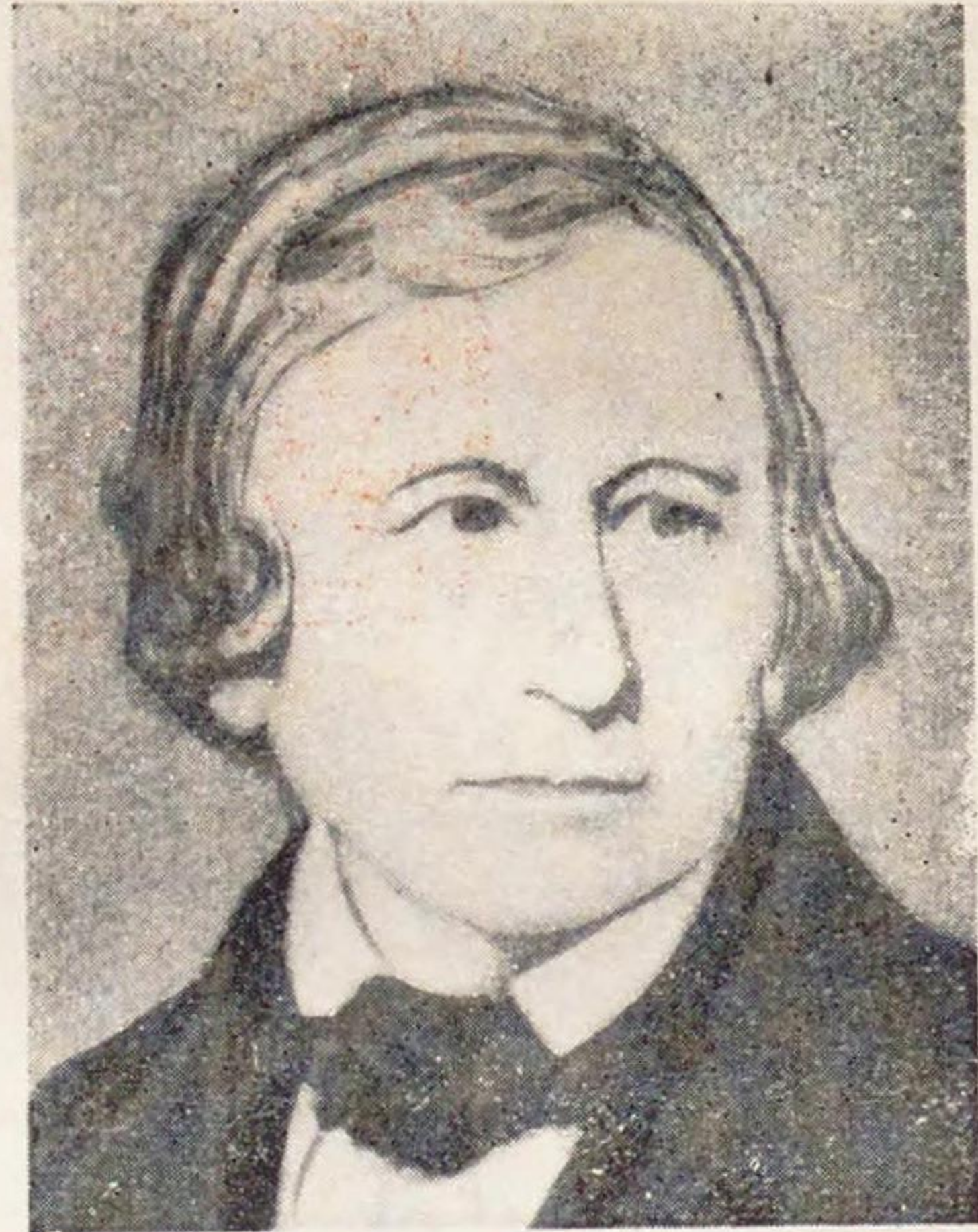


小峰書店刊

グリム兄弟



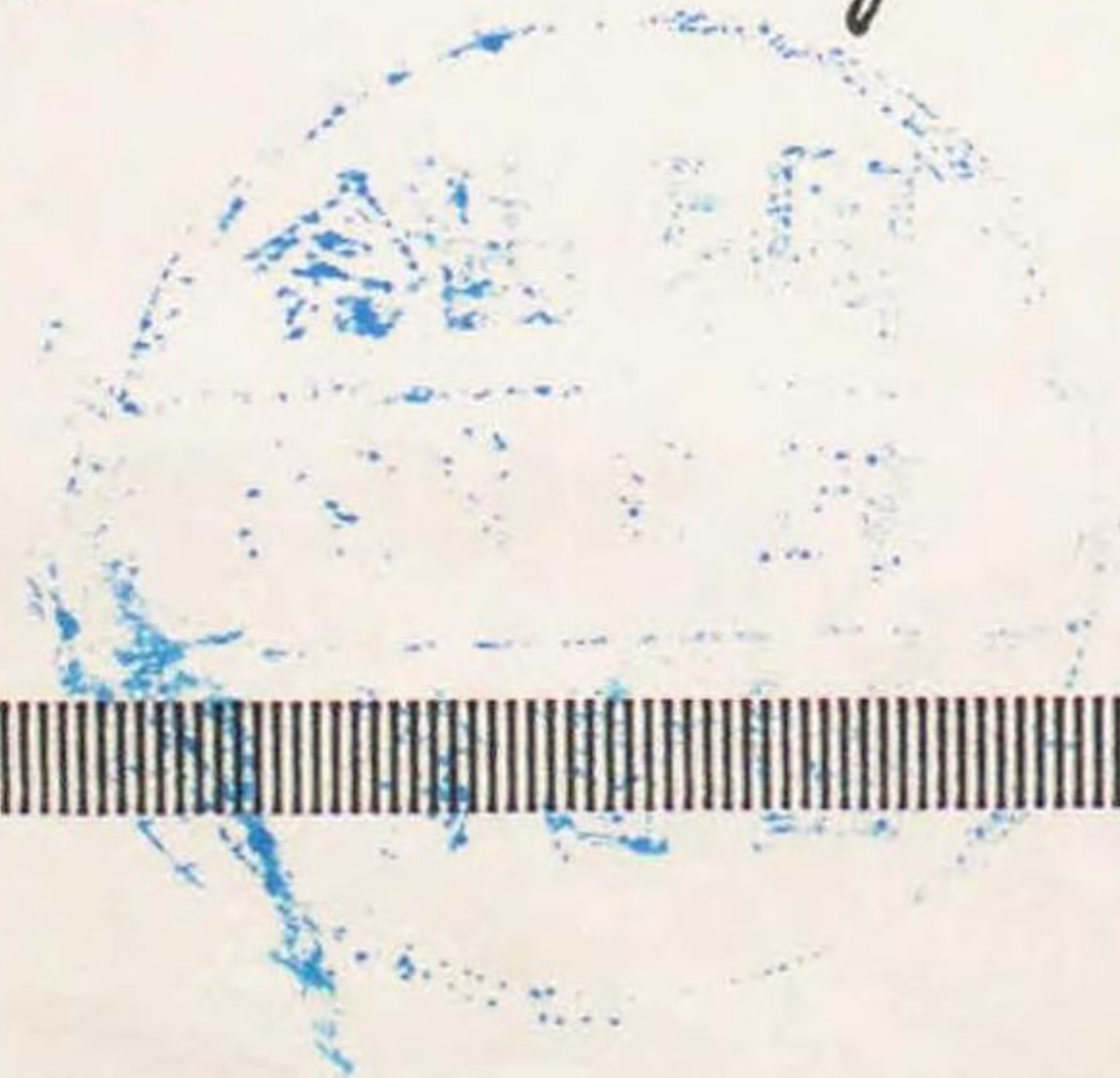
兄・ヤーコフ・グリム



弟・ウイルヘルム・グリム

Jacob Grimm

Wilhelm Grimm



93
G
12



147665



序

話 グリム兄弟の話

(一)

こ
 の上なくなかのいいふたりの兄弟が、ちからをあわせて、ひとつの事業じぎょうを、それももつばら精神せいしん上の大事業だいじぎょうをなすとげた例れいは、そうおおくはありません。そのめずらしい、しかもかがやかしい例のひとつは、グリム兄弟の童話集どうわしゅうでございます。

西暦せいれきで、一八一二年というと、日本では江戸時代えどじだいのおわりにちかく、文化九年という年で、文學のほうで、曲亭馬琴きょくていばきんの里見八犬傳りみはつけんでんという日本はじまってこの方のながい小説が出たり、十返舎一九じっぺんしゃいちゅうが、膝栗毛ひざくりげの彌次喜多やじきただのこっけいで笑わしていた時代です。

この年ドイツでは、グリム兄弟のキンダアウントグハウスメルヒェン——こどもと家のお話集——の第一巻が出ました。つづいてその四年めの一八一五年に

第二巻も出て、すべてで二百の話篇が完成しました。この國ではそのじぶんまだ世界的な大詩人のゲーテが、七十才ちかくの老齡ながらたつしやでいて、半分童話のようなファウスト博士と悪魔の芝居をかいていました。

ゲーテの『ファウスト』が五本の指にかぞえられる世界文學のりっぱな古典であることは、たれ知らないものではありません。では『ファウスト』のつぎに、ドイツの文學ではなにがいちばん名だかいかということになりますと、まず、グリム兄弟の童話集がそのひとつにあげられるのではないでしようか。

ゲーテの文學、カントの哲學、ベートホヴェンの音樂——戦には敗れても、ドイツの文化はながく世界のよろこびでございます。

グリム兄弟のしごと、これらにおとらず、國民と國語を越えて守らなければならぬ世界文化のとうとい寶のひとつでなければなりません。

今日でこそ、世界の文化國民で、じぶんの國の童話集の一冊ももたないものはありませんが、前にいった十九世紀のはじめにグリム兄弟の童話集が世にあらわれるまでは、フランス語に譯された千一夜物語——アラビヤ夜話のほかに、イタリアとフランスとに、半分おとなのたのしい讀物としてつくられたお伽物語の本

が二三冊あつただけでした。グリム兄弟が出て、ことばの學問と、お話の研究と——、このふたつのたちばから、文字にかかれないうまま、半分なくなりかけていた昔話をさがして書きあつめて、これをいわば、國民の文化學——ドイツの國學を、いつかつくり上げるひとつの材料にしようとしたのです。はじめからさういう高大な目的をもつてあつめられたこの童話集が、今日、りっぱな品格をそなえた文學の古典と仰がれることにふしぎはありません。

グリムのドイツ語辭典といえ、兄弟がさいしょのしごとをくわだててから、一生かかつておわらず、百年あまりたつたいまもそのしごとがつづいていとう大辭典ですし、兄グリムのドイツ神話學という四巻もある本は、お話の研究をみごと學問にしあげたきねんの大著述でした。こういう學者たちの手で作られた童話集に、半分おなぐさみにつくつたものところが、めんみつなゆきとどいた心づかいのあらわれていることはいうまでもありませんが、ひとつひとつのお話がじつにむだなく生き生きと話されていて、そのまま動かない童話のみほんになつておどろくほかありません。グリム童話にかぎって、なまじよけいな入れごとをしたり、へたに書きくずしたりすることをゆるしません。

ところで、これだけに童話のかたちをかんべきにしてみせたのは、もっぱら弟グリムの文才のちからでした。

兄グリムはひとり身でとおして、一生を學問にささげましたが、弟グリムは、ヘルマン グリムという、美術史のりっぱな學者で文學の制作もした息子けいこをのこしました。このヘルマンのかいた伯父おじと父のおもいでおもいでの記を、ざっとこれからよんでみましょう。わたしたちにもなつかしいふたり兄弟一代の物語を、これによつて、皆さんに知っていていただきたいのでございます。

(二)

ヤーコブとウィルヘルムヘルムのふたり兄弟は、ほとんどおない年といつてもいい年子こにうまれました。それでもやはりヤーコブのほうが年上らしく、また健康も、よわいわたくしの父のウィルヘルムは、伯父おじのヤーコブにおよびませんでした。伯父おじは一生いっしょう涯妻よがをめとらず、わたくしの父と、兄弟ひとつ家にすんでむつまじく共同のしごとをつづけたのち、ふたりとも、ベルリン府馬太寺またいじの墓地ほちにならべて

ほうむられました。ふたりのグリムは、ともに、南プロイセンの小さい都會とほハーナウの町 マイン河りゅうの流域りゅういき、フランクフルト市の近くちかくに、兄は一七八五年一月四日に、弟は一七八六年二月二十四日に生まれました。伯父と父と、ふたりの誕生たんじ日は、そのじぶん、それぞれにわたくしたちのこども心に、なによりもたのしいお祝い日いわいひでありました。

ふたりは青年時代、ともにカッセルの學校ですごしました。のち、マルブルクの大學にうつつてもふたりいっしょでした。卒業そつぎょうののちはまたいっしょにカッセルの國立圖書館員としよかんいんになり、數年間のあいだ、その大きな書庫を自由にしていました。一八九二年いごは、ゲッチンゲンに七年いて圖書館員としよかんいん、のち大學教授きょうじゆ、さいごの十年は、ベルリンでおくりました。(ともに學士院會員)

ベルリンでさいしよますウィルヘルムが、一八五九年十二月十六日、七十三才で世をさりました。おもいだすと、つい目のまえのことのようにおもわれますが、それは冬の寒い日さむいひでありました。伯父はかぼそい手に、かたい土くれをつかんで、父の墓穴はかやなにたむけていました。それから三年、一八六三年九月二十日には、伯父も七十八才で愛する弟のあとをおつたのです。

ふたりはさいごの日までも元氣をなくさず、研究ざんまいにすべてをわすれて
いました。それでも父はどうかすると、おりおりつかれたようすを見せましたが、
伯父は死ぬまぎわまでみらいの計畫をたてていたものです。

ドイツ人と名のるほどのもので、グリム兄弟の名を知らないものはありませ
ん。ドイツのこどもは、生まれるとまもなく、父母のつぎにこの兄弟の名をなつ
かしくおもいながら成長するのです。「あなたがグリム兄弟のご親類というのは
ほんとうですか。」と、わたくしはこれまでなんどひとにきかれたか知れませ
ん。わたくしが兄弟の實子であり甥でもあるということが、その人たちに親類のよ
うなしたしみをかんじさせるのです。わたくしにとってこれほどよろこばしい名
譽はないのです。たれひとり兄弟の名をそんけいし愛情をもたないものはないの
です。この敬愛の情はこののちも、幾代ながくつがれることでしょう。兄弟の
ために記念の銅像がたてられるときいたとき、すべてのドイツ人はその費用を寄
附することをきそい合いました。とおい外國に出ているものまでが金をおくつて
來ました。こどもと貧しいひとたちは、一錢二錢の金をあつめて持って來ました。
兄弟はやくから父親をなくして、學校はたいてい自習でとおしました。母親

と弟妹をやしなう義務は、はやくからふたりの肩にかかっていた。一八〇六
年、ナポレオンのために祖國が恥辱をうけたときは、進んで祖國の名譽のため、
劍をとって立つけしんをさせたほど、兄弟を憤らせました。と同時に、かれら
はやがてドイツ帝國のかならず回復することを信じ、自分たちはむしろ學問の研
究によつて國民としての獨立をいじしようとする希望を、これがかためさせる機
會にもなりました。

伯父と父についてのわたくしの記憶は、ゲッチンゲン時代からはじまるもので
すが、そのころわたくしたちこどもらが父と「アババ」——わたくしたちは伯父
のことをそうよんでいました。——の書齋にはいるときは、そつとじゃまをしな
いようこころをくばったものです。しんとした書齋のなかには、ペンのきしる音
ばかり高くきこえました。ときどき伯父が小聲にささやく聲がしました。伯父は
顔を紙の上にちかくあてて、みじかいペンでせつかちに書きました。父は長い鴛
ペンのさきにインクをひたして、かんがえかんがえ筆をとりました。ふたりのよ
うす、顔の色はたえずかわりました。

まゆをあげたり、ひそめたり、時にはぼんやり空を見つめたりすることもあり

ました。書架から本をさがしだしてしきりとページをくる時もありました。なに
びとも、この神聖なしずかさをやぶるものがあるとは思われません。

ゲッチンゲンにいたとき、兄弟のしごとべやは、ひろい庭園のなかにあつて、一本
のぼだいじゆといけ垣がそとをかぎっていました。その書齋べやの窓には、ふた
りのすきな草ばながいつもかざられていました。伯父はアラセイトウとヘリオト
ロップの花がすきでした。父はさくらさうのやさしいかおりをよろこんでいまし
た。ふたりはゲーテとおなじように、自然をいつもかわらぬころのお友だちに
していたのです。まいねん春になって花がさき草が芽をふくたんびに、ふたりは
こどものようによろこんでいました。

父はこどものころから心臓にやまいがありましたので、山野を自由にあるさま
わつて、自然にしたしむ機会を多くもつことができませんでした。

伯父はしかし、パリにもウィーンにも行き、イタリア、オランダ、スエーデン
と旅行してまわりました。よわい父は、とても、がんじょうな伯父の足にはかな
わなかつたので、ふたりいっしょに散歩に出るといふこともなかつたのです。

(三)

『こどもと家庭のおとぎばなし (Kinder- und Hausmärchen)』の計畫がはじめ
て立てられたのは、グリム兄弟のカッセル図書館時代でありました。この集成の
しごと、数おおい兄弟の共同労作が、とうとい實をむすんだひとつでありまし
た。兄弟がこのしごとにいそしんだなよりの目的が、同胞の若い少女たち
に、清らかな慰樂をわかつかつということにあつたことはいふまでもありません。一
八二二年にはじめてだした「おとぎばなし」第一版の「ささげることば」には、
「ちいさきヨハンネス フライムントのために、この書をエリザベート フォン
アルニム夫人にささぐ。」

と、しるされています。このフライムントというのは、親しくしていた詩人アキ
ム フォン アルニムとエリザベート夫人とのあいだに生まれた第一の兒で、う
まれてまだいくらにもならないおさな子の名であつたのです。しかしその一方で
は、おなじ本の序文に、

「この『こどもと家庭のおとぎばなし』をあつめたわれわれとしては、この本がもつばらこどもと家庭のためにつくられたものとばかりはかんがえられたくない。それよりかほんとうの目的とすることは、共同のとうといたから、國民のうつくしい詩の空想のなから咲きだした、このなつかしい花を、もういちどあかるい日の光のてるなかにいだそうためである。」
ともかかれています。

この第一版は、いまなおわたくしの手もとになくさずもっています。

本はうつくしい紙に印刷されていて、これにはまだ「第一巻」とはつきり書いてはありませぬ。ひょうだいの上にはみどり色の絹糸で、

「あの手なしむすめのために

ふたつあるむすめの手によるこびあれ。」

というもんくが、ししゅうされていきました。

序文の日付は「一八二二年十月十八日」となっていますが、そのあとに、伯父のヤーコプが「あたかもライプチヒの戦の前一年」と書き入れました。その上さらに父の手跡でいろいろ書き入れがしてあるなかに、「序文はウィルヘルム作り、

ヤーコプ二三箇所筆をくわえる。」と記されています。またヤーコプの手でできた物語が「ラプンツェル」「金の鳥」などの三、四篇であることも記されています。これで『おとぎばなし』の大部分は父ウィルヘルムの手になったことがわかります。またその後第三巻（考證部）を、ほとんど父ひとりの力で、一八二二年に完成しました。

父はまた第一巻の自用本に、かき改めたことばをあれこれと書き入れているほかに、たいていの物語には、その材料になった、もとの話の、話し手の名をしるしておきました。そのうちに、わたくしの母のドロテアが、まだ父の妻とならない前の名で記されているのが見られます。母は一七九五年の生まれでしたから、母の名のはじめてしるされている一八一一年に、母は十六才の少女であったのです。このわかい母の口から、父はなかにもすぐれたおとぎばなしを、ちょうど十二種もきいたのであります。第二巻にのせられた話のうちで、母から出たものは、母が自分の口からわたくしに語ってきかせました。たとえば正直でなさいかい貧乏人の小むすめに、天から星の銀貨のふりかかる話は、そのひとつでした。母の父のウィルトという人は、ヘルンの市民にはなっていました。カッセルにく

すりやをひらいていました。その近所にわたくしの祖父が家をかりていて、その縁でわたくしの父とウィルト家のむすめとが知り合うことになったのです。その家についている廣い園のなかで、父はまだむすめだった母から、いろいろの昔話をきいたのです。

かようにグリム兄弟のおとぎばなしは、すぐ人から口づてに聞きとった材料が本になったというものの、兄弟はただ口づつしをそのまま筆に書きのこしたというだけではありません。昔話を口づつしに聞いては、書きあつめるだけのことなら、せひグリム兄弟をまたないでも、おそかれはやかれ、ほかの人びとの手でおなじしごとができあがつたにちがいない、と言うものがあれば、それはあまりに兄弟の心勞を思わないものです。たとえば「ヘンゼルとグレーテル」の話のはじめは、わたくしの母から父のウィルヘルムがきいたにはちがいないのですが、父がべつに出した第三卷考證の卷で、いちいち出所をあげてあるなかに「ヘンゼルとグレーテル」については、「ヘッセンにて得たるさまざまの物語より」としてあります。

まったく、第一版に出した話と、その後の改訂版とくらべると、父がただ母か

らきただけでまんどくせず、そののちもべつの材料の手に入るにしたがつて、なにくれとあらためていったことがわかるのです。例をこのお話のことにすぐれた一節にとつてみましょう——

ヘンゼルとグレーテルの兄妹が、森の中にまよいこんで魔女の家にとどりつく、なかから魔女が、

「もりもり がりがり かじるぞ かじるぞ

わたしのこやを かじるなだれだぞ。」

とこえをかける、こどもがびつくりする、そこへ魔女がすがたをあらわすことに第一版ではなっていました。それをのちに、母がさらに記憶をさぐって、このひと場のおもむきをいちだんと生き生きとさせました、それによると、こどもは魔女にこたえて、

「かせ かせ

そらの子。」

という、それから魔女が出ることになるのです。

第一版とつぎつぎの版とをくらべると、そのあいだに改め加えられたあとのい

ちじるしいにおどろきます。また第三卷の考證を讀めば、いろいろとひろくしらべて、いちいちの話に各國の童話のそれぞれ似た所、似ない所をあげて、くわしいひかくとぶんせきをやってみています。グリムおとぎばなし二百話、その一話ごとに編者の人しれない苦心はこめられているのです。

グリム兄弟のために、材料をあたえたのは、母のドロテアだけではありませぬ。母の實家のウィルト家の人びとは、みななにがしかの材料をせつせともち寄つたものです。母の女きょうだい六人、そのうち姉が三人で、そのひとりのグレイチェンは、ことにきりようよしで、才もすぐれていましたが、このひとの口から「拇指」や「猫と鼠の組合」や「六羽の白鳥」そのほかの物語が語られました。この人ははやくおよめに行き、若くしてなくなりました。それでのこして行つた子を、わたくしの母が手もとにひきとつて育てていました。みなわたくしたちのおさな友だちです。

わたくしの母とグレイチェンきょうだいのほかには、きょうだいの母のウィルト夫人も話し手のひとりでした。この人は有名な言語學者デスナアの孫にあたる人です。この夫人からも、わたくしの母は昔話をしてもらったでしょうけれど、それにもましてちいさい母のために、いっそうゆたかなおとぎばなしの世界をひらいてみせてくれたのは、「マリイばあや」とよばれたウィルト家の乳母で、その夫は戦争に行つて死にました。この女の口から「ちいさなあにもうと」や「赤ずきんちゃん」や、「手なしむすめ」や「いばら姫」などのうつくしい物語が、それからそれと語られつきなかつたのでございます。

ウィルト家のきょうだいたちのお友だちに、ハッセンブリウリ家のふたりのむすめ、アマリイとヤネットのきょうだいがありました。この人たちのやさしいくちびるからも、うつくしい「雪白小姫」やおかしい「ルムペルシニルツヒエン」などの物語が語られました。このほかにアウグスト フォン ハックストハウゼンや、ヨルジス夫人や、それから詩人アキム フォン アルニムなどの名が、物語の語り手として記されています。

一八一五年に、「おとぎばなし」の第二卷が出ました。序文の日づけは、一八一四年九月三十日です。

この序文のなかに、新しい話し手として、フィーメニン夫人という名があらわれています。この女はカッセルにちかいツェーレン村にすむ百姓のおばあさんで

した。年はとつてもからだはまだがっちりしていて、わかわかしく、かがやく目の光にむすめざかりのときのうつくしさをしのばせました。たいへん物おぼえのいい老人で、こどものときから耳にした昔話を、こまかいところまでわすれずにおぼえていて、のぞまれるまま、なんどでもくりかえして、そのたびごとに、筋道をすこしもまちがえないばかりか、話のあやがよけいくわつたと序文には書いてあります。このおばあさんはちょうど第一巻のときの「マリイばあや」のよなものでした。この本の第二版は一八一九年に出版されましたが、その第二巻のとびら繪には、「おとぎばなしの夫人」としてフィーマニン夫人の肖像を、いちばん下の弟のルットウイヒ グリムがかいて、銅版畫にしたものをのせています。またその第一巻には、おなじ人の手になった「ちいさなあにいもうと」の口繪、きょうだいが森の中にいだきあつてねむっているうしろに、白い百合の花をもつた天使の立っている繪がくわえられました。この叔父はほかにもたくさんおとぎばなしのためにさしえをかいだものでしたが、世に出たものはわずかでした。かようにしてわたくしたちのきょうだいは、うまれたときから、おとぎばなしの世界にそだてられ、その物語をそのままにふるいふるい歴史の事件のようにお

もつていました。ほんとうにおとぎばなしのなかのふしぎは、いつの世のこどもにとつても、あたらしいふしぎです。すべてその中の事件は、それぞれにつながりあつたものようにおもわれ、そういう事件の入れかわり、立ちかわつておこる、おとぎばなしの大きな國が、どこかにあるようにおもわれていました。すべての時代、すべての國民のこどもは、自然にたいして、ある共通したかんがえをもつていて、じぶんと同様に生きてうごいているものとかんがえています。森も、丘も、火も、星も、河も、泉も、雨も、風も、人間のようには物もいえば、おこつたり、よろこんだりもする、そして人間の運命のなかに立ちまじつて、いろいろなわざをするともおもっているのです。しかし、こどもばかりではない、おとなの世界でも、かつてはこういうかんがえが國民をしはいていた時代がありました。ドイツ民族の祖先が、そのおさない時代において、どういふ信仰と、言語と、傳説とをもつていたか、それを研究するのが、兄ヤーコブのしごとでした。それとはちがつて、弟ウィルヘルムは、ただ過去にさかのぼつてしらべるだけでは足りない、現在のために、なにかあたらしいことをしたいと思つたのです。おとぎばなしはたいいていウィルヘルムの仕事でした。かれはこれによつて自分の



もくじ

森の小人

序話 グリム兄弟の話

かえるの王さま……………三

こわいもの知らずが旅に出たお話……………一六

おおかみと七ひきのこどもやぎ……………四五

ヘンゼルとグレーテル……………五四

ちからをみせたひとつの創作をのこすことができたのです。

一八九六年には、グリム兄弟の記念像が、ハーナウにたてられるはずで、わたくしは前もってその原型を見せてもらいました。それはウィルヘルムがいすに腰をかけ、そのひざに一冊の本がひらかれたままおいてある、しかしかれの目は、本をはなれて、とおくの空を見つめています、これはわたくしたちがこどもが生まれるによく目に見たすがたで、その高いりつばなひたいには、すぐれた思想が生まれかけているといったふうに見えます。兄のヤーコブはそのそばに立って、片手をいすのひじにのせたまま、くぼんだ目でじつとなにかをさぐりもとめるように、本のなかに見入っています。どんなにすぐれた藝術家も、この古今にたぐいまれな共同の精神的事業を、これだけに単純に、しかも生きて物いうような、みごとさであらわしてみせることはできまいと思われるほどです。この銅像の台石には、兄弟のさいごのしゅんかんまで、そのそばをはなれなかったわたくしたちの母のすがたも、ともにさざみのこされるはずでございます。



いばら姫……………100

↓
 雪ゆきじろ白小姫（シユネーウイットヒエン）……………111

ルンペルシユチルツヒエン……………137

ふたり兄弟……………147

ハンスの大もうけ……………155

星の銀ぎんか貨……………160

うさぎとほりねずみ……………164

お百姓ひやくしやうと悪魔あくま……………166



仕立屋のちび勇士……………168

灰だらけ姫（シンデレラ）……………170

赤ずきんちゃん……………172

ブレーメンの町樂隊がくたい……………174

手なしむすめ……………176

「おならべ、テーブル」、「金きんか貨を生むろば」
 それから「袋ふくろ出ろ、棒ぼう」のお話……………178

六羽の白鳥……………180



大名人のどろぼう……………三五

こども聖者物語……………三五九

附篇 カリフのこうづる(ハウフ童話)……………四〇一

あとがき

装 幀……………恩 地 孝 四 郎
 さしえ……………原 本 よ り

森の小人



かえるの王さま

一

む かしむかし、たれのどんなのぞみで
も、おもうようになつたときのこと

でございます。

あるところに、ひとりの王さまがいました。その王さまには、うつくしいおひめさまが、たくさんありました。そのなかでも、いちばん下のおひめさまは、それはそれはうつくしい方で、世の中のことは、なんでも、見て知っていらっしゃるお日さまでさえ、まいにちてらしてみても、そのたんびにびっくりなさるほどでした。

さて、この王さまのお城のちかくに、こんもりふかくしげった森があつて、その森のなかに一本あるふるいぼだいじゆの木の下に、きれいな泉が、こんこんとふきだしていました。あつい夏の日ざかりに、おひめさまは、よくその森へ出かけて行って、泉のそばにこしをおろしてやすみました。そして、たいくつすると、金のまりを出して、それをたかくなげでは、手でうけとったりして、それをなによりおもしろいあそびにしていました。

ある日、おひめさまは、この森にきて、いつものようにすきなまりなげをして、あそんでいるうち、ついまりが手からそれておちて、泉のなかへころころ、ころげこんでしまいました。おひめさまはびつくりして、そのまりのゆくえをながめていましたが、まりは水のなかにしずんだまま、わからなくなつてしまいました。泉はとてもふかくて、のぞいてものぞいても、底はみえません。

おひめさまは、かなしくなつて泣きだしました。するうちに、だんだん大きな聲になつて、おんおん泣きつづけるうち、じぶんでじぶんをどうしていいか、わからなくなつてしまいました。

おひめさまが、そんなふう泣きかなしんでいますと、どこからか、こうおひめさまによびかける聲がしました。

「おひめさま。どうなすつたの、おひめさま。そんなに泣くと、石だつて、おかわいそうだと泣きますよ。」

おや、とおもつて、おひめさまは、聲のするほうをみまわしました。そこに、一びきのかえるが、ぶよぶよふくれて、いやらしいあたまを水のなかからつきだして、こちらをみていました。

「ああ、水のなかのぬるぬるびつちやりさん、おまえだつたの、いま、なにかいったのは。」と、おひめさまは、なみだをふきながらいいました。「あたしの泣いているのはね、金のまりを泉のなかにおとしてしまったからよ。」

「もう泣かないでいらっしやい。わたしがいいようにしてあげますからね。」

「じゃあ、まりをみつけてくれるっていうの。」
「ええ、みつけてあげましょう。でも、まりをみつけて来てあげたら、なにをおれいにくださいますか。」

「かわいいかえるさん。」と、おひめさまはいいました。「おまえのほしいものなら、なんでもあげてよ。あたしのきているきものでも、光るしんじゆでも、きれいな寶石でも、それから金のかんむりでも。」

「いいえ、わたしはそんなものがほしくはないのです。けれど、もしかあなたにわたしをか
わいがってくださいって、わたしをいつもおともだちにして、あなたのテーブルのわきにす
わらせてくださって、あなたのお皿から、なんでもたべて、あなたのちいさいおさか
ずきで、お酒をのましていただいて、よるになったら、あなたのかわいらしいお床とこのそば
で、ねむってよいとおっしゃるなら、わたしは水のなかから、金のまをみつめてきてあげ
ましょう。」と、かえるはいいました。

「ええ、いいわ、いいわ。金のまをとってきてくれさえすれば、おまえのいうとおり、
なんでもやくそくしてあげるわ。」と、おひめさまはこたえました。そういいながら、心
の中では、「かえるのくせに、にんげんのなかま入りしようなんて、ほんとうにずうずう
しい、おばかさんだわ」と、おもっていました。

かえるは、でも、約束やくそくのとおり、水のなかにもぐって行きました。しばらくすると、ちゃ
んと金のまを口にくわえて、ぴよこんとうかび上がってきました。そして、

「さあ、ひろってきましたよ。」

そういって、草のなかにまを置きましました。ところが、おひめさまは、そのまをつか
むなり、ありがとうともいわず、とんでかえって行きました。

かえるは大声をあげて、

「まってください、まってください。」と叫びました。「わたしもいっしょにつれてって。わ
たしはそんなにかけれられない。」

けれど、かえるが、うしろでいくらぎ
やあ、ぎやあ、大きな聲でわめいたつ
て、なんのたしにもなりません。おひ
めさまは、てんでそんなものは耳にも
はいらぬのか、とツとツとうちのほ
うへかけだして行ってしまつて、かえ
ることなんか、きれいにわすれてい
ました。

かえるは、しかたがないので、すご
すご、もとの泉のなかへもぐって行き
ました。



そのあくる日のことでした。

おひめさまが、王さまや、のこらずのごけらい衆しゅうといっしょに、食事のテーブルにむかつて、金のお皿でごちそうをたべていますと、そとでたれかが、ぴっちゃり、ぴっちゃり、大理石のかいだんを上がってくる音がしました。そして、上まで上がってしまうと、戸をとんとたたいて、

「王さまのおひめさま、いちばん下のおむすめご、どうぞこの戸をあけてください。」という聲がしました。

おひめさまは立ち上がって行って、たれかしらみようとおもって、戸をあけますと、そこに、きのうのかえるが、べっちゃりすわっていました。

おひめさまは、ぎよつとして、ばたんと戸をしめるなり、知らん顔で席にもどりました。でも心配で心配でたまりません。おひめさまが胸をどきどきさせているのを、王さまはちやんと見ておいでで、

「ひいさん、なにをびくびくしておいでだい。戸のそとに、大入道の鬼おおにゆうきうが来て、おまえをさらって行くとうでもしているのかい。」とたずねました。

「あら、ちがうの。」と、おひめさまはこたえました。「大入道の鬼なんかじゃないわ。でも、きみのわるいかえるが来て。」

「そのかえるが、おまいにどうしようというのだね。」

「あの、おとうさま、それはこういうわけなのよ。あたし、きのう、いつもの森の泉のところであそんでいましたらね、金のまりが水のなかにころげおちました。それであたしが泣いていると、かえるが出てきて、まりをとってくれましたの。それから、かえるがしつこくたのむもんだから、じゃあお友だちにしてあげるって、あたしかえるに約束やくそくしてしまいました。まさか、かえるが水のなかから、のこのこやってこようとは、おもわなかったんですもの。それが、あのとおりやって来て、なかへ入れてくれっていうんですもの。」

そのとき、またろうかの戸をとんとたたいた音がしました。そうして、大きな聲でよびました。

いちばん下の おひめさま、

あけてください たのみます。
つめたい泉の わくそばで、
きのう やくそく したことを、
あなたは おぼえて いるでしょう。
いちばん下の おひめさま、
あけてください たのみます。

すると王さまはいいました。

「それはおまえがいけないね。いちどやくそくしたことは、きつとそのとおりにしなければなりません。さあ、はやく行って、あけておやり。」

おひめさまはしぶしぶ立って、戸をあけました。とたんに、かえるはぴよこんととびこんで来て、それから、おひめさまのあとについて、ひよこひよこ、いすの所までやってきました。

かえるは、そこにしゃがみこんで、上をみながら、

「わたしも、そのいすに上げてください。」といいました。おひめさまがもじもじしてい

ると、おとうさまがまた、かえるのいうとおりにしておやりといいました。

おひめさまはしかたなく、かえるをいすにのせてやりました。

するとかえるがまたいいました。

「どうぞ、わたしを、テーブルの上ののせてください。」

おひめさまが、かえるをテーブルにのせてやると、こんどは、

「さあ、その金のお皿をすつとわたしのほうによせてください。そうするとふたりいっしょにたべられるから。」といいました。

おひめさまは、かえるのいうとおりにしてやりました。ほんとに、かえるが、ぴちやぴちや、さもおいしそうに舌づつみうつたべているそばで、おひめさまは、ひとくちひとくち、のどにつかえるようでした。

かえるはたべただけだと、おなかをまえへつきだして、

「ああ、おながはって、ねむくなった。おひめさま、さあ、わたしをあなたのおへやにつれて行ってください。かわいらしい、あなたのきぬのお床とこのなかで、わたしはゆっくりねむりたい。」

おひめさまは、もうがまんができなくなって、しくしく泣きだしてしまいました。ほん

とに、ぬるぬる、ぴちやぴちや、さわるのもきみのわるいかえるが、おひめさまのきれいなお床のなかで、ねむりたいなんていうのですもの、おひめさまがかなしくなるのもむりはありません。

するとまた王さまが、

「泣くことがあるか。たれでも、こまっているとき、たすけてくれたものに、あとで知らん顔するのは、いけないことだよ。」といいました。

おひめさまは、さもきみわるそうに、指のさきでそつとかえるをつまみあげて、上のおへやまでもって行くと、そつと隅すみつこにおきました。そうして、じぶんだけが、お床にはいつてしまいました。

ところが、かえるは、さつそく、のこのこはいだしてきて、

「ああくたびれた、くたびれた。はやくゆつくりねむりたい。さあ、そこへ上げてください。でないと、おとうさまにいつけるから。」といいました。

これでおひめさまは、すつかり腹が立ちました。そこでいきなりかえるをつかみ上げて、ありつたけのちからで、したたか、壁かべにたたきつけました。

「さあ、これでたんとらくにねむるがいい。ほんとにいやなかえるつたらないよ。」

ところで、どうでしょう。かえるは、ゆかの上にくろげたとたん、もうかえるではなくなって、世にもうつくしいやさしい目をした王子にかわっていました。

さて、この王子が、おひめさまのおとうさまのおぼしめしで、おひめさまのお友だちでも、おむこさまであることになりました。そのとき、王子はあらためて、じぶんの身の上の話をして、あるわるい魔法まほうつかいの女のためにのろわれて、みにくいかえるの姿にかえられたが、それを泉のなかからたすけだして、もとのにんげんにかえしてくれるものは、この王さまのおひめさまのほかになかったといいました。それで、あしたはもうさつそく、ふたりつれだって、じぶんの國にかえって行くつもりだともいいました。

三

それでふたりはゆつくりやすみました。そして、あくる朝、お日さまがにこにこ、ふたりをお起しになるじぶん、八頭やっとうだての白馬をつけた馬車が、はいつて來ました。どの馬も、あたまに白いだちょうのはねをかぶって、金のくさりをひきずっていました。馬車のうしろには、わかい王さまのごけらいが、しゃんと立っていました。これが忠義もののハインリ

ヒでありました。

忠義もののハインリヒは、鐵のたがを三本も胸にまきつけていました。それは、ご主君しゆくんがかえるにされてしまったので、かなしくてかなしくて、いまにも胸がはれつしそうになつたので、やつとたがをはめて、おさえていたのです。たいせつな王さまが、もとの姿にかえつたので、きょうさっそく、八頭だての馬車が、おむかえにきたのです。忠義もののハインリヒは、おふたりを馬車のなかに入れてあげて、じぶんはまた馬車のうしろにしゃんと立ちながら、ご主君のまた世に出たことをおもつて、ぞくぞくするほどうれしくてなりませんでした。

(14)

さて馬車がすこしはしりだしたとおもうころ、王さまのお耳のうしろで、ばちり、ばちり、なにかはじける音がしました。わかい王さまはそのとき、うしろをふりかえつていいました。

「ハインリヒ、馬車がこわれるぞ。」

「いいえ、いいえ お殿さま、

あれは馬車では ござんせぬ。

せつしゃのむねに はめたたが。

殿さま、げえろにならしゃって、

ぎやあぎやあ、泉でなかしやるで、

はりさけそうな このむねを、

むりにおさえた そのたがが。」

それでも、ばちり、ばちり、また二どもはじける音がしました。わかい王さまは、そのたんびに馬車がこわれるのではないかとおもいました。けれども、それはやはり、ご主君がにんげんにかえつて、たのしい日をおくられることになったので、ふさがっていたハインリヒのむねが、ひらけたため、胸のたががはれつして、とびちる音でございました。

(15)

こわいもの知らずが旅に出たお話

一

む すこをふたりもったおとつあんがありました。ふたりのうち、上のほうは、りこうではきはきしていて、なんでもしゃんしゃんやっのけました。そのかわり、下のほうときは、ぬけ作で、わからずやで、なにひとつならおうともしないし、できもしないので、たれもこのむすこをみると、

「これじゃあ、おやじさん、いつまでもらくはできませんよ。」と、言い言いました。

そんなわけで、なにかしごとというところ、きまつて、上のむすこがそれをやらされました。それがずいぶんおそくなつて、ああしろころしろといわれるので、もうまるで夜なかに、用の使に出ることもめずらしくありませんでした。そんなときどうかして、墓場の中をぬけるとか、なにかうすきみわるい場所をとるかしなければならぬようになる、むすこはいやがつて、

「ああ、おとつあん、ごめんだよ、あんなところへ行くなあ、おらあ、ぞつとするせ。」と、いいました。

これはつまりこわいから、ぞつとするというわけでした。

また、晩、ろばたにみんなよつて話しているときなどに、ちり毛もとのさむくなるような話をきかされることがあつて、聞き手がよく、「うわあ、ぞつとするぞ。」ということがありました。下のむすこは、そんなとき、すみっこでいっしょに話をきいていて、まるでなんのことかわけがわかりませんでした。

「なんだい、みんな口ぐせのように、ぞつとする、ぞつとするっていうけれど、おらあぞつとなんかしやしないせ。こりやあきつと、おいらなんかにはわからない、なにかの術じゆつなんだな。」そのうち、なんとおもつたか、あるときふと、この小むすこに、おとつあんがこんなことをいいました。

「おい、おめえもすみっこにくすぶつてばかりいすと、よく聞くがいい。てめえ、そのとおりにくすぶつて大きい大きなからだになりやがつて、なにひとつパンをかせぐ種こがねになることをおぼえないつて法はないぞ。みろ、あにきはあのとおりせつせとやっているのに、てめえときたら、てんで箸はしにも棒ぼうにもかかるんじゃないからな。」

「なんだな、おとつあん。」と、この小むすこはこたえました。「おいらだつておぼえた
いことがあるんだよ。うん、そういくもんなら、おいら、そのひとつ、ぞつとするってこ
とをおぼえたいんだ。これだけは、どうにもまるでおいらにやわからないんだ。」

すると、そばで、上のむすこがきいてわらいました。そして、「やれやれ、おれの弟
は、なんて大ばかなんだ。このぶんじゃあ、このさき一生、ものになるまい。一升袋は一升
しかはいらないっていうからな。」とかんがえていました。

おとつあんは、このとき、ためいきまじりに、こうこたえました。

「ぞつとすることを、おぼえてくるってのかい。うん、よかろうよ。だが、おまんまの種
にやなるまいよ。」

すると、そこへ、お寺のお納所なつしよの坊さんがたずねて来ました。おとつあんは坊さんを
つかまえて、末のむすこのぐちをいって、なにをやらしてもからきしだめで、てんでなに
かを知ろうともおぼえようとしなくて困る、とうたええました。

「つもつてもごろうじろ。このやろうに、てめえなにをしてバンをかせいでいくつもりだ
とききますとね。ぞつとするってことをならわしてくれ、なんとぬかすじゃありませんか。」
「それくらいのことでもいいなら、」と、坊さんはいいました。「わしの所にもおぼえら

れようよ。まあ、よこしてごらんじやい。わしがひとつ、なんとかしこんでみようかの。」
おとつあんは、一なるほど、この小僧こぞうでもしこめばちつとはものになるかな」とかかんが
えて、さつそくそういうことにねがいました。

一一

まずそんなしだいで、坊さんは小むすこをお寺へつれて行きました。小むすこはそこ
で、鐘つきをすることになりました。

二三日して、坊さんは、真夜中に小むすこをおこしました。そして、これからおきだし
て、お寺の塔にのぼって、鐘をならすんだといいました。

坊さんはそういつけておいて、「ぞつとするってどんなことだか、さつそくおぼえさせ
てやるぞ。」と、心のなかでかんがえながら、こつそりさきまわりして出て行きました。

さて、小むすこが塔に上がって行って、からだを鐘の方にむけて、鐘づなをつかもうと
すると、ふと、階段かいたんの、ちょうど音をだす鐘窓とむきあつた所に、なにかまっ白いものい
る姿をみつけました。

「だれだあ、そこにいるなあ。」と、小むすこは聲をかけました。けれど、あいてはしずまりかえって、音も立てず身じろぎもしませんでした。

「返事をしろよ。」と、小むすこがどなりました。

「さもなきや、消えてなくなれよ。こんな夜なかに出てきて、なにをしようってんだ。」

坊さんは、でも、つつ立つたままうごきません。どうかして、小むすこに、お化はけだとおもわせるつもりでいました。そこで、小むすこは二どめにどなりました。

「こら、そこになんの用があるんだ。まっとうな人間なら、口をきけよ。さもなきや、段段からつきおとすせ。」

坊さんは「まさかそんなひどいことをするつもりじゃなからう。」とおもって、ぐっともすつとも聲を立てず、ただ石像せきぞうみたいにつつ立っていました。そこで、小むすこは三どめにどなってみました。そしてそれでもだめだとみると、よしそれではとばかり、たちまちかけおりに行って、化物ばくものを階段かいでいからけおとしました。それで、化物は十段ほどころころところげおちて、すみっこにはいつくばったまま、ぐうのねも出せずにいました。そのあと、小むすこは、すまして鐘をかんかんとならして、お寺にもどって、ぐっともいわずに、それなり寢床にもぐりこんで、また眠りつづけました。

坊さんのおくさんは、ながいこと、坊さんのかえるのを待っていました。いつかえるようすもありません。しまいには、心配になってきたので、小むすこをよびおこして、

「だんなさまはどこに行っておいでだか、おまえ、知らないかい。おまえより少しさき、塔へ出ていらしたのだがねえ。」とたずねました。

「ううん、知らないや。」と、

小むすこはこたえました。

「ただ、鐘まどにむかいあつた所の段段にだれか立っていてね、なんかいっても返事もいし、あっちへ行けていっても行かないから、たぶんどろぼうか、いたずらしに來たやつだろうとおもってつきおとしてやりました。まあ、あなた、行ってみといでなさい。あれがもしか



だんなだとすると、わるかったなあ。」

おくさんは、びっくりして、すぐととんで行きました。行ってみると、だんなさまが、隅っこにへいつくばって、ひいひい泣いていました。あしが一本折れていました。

おくさんは、坊さんをやっそこさうちまでかつぎこむと、その足ですぐと、小むすこの、おとつあんの所へ、すごいいきおいでどなりこみました。

「おまえさんのこの小せがれたら。」と、おくさんはさげびたてました。「まあとんでもないことをしでかすじゃないか。うちのひとを、はしごだんの上からなげおとしてさ、あしを一本おっぺしょってしまったじゃないか。あんなろくでなし、もうとつととひきとって行っておくれ。」

おとつあんはひゃあとおどろいて、さつそくかけだして来て、小むすこをしたたかしかりとばしました。

「とほうもねえ小僧だ、悪魔あくまにでもつつかれやあがったか、わるあがきにもほどがあるぞ。」

「まあきいておくれよ、おとつあん。」と、小むすこはこたえました。「おらにゃあ、まるつきし罪はないよ。おしょうさん、まるで悪事を胸にたくらんでる人間がするように、

よる夜中来てそつと立っていたんだ。おらあ、だれだかわからないしよ、それでも二どまきで、おめえ、だれだ、ものをいえ、いわないなら、行ってしまってくれて、いってきかしたんだ。」

「やれやれ、こまったことだぞ。」と、おとつあんはいいました。「てめえのおかげで、このさきどんなさいなんなめにあうかわかりやしない。もう、つらあみたくねえ、どこへでも、見えない所へ行つちまってくれ。」

「ああ、そうかい、そいつあありがたいよ。じゃあ、夜のあけるまで待っておくれ。さつそく、おらあ出かけて行って、ぞつとすることをならつてくらあ。そうすりゃ、おらもおかげで術じゆつをひとつおぼえて、じぶんひとりやしなっていけるといふもんだ。」

「かつてにしろよ。」と、おとつあんがいました。「なにをおぼえてこようと、おいらの知ったことじゃねえ。それ、五十ターレルやるぞ、これをもとにして、ひろい世間をわたってくるがいい。だがの、生まれはどこで、おやじの名はしかじかと名のすることはきんもつだぞ。てめえじゃあ、こつちがとんだ生きはじをさらすからの。」

「あいよ、おとつあん、おいらにいうせりふがそれつきりなら、安心おし、そのくらい、まぢがいつこないからな。」

さて、夜があげるとさつそく、小むすこは、五十ターレルかくしにねじこんで、往來の上をすたこらあるいて行きました。あるきながら、口ぐせのように、

「ぞっとしたいもんだなあ。あめぞっとしたいもんだなあ。」といていました。

そこへ、ひとり男がやってきて、小むすこが、ひとりしゃべりにしゃべっていることを小耳にはさみました。そうして、ふたりがしばらくあるくうち、むこうに首つり架のみえる所へ来ました。すると、その男はいいました。

「おい、見ろよ、あすこの木の上で、七人の男が、なわやのむすめと祝言のさかすきをすまして、あとは高いところからとぶけいこというところだ。おめえ、あのしたにすわって、夜なかになるまでいてみるがいい、きつと、ぞっとするってことをおぼえるだろうよ。」

「なあんだ、それっきりのことなのか。」と、小むすこはいいました。「じゃあわけなしだ。ぞっとすることが、そんなにすばやくならえるんなら、おいらもってるこの五十ターレルそつくりおまえさんにあげつちまう。まあ、あしたの朝もういちど来てごらんさい。」

そこで、小むすこは、首しめ架のとこまで行って、その下にすわりこんで、晩になるのを待っていました。するうち、ひえびえしてきたので、たき火をこしらえました。それでもま夜中ちかくなると、風がどうにもつめたくなって来て、いくら火をたいてもあたたまりません。そのうち、風にふかれて、首をしめられたつるしんぼなかまが、こつん、こつんぶつかりあって、あっちへゆらゆら、こっちへゆらゆらしていました。それを小むすこがみて、(おらあ、下で火にあたたまっていても、ここえてならないのに、やつら、たかい所につるさがつていちゃ、ここえて、がちがちふるえるのもむりはないや。)とおもいました。

こうおもうと、もともと、おもいやりのある子でしたから、この小むすこは、はしごを架にかけてあがって行って、七人の男を、ひとりひとり下におろして、首をしめているなわをほどいてやりました。

それから、小むすこはせつせと火をよくして、ぶうぶうふき立てて、七人の死びとのからだのあたたまるように、たき火のぐるりにならばせました。でも、このなかまは、すわらせられたなり、こちんとしていて、まるで動かすにいうち、めらめらと火がきものうつりました。それをみて、小むすこが、

「おい、氣をつけろよ。しまつよくしないと、また上へつるさげるよ。」といていました。

それでも、死びとなかまは、きこえないのか、だんまりで、きているぼろの、かっぺにも
えるなりにしていました。

それで、小むすこはすっかりむくれて、こういいました。

「おめえら、じぶんでしまつする氣がないんなら、おいらだつてどうしてやりようもない
せ。なあ、いっしょに焼けしぬのはごめんだろうじゃないか。」

こういつて、またひとりひとり、もどおりぶら下げてしまいました。そしてあとはひ
とりで火のそばにごろりとなつて、それなりねこんでしまいました。そのうち、朝になる
と、五十ターレルもらうつもりで、きのうの男はさつそくやつて来て、

「どうだい、これで、ぞつとするつて、どんなことかわかつたろうな。」といいました。

「だめだい。」と、小むすこはこたえました。「なにが、おめえ、わかるもんかな。なにし
ろ、この上にいるやつらあ、まるで口をきかないんだ。おまけにとてもまぬけなやつら
で、じぶんのからだにくつついているおんぼろぎものが、火事になつたままにしてみてい
るんだ。」

こんなちようしでは、五十ターレル、きょうはとてもものにならないと見きりをつけて、
男はすすごかえつて行きました。そうして、

「どうもこんなひどいやろう、まだあいてにしたことがない。」とこぼしました。

四

小むすこも、それなりまたあるきだして、あいかわらず、ひとりごとに、

「ああ、ぞつとしたいもんだなあ。ああ、ぞつとしたいもんだなあ。」といていました。

これを、うしろからついできた車力しゃりきの男が聞きこんで、

「おめえ、だれだね。」といて、たずねました。

「うん、知らないよ。」と、小むすこがこたえました。

車力しゃりきはもういちどききかえして、

「どこから、おめえ、来たんだな。」といていました。

「うん、知らないよ。」

「おとつあん、なんていう名だい。」

「うん、そりやあいえないよ。」

「おめえ、なにをしょつちゆう、ぶつくさいつてゐるんだい。」

「ああ、そりやあな。」と、小むすこはこたえました。「おらあ、どうかして、ぞっとしたくてならないのだがね、だれも、それをおいらにおしえるものがないんだよ。」

「なにをばかな、くだらねえこというなあよせよ。」と、車力がいいました。「それよりかいつしよに來い。おれがつれてって、いい所へせわしてやる。」

小むすこは、車力について行きました。そして日がくると、一軒のはたごやへ、ひと晩とめてもらうつもりではいりました。

ところで、小むすこはまた、へやへはいるなり、とても大きな聲で、

「おらあ、ぞうつとしてみたいよ。おらあ、ぞうつとしてみたいよ。」といいました。

宿屋のていしゆがきいて、わらいながら、

「なんだ、そんなことがおのぞみなら、そっくりおあつらえむきのことか、ここにあるのだがね。」といいました。

「あれさ、だまつといでよ。」と、宿屋のおかみさんはいいました。「これまでだって、おまえさん、ずいぶんのひとが、ものずきで、あたらいのちを棒にふっているじゃないか。まああのきれいな目が、これなり日のめがおがめなくなるときちやあ、なさけない上にもつたいないというものだわね。」

それでも、小むすこはいいました。

「そんなむづかしいことなら、なおのこと、おいら、おぼえてみたいものだな。なにしろ、そのためわざわざやって來たんだ。」

こうなると、なんだって、わけをいわせるまでははなしません。ていしゆはそれで、ここからそうとおくない所に、魔法にかけられている城があるが、まあせめて三日そこで夜をあかしてみたがいい、たいてい、ぞうつとするめにあうってどんなことだか、おぼえられようつものだとはなしました。ところで、このしごとをしゆびよくしとげたものに、王さまはごじぶんのお姫さまをおよめにくださるというお約束やくそくで、しかも、お姫さまというのが、お日さまの照らしておいでになる世界でいちばんうつくしいひとだということでした。またお城のなかには、おびただしいたからがしまつてあつて、わるい魔ものなかまが、きびしく見はつているのですが、そうなれば、その封じもいつしよにとけて、びんぼう人がいっぺんで大金持になれるというわけでした。それで、ついつられて、これまでおおせいお城にはいつて行つたものの、ただのひとり、ぶじでもどつたためしが無いということです。

これだけわかると、小むすこは、さっそく、あくる朝、王さまの所へ出かけて行って、

「おゆるしねがえるなら、わたくしが三晩のあいだ、その魔法のかかったお城で、ねずの番をつとめようございます。」といいました。

王さまは、小むすこのようすをごらんになって、これならよかろうとおもいました。そこで、

「城にはいるについては、なにか三いろ、のぞみの品をいうがよい。ただし、いのちのないものにかざるぞ、それだけしようちで、もって行くことをゆるす。」といいました。

すると、小むすこはこたえて、

「では、火にろくろばんに、それと、木ぼりぎいくの臺に小刀、これをねがいきましょう。」といいました。

王さまは、いうままに、みぎの品じなをそろえて、あかるいうち、お城へはこばせておきました。さて、夜になりかけたとき、小むすこは出かけて行きました。そして、なかのひと間にすわりこんで、火をかかんおこしました。それから、小刀をのせた木ぼりぎいくの臺をわきにおいて、ろくろばんに、どつかと腰をおろしました。

「おらあ、ぞうつとしてみたいよ。」と、小むすこはいいました。「だが、こんどもどうせおぼえられやしないんだ。」

夜中になって、小むすこが、火のいきおいをよくしようとおもって、ぶうつと火をふきました。するといきなり、すみっこで、たれかが、

「うわあ、にやあおん、さむいぞう。」とわめきました。

「ばかあア。」と、小むすこはどなりつけました。「なにをぎゃんぎゃんさわぐ。おめえ、さむけりやあ、出て来て火にあたつて、いくらでもあつたまるがいい。」

こういうと、とたんにもう、二ひき大きな黒ねこが、とてもすごいいきおいでとびだしてきて、小むすこの兩わきにびたりとすわりこみました。そして火の玉のような目で、いまにももえつきそうに、ぎゅつとにらみつけました。

しばらくして、からだがあたたまってくると、こいつらが、

「きょうだい、おい、カルタしようか。」といいだしました。「だが、その前に、ちよいと手を

だしておみせ。」

それで、二ひきのねこは、かぎ爪ののびた手を出しました。「やれまあ。」と、小むすこはいいました。「おめえら、なんてながい爪してるんだ。待て待て、こいつからさきに、切っちまわなくちゃ。」

いうなり、二ひきのくびを引つつかんで、さいく臺の上のせると、四つあしをぎゅつと、ねぢでしめつけてしまいました。

「どうもおめえらの指をみせてもらったのでな」と、小むすこはいいました。「おいら、もうカルタする気がなくなつたよ。」

こういいいい、ねこどもを打ちころして、そとの水のなかにたたきこんでしまいました。さて、二ひきのやつをおとなしくさせたところで、小むすこがもどつてきて、また火にあたろうとしますと、すみといわず、角かどといわず、そこからもここからも、まっ黒なねことまっ黒な犬が、もえていくさをひきすつたなり、ぞろぞろぞろぞろ、あとからあとかから出てきて、しまいには、小むすこもいる所がなくなりました。ねこど犬のなかまはなんともすごい聲でぎゃんぎゃんいいながら、小むすこのおこした火の上をすかさずかふんづけふんづけ、四方八方けちらかして、それを消そうとかかりました。それでしばらくは、小むすこも、だまつてすることをみていたものの、つい腹が立ってきて、れいの木ぼりざいく用の小刀を手にとるなり、

「くそつ、出てうせろい、このごろつきども。」とどなって、かれらのまん中に切つて入りました。これにおどろいて、半分はとび上がつてにげて行きましたが、半分はたたきころして、おもての池にほうりこみました。それで小むすこは、またもどつてきて、ほたるのようなのこり火をぶうぶう吹きおこしてあたたまりました。

まずこんなことで、ひと休みするうち、まぶたがだんだんおもたくなって、どうにもねむたくてならなくなりました。そこで、そこらを見まわすと、すみっこに、大きな寝ねだいがひとつおいてありました。

「こいつはちやうどおあつらえむきだぞ。」と、小むすこはつぶやきながら、なかへもぐりこみました。ところが、目がくつつきかけたたん、寝だいがひとりであるきだして、お城のなかじゆう、ぐるぐるまわりました。

「よう、おもしろいぞ。」と、小むすこはいいました。「そらやれ、それやれ。」

こういうと、寝だいはよけいごろごろ、ごろごろ、まるで六とうの馬を前につけたようないきおいで、しきいも、段段だんだんもおかまいなく、あがつたりおたり、まわりつづけました。するうちいきなり、ホップ、ホップ、ほうらいで、寝だいはでんぐり返かえしをうちました。そして下が上になると、どさりと山のように小むすこの上にのしかかって來ました。ところが、こちらもすかさず、ぼんと夜着もまくらもはね上げて、ばあつとそとへとびだしました。そして、

「のっかって行きたいやつをのせるがいい。」といいながら、やはりもとの火の所に、ころりところげて、あかるくなるまでぐっすり寝ました。

朝になって王さまが出てきて、ゆかの上に、小むすこのころがっているのをみると、つきり妖怪どもにやられて死んでしまったこととおもいました。それで、

「きれいなわかものだったのに、おいしいことをしたのう。」といいました。それをきくなら、小むすこはむっくりおき上がって、

「どうしてまだそこまでは行かないのでね。」といいました。

これで、王さまはどきもをぬかれました。それでもまあよかったとよろこんで、どんなようすであつたかとたずねました。

「とてもうまく行きましたよ。」と、小むすこはこたえました。「まずひと晩はすませました。あとのふた晩もまあこんなことでしようよ。」

さて、小むすこが、宿屋へ引き上げて來ますと、ていしゆは目をまるくしました。

「ほんのことだが、わしゃあおもわなかつたよ。」と、ていしゆはいいました。「まさかおまえさんがぶじで顔を見せようとはね。さあ、それで、おまえさん、ぞうつとするってわけがおわかりだろうね。」

「なあんの。」と、小むすこがいいました。「まるつきりだめさ。ほんとにだれか、ぞうつとするってこういうもんだ、とってくれるものはないかなあ。」

二日めの晩、それでも、小むすこは、やはりお城の古やしきに出かけて行きました。そして、火にあたりながら、れいの、

「おらあ、ぞうつとしてみたいのだがなあ。」をはじめました。

夜中ちかくなると、がたりことり、そろそろうるさくなつてきて、だんだんひどくなつて行きました。と、しばらくのあいだ、しんとしていました。するうち、きやあつというけたたましいさけび聲がして、半分だけしかない人間が、けむだしの穴からおちてきて、小むすこの目のまえに、どさりと横になりました。

「なんだい、こりやあ。」と、小むすこはさけびました。まだ「半分あるはずだぞ。たりない、たりない。」

するとまた、がたびしはじめて、ぎゃんぎゃん、ふんふん、うなるやらわめくやら、大さわぎのなかに、あとの半分が落ちてきました。

「待ってろ。」と、小むすこはいいました。「まずさきにすこし火をよくしておいてやるからな。」

そのとおりにしてから、ふりかえってみますと、半かけの人間がいつかひとつに合わさつて、すごいつらした男がひとり、小むすこのかけていた臺に、いばりかえっていました。「やい、だれが腰掛まで貸すといった。」と、小むすこはいいました。「そりやあおれが掛けるんだ。」

その男はむりにもがんばろうとしました。それでも小むすこは負けていずに、力ずくでその男をつきのけて、もとの席にいすわりました。すると、こんどは、もっとたくさんの人間が、あとからあとからと落っこつて來ました。そして、しゃりつ骨を九つに、あたまの骨をふたつ、もちだして來て、それをくみ立てて、九本柱に球をうちあてて倒すニンピンズの遊びをはじめました。

それをみて、この小むすこもしたくなりしました。それで、

「おい、おいらもなかまに入れてくれるかい。」とききました。

「うん、せにせえもつてくりやあな。」

「せにならうんとあらあ。」と、小むすこはこたえました。「だが、おめえたちのその球あ、ほんとにまるくなつていないせ。」

こういって、小むすこは、がいこつあたまを手にとつて、ろくろばんにかけて、まるくけ

ずりました。

「そうら、こんどはずつとよくころがるぞ。」と、小むすこはいいました。「ほらしよ。どうだ、おもしろいだろう。」

これで、いっしょになつてしょうぶをしているうち、すこしばかり身上しんしょうをすりしましたが、十二時をうちだしたので、とたんに、なにもかもいっぺんに消えうせてしまいました。小むすこはごろりとなつて、すやすやねむりました。

あくる日の朝、王さまがまた來て、ゆうべのことをたずねました。

「そこで、こんどはどんなようすだったな。」

「ニンピンズをやりましたよ。」と、小むすこはこたえました。「おかげでヘラァ銅貨の二三枚がとこ、そんしました。」

「それで、ぞうつとはしなかつたかな。」

「へっ、とんでもない。」と、小むすこはいいました。「とてもおもしろうございましたよ。まあ、どうかして、これならぞうつとするつてやつにぶつかりたいものでさ。」

三日めの晩、小むすこはまたれのろくろばんにすわりこんで、ふくれつつらしながら、「なんとかぞうつとならないものかなあ。」と、つぶやいていました。

夜ふけてから、六人の大男がやって来て、棺桶かふかりをかつぎこみました。すると、小むすこが、

「へっ、へっ、こいつはきつと、つい二三日前おつ死んだおいらのいとこのだろうせ。」と
いいました。そして、指であいずをしてみせて、「来いよ、来いよ、いとこのあにき。」と
よびました。

大男らは、棺桶をゆかにすえました。すると小むすこはつかつかそのそばへ出て行つて、棺のふたをあけました。なかには、死人がひとりはいっていました。

死人の顔に手でさわってみましたが、それは氷のようにつめたいのです。

「待て、待て。」と、小むすこはいいました。「おれがすこしあためてやるからな。」

こういいながら、火にあたつて、手をあためて、死人の顔におしつけましたが、死人はつめたいままでした。それで、なから死人をひきずりだして、じぶんが火にあたりながら、ひざの上に死人をのけて、せつせとうでをこすってみました。これでからだに血がまわりだすだろうというわけでした。それでもいっこうききめがありませんから、ふとおもいついて、

「ふたりいっしょの床にねれば、しせんからだがあたたまるりくつさ」といって、死人を寢

床に入れて、夜着をかけてやって、じぶんもそのそばにならんで寝ました。しばらくするうち、死人もあたたまって来て、ついでにもくもくうごきました。そのとき、小むすこはいいました。

「そらみる、いとこの見き、おいら、あためてやったんだぞ。」

ところが、死人は口をむぐむぐやるうち、きゆうにさけび立てました。

「こんどは、きさまあしめころしてやる。」

「なにくそつ。」と、小むすこはいいました。「それがおいらへの禮かい。よし、もとの棺桶かふかり申へさつさといれ。」

こういうなり、死人を引きずり上げて、棺のなかにほうりこんで、ばんと、ふたをしてしまいました。すると、さつきの六人の大男が出て来て、また死人をかついで行ってしまいました。

「こんなことで、おらあどうしたつて、ぞうつとなんかするものかい。」と、小むすこはいいました。「こんな所に一生いたつて、なにがおぼえられるものか。」

そこへひとり、男がはいって来ました。その男はこれまでの男より、からだもずつと大き
いし、くいつきそな顔つきをしていました。でも年をとつていて、ながい白ひげをはやし

ていました。

「へッ、この小わっぱめ」と、このじいさまはどなりました。「よし、ぞうつとするってどんなことか、いますぐとおぼえさしてくれるわ。そのかわり、きさまのいのちはもらうぞよ。」

「そうちよろつかにはやられねえよ。」と、小むすこはいいました。「なんでもいのちをとるといふなら、こっちにもそれだけのかくごがあらあな。」

「なにを、ひとつかみにしてくれる。」と、このうすきみわるい男がいました。

「おつとおしずかに、いばつた口をきいてもらうまい。おまえさんぐらいの力は、おいらにもあるよ。どうしてずつと強かろうよ。」

「よし、みることにしようよ。」と、じいさまはいいました。「きさまがおれよりつよいしようにみえりや、これなりだまってかえしてやる。さあこい、一ばん、力だめしだ。」

そこで、じいさまは、小むすこを引っぱって、くらい廊下ろうかをぬけて、かじやの仕事場の火のかつかしている所へつれて行きました。そして、おのを手にとるなり、ひとつち、そこかなと、こをたたきつけて、地びたにめりこませました。

「そんなこと、おいらもつとうまくやってみせてやる。」

小むすこはこういいながら、もうひとつあるかなとこのほうへ行きました。じいさまはそのそばに、かたをならべて立って、けんぶつするつもりでおりました。ところで、じいさまの白ひげは、だらりとたれていたのです。それで、小むすこはおのをつかむと、ただ一撃げき、ばんとかなしきをうちわりました、ついでにじいさまのひげを、そのわれめにはさんでたたきこんでしまいました。

「さあ、これできさま、おれのもんだ。」と、小むすこがいいました。「いのちをとられるのはきさまだぞ。」

こういって、小むすこは、鐵の棒をふりあげて、じいさまをなぐりつけました。それで、じいさまがとうとう、ひいひい音ねを上げて、どうかもう打つのはかんにんしてください、そのかわり、おたからを山ほどさしあげますといいました。

小むすこは、かなとこにはさまったおのを引っこぬいて、じいさまをはなしてやりました。じいさまはまたもとのお城にもどって、金のいっばつまった箱のおいてある穴ぐらを見せました。

「さあこの中で」と、じいさまはいいました。「はじめのひとつは、びんぼうなものにやる。もうひとつは、王さまのものだ。三ばんめをおまえにやる。」

そうこうするうち、十二時をうちました。そしてばけものは消えてなくなりました。ま
つくら闇くまのなかに、小むすこひとり立っていました。

「まあ、なんとかそとに出られるだろうよ。」と、小むすこはいつて、さぐりさぐりあるく
うち、さっきのへやへ行く道がみつかったので、そこへもどって火のそばに寝ました。

そのあくる朝、また王さまが出て来て、

「さあ、こんどは、ぞうつとするってなんだか、おぼえたであろうな。」と、いいました。

「いんや、どうして」と、小むすこはこたえました。

「なにがなんだか、いっこうに。なにしろ、死んだい、こが来て来ました。それからひげ
だらけの男が来ました。その男が、この下にたくさん金のしまつてある所をみせました。
ところで、かんじん、ぞうつとするってなんのことか、いつてくれるものはありませんでし
たよ。」

そのとき、王さまはいいました。

「おまえはこの城の魔法をといた。わしのむすめをよめにするがよい。」

「そりやあ、なによりけっこうです。」と、小むすこはこたえました。「でも、ぞうつとす
るってなんのことだか、あいかわらずわたしにはわからずじまいでございますよ。」

五

さて、金が穴ぐらからもちだされて、ご婚禮もとどこおりなくすみました。ところで、
わかい王さまはお妃おきさきをたいへんかわいくおもって、それはまいにち、たのしくうかれてく
らしましたが、やはりあいかわらず、れいの、

「ぞうつとするといんだが。ぞうつとするといんだが。」をいつづけていました。そ
れで、お妃おきさきもしまいにはうるさくなりました。すると、おそばぎのお女中が、

「わたしがひとつくふういたして、いやでもぞうつとすることをおぼえさせてあげまし
う。」と、いいました。お女中は、そこで、お庭のなかをながれている小川の所へ出かけて、
ふなやどじょうのいる水を、手桶てぶくにいっぱい、こぼれるほどくみ上げてもらいました。そし
て、その晩、若い王さまが休んでいるところを、いつつけられたとおり、お妃おきさきがかけてある
夜着よぎをいきなり引きめくりました。そして、手桶てぶくの冷水ひやみずを、ふなやどじょうのうじゃうじ
やはいったまま、ざあつと王さまのあたまからあびせました。すると、こがまわりで、び
ちびち、はねまわりました。

そのとき、王さまは目をさまして、
「うわあ、たいへん、こりやあぞうつとするぞ。奥さんよ、こりやぞうつとするぞ。やれや
れ、これでぞうつとするってどんなことだかわかったよ。」とわめきました。



おおかみと七ひきのこどもやぎ

一

む

かし、あるところに、おかあさんのやぎがいました。このおかあさんやぎには、
かわいいこどもやぎが七ひきあって、それをかわいいがことは、人間のおかあさ
んが、そのこどもをかわいがるのと、すこしもちがったところはありませんでした。

ある日、おかあさんやぎは、こどもたちのたべものをとりに森まで出かけて行くので、
七ひきのこどもやぎをよんで、こよいいきかせました。

「おまえたちについておくがね、かあさんが森まで行ってくるあいだ、氣をつけてよくお
るすばんしてね、けっしておおかみをうちへ入れてはならないよ。あいつは、おまえたち
のこらず、まるのまんま、それこそ皮も毛もあまさずたべてしまうのだよ。あのわるもの
は、わからせまいとして、ときどき、すがたをかえてやってくるけれど、なかに、聲はし
やがれて、があがあごえだし、足はまつ黒だし、すぐと見わけはつくのだからね。」

すると、こどもやぎは、聲をそろえて、

「かあさん、だいじょうぶ、あたいたち、よく氣をつけて、おるすばんしますから、心配しないで行っておいでなさい。」と、いいました。

そこで、おかあさんやぎは、メエ、メエといって、安心して出かけて行きました。

二

やがて、まもなく、たれか、おもての戸をとんとたたたくものがありました。そうして、
「さあ、こどもたち、あけておくれ、おかあさんだよ。めいめいに、いいおみやげをもつて来たのだよ。」と、よびました。

でも、こどもやぎは、それがしゃがれた、があがあ聲なので、すぐおおかみだということとがわかりました。そこで、

「あけてやらない。おかあさんじゃないから。おかあさんは、きれいな、いい聲してるけれど、おまえはしゃがれつ聲のがあがあ聲なもの。おまえはおおかみだい。」と、さげびました。

そこで、おおかみは、荒物屋の店へ出かけて、大きな白ぼくを一本買って来て、それをたべて、聲をよくしました。それからまたもどつてきて、戸をたたいて、大きな聲で、

「さあ、こどもたち、あけておくれ。おかあさんだよ、みんなにいいものをもって来たのだよ。」と、どなりました。

でも、おおかみはまっ黒な前足を、窓のところにかけていたので、こやぎたちはそれを見つけて、

「あけてはやらない。うちのおかあさんは、おまえのようなまっ黒な足をしていない。おまえはおおかみだい。」と、さげびました。

そこで、おおかみは、パン屋の店へ出かけて、
「けつまづいて足をいためたから、ねり粉をなすっておくれ。」と、いいました。

で、パン屋が、おおかみの前足にねったこなをなすってやりますと、こんどは、粉屋へかけつけて行って、

「おい、前足に白いこなをふりかけてくれ。」と、いいました。

「おおかみのやつ、まただれかだますつもりだな。」

そう粉屋はおもって、ぐずぐずしていました。

するとおおかみは、

「すぐしないと、くつちまうぞ。」と、どなりました。

そこで、粉屋はこわくなって、おおかみの前足を白くしてやりました。まあ、こういうところが、人間のためなところですね。

さて、わるものは、三どめに、やぎのおうちの戸口に立って、とんとん、戸をたたいて、こういいました。

「さあこどもたちや、あけておくれ、おかあさんがかえって来たのだよ、おまえたちめいめに、森でいいものをみつけて来たのだよ。」

子やぎたちは、聲をそろえて、

「さきに足をおみせ、うちのおかあさんだかどうだか、みてやるから。」

そういわれて、おおかみは、前足を窓にのせました。こどもやぎがそれを見ますと、白かったので、おおかみのいうことを、すっかりほんとうにして、戸をあげました。

ところで、はいつて来たのはたれでしたろう、おおかみだったではありませんか。

みんな、わあっとおどろいて、ふるえあがつて、てんでんにかくれ場所をさがして、かくれようとなりました。ひとりは、つくえの下にとびこみました。次は寢床ねどこにはいこみまし

た。三ばんめは、爐いろの中にかくれました。四ばんめは、臺所だいどころへにげました。五ばんめは、棚たなにありました。六ばんめは、洗面せんめんだらいの下にもぐりました。七ばんめは、柱時計の箱のなかにかくれました。

ところが、おおかみは、そばからみつけだして、ぞうさなく、ひとりひとり、かたはしからつかまえて、ただひと口に、あんぐりやってしまいました。ただ、大時計の箱のなかにかくれた、いちばん小さな子だけは、みつからずすみしました。さて、たらふくたべたいただけべて、おなががくちになると、おおかみはおもてへにげ出して、木のかげになつて、青あおとしているしばの上に、ながながとねそべって、ぐうぐういびきをかきだしました。

三

それから間もなく、おかあさんやぎは、森からかえって来ました。ところで、まあ、おかあさんやぎは、そのときなにを見たでしょう。おもての戸は、いっばいいっばいにあげひろげてありました。テーブルも、いすも、腰かけも、ほうりだされていました。洗面せんめんだらいは、

こなごなにこわれていました。夜着よぎもまくらも、寢臺しんたいからころげおちていました。

おかあさんやぎは、こどもたちをさがしましたが、ひとりもみつかりません。ひとりひとり、名前をよんでも、たれも返事へんじをするものがありません。おしまいに、いちばん下の子の名前まで来て、はじめて、ほそい聲で、

「かあさん、あたい、時計のお箱にかくれているよ。」というのが、きこえました。

おかあさんやぎは、この子をひっぱりだしてやりました。そこで、この子の口から、はじめにおおかみが来て、ほかのこどもたちみんなたべてしまったことが、わかりました。そのとき、おかあさんやぎは、かわいそうな子やぎたちのことを、どんなに泣いてかなしんだか、みなさん、さっしてみてください。

やつとのこと、おかあさんやぎは、泣くことをやめて、末すえつ子やぎといっしょに、そとへ出しました。原っぱまでくると、おおかみは、やはり木のかげにながながとねをべつて、それこそ木の枝も葉も、ぶるぶるふるい動くほどの高いびきを立てていました。

ところで、おかあさんやぎが、おおかみのようすを遠くからよく見ますと、そのふくれかえったおなかの中で、なにかもそもそ動いているのがわかりました。

「まあ、ありがたい、おおかみのやつ、うちのこどもたちを、お夕飯ゆうはんにして、うのみにの

みこんだままだから、みんなきつとまだ生きているのだよ。」

こうおもつて、おかあさんやぎは、さつそく、うちへかけこんで行つて、はさみと針と糸をとつて来ました。それから、おかあさんやぎは、このばけものどてつ腹を、ちよきんとはさみで、ひとはさみはさみました。するともうそこに、一びきのこどもやぎが、びよこんとあたまを出しました。おかあさんはよろこんで、またじよきじよきはさんで行きますと、ひとり出で、ふたり出して、とうとう、六びきのこどもやぎのこらずが、とびだしました。みんなぶじで、たれひとり、けがひとつしたものもありません。なにしろ、この大ばけものは、むやみとがつがつして、ただもう、ぐつく、ぐつく、そのまま、のどのおくへほうりこんでしまつていたからです。

まあうれしいこと。こどもたちは、おかあさんやぎにしつかりだきつきました。それから、およめさんをもろう式の日の、仕立屋のように、びよんびよんはねまわりました。

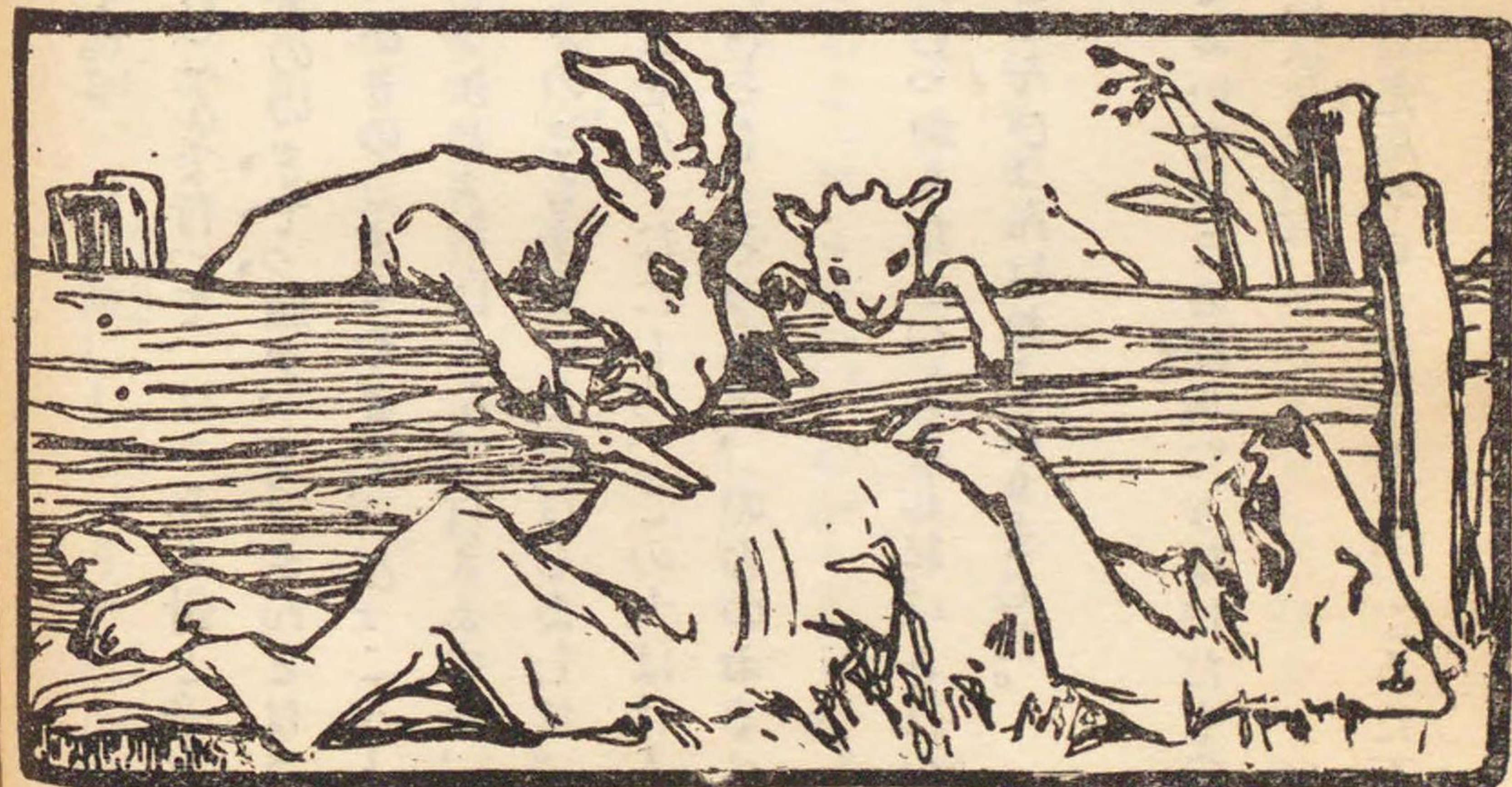
でも、おかあさんやぎは、こどもたちをとめて、

「さあ、そらで、みんな行つて、ごろた石をひろつておいで、この罰はちあたりなけだものが寝ねているうちに、おなかにつめてやるのだから。」といいました。

そこで、こどもたちは、われがちにかけだして行つて、えんやら、えんやら、ごろた石

をあつめて、ひきずって来ました。そうして、それを、
おおかみのおなかに、つまるだけつめこみました。す
ると、おかあさんやぎが、あとから、ちよつちよつと、
手ばしこく、もとのようにぬいつけてしまいました。
それがいかにも早かったので、おおかみがまるで気が
つかないし、ごそりともしないまにすんでしまいまし
た。

おおかみは、やつとのこと、寝たいだけ寝て、立ち
あがりました。なにしろ、胃袋いぶくろのなかは石がいっぱい
で、のどがからからにかわいてたまらないので、ふき
井戸のところへ行つて、水をのもうとしました。とこ
ろが、からだを動かしかけますと、おなかの中で、ご
ろた石がぶつかりあつて、がらがら、ごろごろ、いい
ました。



がらがら、ごろごろ、なにがなる
そりやどこでなる、腹はらでなる。
六びきこやぎのなくこえか、
こりや、そうじゃない、ごろた石、

おおかみは、こううたいました。

さて、やつとこすつとこ、ふき井戸の所まで来て、水の上にかがもうとすると、おなか
の石のおもみに引かれて、おおかみは、のめりました。そうして、いやおうなしに、泣き
泣きおおかみは、水の中におちこみました。

遠くで見ていた七ひきのこともやぎは、みんなかけよつて来て、
「おおかみ死んだよ。おおかみ死んだよ。」とさけびながら、おかあさんやぎと手をつな
ぎながら、おおよろこびで、井戸のまわりをおどりまわりました。

ま

ずしい木こりの男が、大きな森の近くにこやをもつて、おかみさんとふたりのこどもとでくらしていました。ふたりのこどものうち、男の子がヘンゼル、女の子がグレーテルといました。しがなくくらしして、ろくろく齒にあたるたべものを、これまでもたべずに来たのですが、ある年、國じゅうが大ききんで、それこそ、日日のパンが口にはいらなくなりしました。木こりは、晩、寢床にはいったものの、こののち、どうしてぐらすかかんがえると、心配で心配で、ごろごろ寢がえりばかりして、ためいきまじりに、おかみさんに話しかけました。

「おれたち、これからどうなるというんだ。かわいそうに、こどもらをどうやってくわしていくか。なにしろ、かんじん、やしなつてやっているおれたちふたりの、くうものがないますつだ。」

「だから、おまえさん、いつをこうしようじゃないか」と、おかみさんがこたえました。

「あしたの朝、のつげに、こどもたちをつれだして、森のおくのおくの、木ぶかい所まで行くのだよ。そこで、たき火をしてやつて、めいめいひとかけづつパンをあてがっておいて、それなりわたしたち、しごとのほうへすつぽぬけて行って、ふたりはそっくり森の中においてくるのさ。こどもらにかえり道が見つかりつこないから、それでやつかいがぬけようじゃないか。」

「そりゃあ、おめえ、いけねえよ。」と、木こりがいいました。

「そんなこたあ、おれにはできねえよ。こどもらを森の中へおきざりにするなんて、どうしたつて、そんなかんがえになれるものかな。そんなことしたら、こどもら、すぐと森のけだものがでてきて、ずたずたにひつつあいてしまふにきまつてらあな。」

「やれやれ、おまえさん、いばかだよ。」と、おかみさんはいいました。「そんなことをいつていたら、わたしたち四人が四人、かつえ死にに死んでしまつて、あとは棺桶かんおけの板をけすつてもらうだけが、しごとになるよ。」

こうおかみさんはいつて、それから、のべつまくしたてて、いやおうなしに、ていしゆを、うんといわせてしまいました。

「どうもやはり、こどもたちが、かわいそうだなあ。」と、ていしゆはまだいってました。ふたりのこどもたちも、おなががすいて、よく寝つけませんでしたから、ママ母が、おとつあんにむかっていっていることを、そっくりきいていました。妹のグレーテルは、涙をだして、しくんしくんやりながら、にいさんのヘンゼルにむかって、

「まあどうしましょう、あたしたち、もうだめね。」と、いいました。

「しッ、だまってグレーテル」と、ヘンゼルはいいました。「おさわぎでない、だいじょうぶ、ぼく、きつとよくやってみせるから。」

こう妹をなだめておいて、やがて、親たちがねしずまると、ヘンゼルはそろそろ起きだして、うわぎをかぶりしました。そして、おもての戸の下だけあけて、こっそりそとへ出ました。ちようどお月さまが、ひるのようにあかるく照っていて、うちの前にしいてある白い小砂利こじやりが、それこそ銀貨ぎんかのように、きらきらしていました。ヘンゼルは、かがんで、その砂利じやりを、うわぎのかくしいっぱい、つまるだけつめました。それから、そつとまた、もどつて行つて、グレーテルに、

「いいから安心して、ゆつくりおやすみ。神さまがついてくださるよ。」と、いいきかせて、自分もまた、床とこにもぐりこみました。

夜があけると、まだお日さまのあがらないうちから、もうさつそく、おかみさんは起きて来て、ふたりをおこしました。

「さあ、おきないか、のらくらものだよ。おきて森へ行つて、たきぎをひろつてくるのだよ。」こういって、おかみさんは、こどもたちめいめいに、ひとかけづつパンをわたして、

「さあ、これがおひるだよ。おひるにならないうち、たべてしまふのではないぞ。もうあとはなんにももらえないからよ。」と、いいました。

グレーテルは、パンをふたつともそっくり前掛の下にしまいました。ヘンゼルは、かくしにいっぱい小石を入れていましたからね。

そのあとで、親子四人そろつて森へ出かけました。しばらく行くと、ヘンゼルがふと立ちどまつて、首をのばして、うちのほうをふりかえりました。しかも、そんなことをなべんもなんべんもやりました。おとつあんがそこでいいました。

「おい、ヘンゼル、なにをそんなに立ちどまつて見ているんだ。うっかりしないで、足もとに氣をつけるよ。」

「なあに、おとつあん。」と、ヘンゼルはいいました。「ぼくの見ているのはね、あれさ。ほら、あすこの屋根の上に、ぼくの白ねこがあがっていて、あばよしているから。」

すると、おかみさんが、

「ばか、あれがおまえの小ねこなもんか、ありやあ、けむだしに目があたってゐるんじゃないか。」と、いいました。でも、ヘンゼルは小ねこなんか見ているのではありません。ほんとうはそのまに、れいの白い小砂利こじりをせつせとかくしから出しては、道におとしおとししていたのです。

森のまん中ごろまで来たとき、おとつあんはいいました。

「さあ、こどもたち、たきつけの木をひろつておいで。みんな、さむいといけない。おとつあん、たき火をしてやろうよ。」

ヘンゼルとグレーテルとで、そだをはこんで来て、そこに山と積みあげました。そだの山に火がついて、ばあつと高く、ほのおがもえあがると、おかみさんがいいました。

「さあ、こどもたち、ふたりはたき火のそばであつたまって、わたしたち森で木をきつてくるあいだ、おとなしくまっつてゐるんだよ。しごとがすめば、もどつてきて、いっしょにつれてかえるからね。」

ヘンゼルとグレーテルとは、そこで、たき火にあたつていました。おひるになると、めいめいあてがわれた、パンの小さなかけらをだしてたべました。さて、そのあいだも、し



じゆう木をきるおのの音がしてましたから、おとつあんは、すぐと近くでしごとをしていることとばかりおもつていました。でも、それはおのの音ではなくて、おとつあんが一本の枯れ木に、枝をいわいつけておいたのが、風でゆすられて、あちへぶつかり、こちへぶつかりしていたのです。こんなふうにして、ふたりは、いつまでもおとなしくすわつて待つてゐるうち、ついくたびれて、両方の目がとろんとしてきて、それなりぐつすり、ねてしまいました。それで、やと目がさめてみると、もうすつかり暮れて、夜になっていました。グレーテルは泣きだしてしまいました。

「まあ、わたしたち、どうしたら森のそとへ出られるでしょう。」と、グレーテルはいいました。

ヘンゼルは、でもグレーテルをなだめて、

「なあに、しばらくお待ち。お月さまが出てくるからね。そうすればすぐと路がみつかるよ。」と、いいました。

やがて、まんまるなお月さまが、高だかとのぼりました。そこで、ヘンゼルは小さい妹の手をひいて、小砂利をおとしたあとを、たどりたどり行きました。小砂利は、吹き上がって来たばかりの銀貨ぎんかみたいに、ぴかぴか光って、路しるべしてくれました。ひとばんじゅうあるきどおしにあるいて、もう夜のしらしら明けに、ふたりはやっとおとつあんのうちにかえって来ました。ふたりがおもてをこつこつとたたくと、おかみさんが戸をあけて出てきました。そして、ヘンゼルとグレーテルの立っているのを見ると、

「このろくでなしめら、いつまで森の中で寝こけていたんだい。おまえたち、もううちにかえるのがいやになったんだとおもっていたよ。」と、いいました。

おとつあんのほうは、でも、ああして子どもたちふたりつきり、おきざりにして来たものの、心配で心配でならなかったところでしたから、よくかえって来たといつてよろこびました。

そののち、もうほどなく、うちじゅうまた八方ふさがりになりました。子どもたちがきいていると、夜おそく、寝ながらおつかさんが、おとつあんにむかって、

「さあ、いよいよなにもかもたべつくしてしまつたわ。天にも地にもパンが半きれ、それもたべてしまえば、歌もおしまいさ。こうなりやどうしたって、子どもらを追いだすほか

はないわ。こんどは森のもつとおくまでつれこんで、もう、とてもかえり道のおからないうようにしなきゃだめさ。どうしたって、ほかにわたしたち助かりようがないからね。」

こんなことをいわれて、ていしゅは胸にぐっと来ました。そして、

「そんなくらいならいっそ、てめえ、しまいにのこつたじぶんのぶりのひとかけを、子どもたちにわけてやっちゃうのがましだ。」と、かんがえました。

それでも、おかみさんは、ていしゅのことを、まるで耳に入れようともしません。ただもういきりたつて、あくぞもくぞもくならべたてました。それはたれだつて、いったんAといつてしまえば、あとはBとつづけなければならなくなるので、このていしゅも、いちどおかみさんのいうままになったからは、こんども、そのとおりにしなればならなくなりました。

ところで、子どもたちはまだ目があいていて、この話をのこらずきいていました。そこで、おとなたちの寝てしまうのを待ちかねて、ヘンゼルはおきあがると、そとへとび出して、この前のように小砂利をひろいに行こうとしました。でも、こんどは、おかみさんが戸に、ぴんと、じょうをおろしてしまつたので、ヘンゼルは出ることができなくなりま

ヘンゼルは、それでも、小さい妹をなだめて、

「グレーテル、お泣きでない。ね、あんしんしてお休み。神さまがきつとよくしてくださるから。」と、いいきかせました。

あくる日は、朝つばらからもう、おかみさんはやって来て、こどもたちを寢床ねこからつれだしました。こどもたちは、めいめいパンのかけらをひとつづつもらいましたが、それはせんものよりも、よけい小さいものでした。それをヘンゼルは、森へ行く道みち、かくしの中でぼろぼろにくずしました。そして、おりおり立ちどまっては、そのくずしたパンくずを、地びたにおとしました。

「おい、ヘンゼル、なんだって立ちどまって、きよろきよろみているんだな。」と、おとつあんがいました。「さつさとあるかないか。」

「ぼく、ぼくの小ばとを、ちゃんとみているんだよ。そら、屋根の上にとまって、ぼくにさよならしているんじゃないか。」と、ヘンゼルはいいました。

「ばか。」と、おかみさんはまたいいました。「あれがなんではとなものか。あれは朝日が、けむだしの上で、きらきらしているんだよ。」

ヘンゼルは、それでもかまわず、パンくずを道の上におとしおとしして、のこらずなく

してしまいました。

おかみさんは、こどもたちを、森のもつともつとふかく、生まれてまだ来たことのなかつたおくまで、引っぱって行きました。そこで、こどもも、またじゃんじやんたき火をしました。

そしておつかさんは、

「さあ、こどもたち、ふたりともそこにじっといればいいのだよ。くたびれたらすこし寢てもかまわないよ。わたしたちは、森で木をきって来て、夕方、しごとがおしまいになれば、もどつて来て、いっしょにうちにつれてかえるからね。」と、いいました。

おひるになると、グレーテルが、じぶんのパンを、ヘンゼルとふたりで分けてたべました。ヘンゼルのパンは道にまいて来てしまいましたものね。

パンをたべてしまうと、ふたりは眠りました。そのうちに晩もすぎましたが、かわいそうなこどもたちのところへ、たれもくるものはありません。ふたりがやっと目をあけたときには、もうまつくらな夜になっていました。ヘンゼルは、小さい妹をいたわりながら、

「グレーテル、まあ待っておいでよ。お月さまが出るまでね。お月さまが降りやあ、こぼしておいたパンくずも見えるし、それをさがして行けば、うちへかえられるんだよ。」と、

いいました。

お月さまが上がったので、ふたりは出かけました。けれど、バンクずは、もうどこにも見あたりません。それは、森や野をとびまわっている、なん干ともしれない鳥たちが、みんなつついてもって行ってしまったのです。それでも、ヘンゼルはグレーテルに、「なあにそのうち、道がみつかるよ。」と、いつていましたが、やはりみづかりませんでした。夜中じゅうあるきとおして、あくる日も朝から晩まであるきました。それでも、森のそとに出ることができませんでした。それになにしろ、おなががすいてたまりませんでした。地びたに出ていた、くさいちごの實を、ほんのふたつ三つ口にしただけでしたもののね。それで、もうくたびれきって、どうにも足が進まなくなったので、一本の木の下のにごろりとなると、そのままぐっすり寝こんでしまいました。

(64)

一一

こんなことで、ふたりがおとつあんの小屋を出てから、もう三日めの朝になりました。ふたりは、また、とぼとぼあるきだしました。けれど、行くほど森は、ふかくばかりなっ

て来て、ここらでたれか助けに来てくれなかったら、ふたりはこれなりよわりきって、倒れるほかないところでした。

すると、ちょうどおひるごろでした。雪のように白いきれいな鳥が、一本の木の枝にとまって、とてもいい聲でうたっていました。あまりいい聲なので、ふたりはつい立ちどまって、うっとり聞いていました。そのうち、歌をやめて小鳥は羽ばたきをすると、ふたりの行くほうへ、とび立って行きました。ふたりもその鳥の行くほうへついて行きました。すると、かわいいこやの前に出ました。そのこやの屋根に、小鳥はとまりました。ふたりがこやのすぐそばまで行ってみますと、まあこのかわいいこやは、バンでできていて、屋根はお菓子かしでふいてありました。おまけに、窓はぴかぴかするお砂糖さとうでした。

(65)

「さあ、ぼくたち、あすこにむかって行こう。」と、ヘンゼルがいました。「けっこうなおひるだ。かまわない、たんとごちそうになろうよ。ぼくは、屋根をひとかけかじるよ。グレーテル、おまえは窓のをたべるといいや。ありやあ、あまいよ。」

ヘンゼルはうんと高く手をのばして、屋根をすこしかいて、どんな味がするか、ためしってみました。すると、グレーテルは、窓ガラスにからだをつけて、ぼりぼりかじりかけました。そのとき、おへやの中から、きれいな聲でとがめました。

「もりもり がりがり かじるぞ かじるぞ。
わたしのこやを かじるな だれだぞ。」

子どもたちは、そのとき、

「かせ かせ
そうらの子。」

と、こたえました。そして、へいきでたべていました。ヘンゼルは屋根が、とてもおいしかったので、大きなやつを、一枚、そっくりめくってもって来ました。グレーテルは、まるい窓ガラスを、そっくりはずして、その前にすわりこん



で、ゆっくりやりはじめました。そのとき、ふいと戸があいて、化けそうに年とつたばあさんが、しゅもく杖にすがって、よちよち出て来ました。ヘンゼルもグレーテルも、これには、したたかおどろいたものですから、せっかく両手にかかえたものを、ぼろりとおとしました。ばあさんは、でも、あたまをゆすぶりゆすぶり、こういいました。

「やれやれ、かわいいこどもたちや、だれにつれられてここまで来たかの。さあさあ、はいつて、ゆっくりお休み、なんにもされやせんからの。」

こういつて、ばあさんはふたりの手をつかまえて、こやの中につれこみました。中にはいると、牛乳^{ぎゅうにゅう}だの、お砂糖^{おさとう}のかかった、焼きまんじゅうだの、りんごだの、くるみだの、おいしそうなごちそうが、テーブルにならばりました。ごちそうのあとでは、かわいきれいなベッドふたつに、白いきれがかかっていました。ヘンゼルとグレーテルとは、その中にごろりとなって、天國にでも来ているような気がしていました。

このばあさんは、ほんのうわべだけ、こんなにしんせつらしくしてみせましたが、ほんとうは、わるい魔女^{まじよ}で、こどもたちのくるのを知って、パンのおうちなんかこしらえて、だましておびきよせたのです。ですから、こどもがひとり、手のうちに入^{はい}ったがさいご、さっそくころして、にてたべて、それがばあさんのなによりうれしいお祝い日になるとい

うわけでした。魔女は、赤い目をしていて、遠目とつめのきかないものなのですが、そのかわり、けものように鼻ききで、人間が寄よってきたのを、すぐとかぎつけます。それで、ヘンゼルとグレーテルが近くへやってくると、ばあさんはさっそく、たちのわるい笑い方を
して、

「よし、つかまえたぞ、もうにげようたつて、にがすものかい。」と、さもにくてらしく
いいました。

そのあくる朝もう早く、こどもたちがまだ目をささないうちから、ばあさんはおきだ
して来て、ふたりともそれはもう、まっ赤かにふくれたほったをして、すやすやと、いか
にもかわいらしい姿で休んでいるところへ来て、

「こいつら、とんだごちそうさね。」と、つぶやきました。

そこで、ばあさんは、やせがれた手でヘンゼルをつかむと、そのまま小さな犬ごやへは
こんで行つて、ぴっしやり格子戸こうしをしめきつてしまいました。ですからヘンゼルが、中でい
くらわめきたいだけわめてみせても、なんのやくにもたちません。それから、ばあさん
は、またグレーテルの所へ出かけて、むりにゆすぶりおこしました。そうして、

「このなまけもの、さあおきて、水をくんで来て、にいさんに、なんでもおいしそうなも

のを、こしらえてやるんだ。そとの犬ごやに入れてあるからの、せいせいあぶらぶとりに
ふとらさなきや。だいぶ、あぶらののつたところで、おばあさんがたべるのだからな。」
と、わめきました。

こうきいて、グレーテルは、わあつと、はげしく泣き立てました。けれどなにをしたつ
てむだでした。このたちのわるい魔女のいいなりほうだい、どんなことでも、グレーテル
はしなければなりませんでした。

こんなしないで、きのどくに、たべられるヘンゼルには、いちばん上等なお料理がつき
ました。そのかわり、グレーテルには、ザリガニのこうらが、わたったばかりでした。

まい朝まい朝、ばあさんは犬ごやへ出かけて行って、

「どうだな、ヘンゼル、指をだしておみせ。そろそろあぶらがのつて来たかどうだか、み
てやるから。」と、わめきました。

すると、ヘンゼルはたべあましのほそっこい骨を、一本かわりに出しました。ところで、
ばあさんはかすみ目しているものですから、見わけがつかず、それをヘンゼルの指だとお
もつて、どうしてヘンゼルにあぶらがのつてこないか、ふしぎでなりませんでした。

さて、それから、かれこれひと月たちましたが、あいかわらずヘンゼルは、やせこけた

ままでした。それで、ばあさんも、とうとうしびれをきらして、もうこの上待ちきれないとおもいました。

「やいやい、グレートル。」と、ばあさんは妹の子にむかってわめきたてました。「さあ、さつさといつて、水をくんでくるのだ。ヘンゼルのこぞうめ、もうふとつていようが、やせていようが、なにがなんだって、あしたこそ、あいつ、ぶつちめて、にてくつちまうんだからな。」

やれやれ、どうしましょう。かわいそうに、この妹の子は、むりやり水をくまされながら、どんなにはげしく泣きじゃくつたことでしょう。

「神さま、どうぞお助けくださいまし。」この子はさけび聲をあげました。「いっそ森の中で、もうじゆうにくわれたほうが、よかったわ。それだと、かえってふたりいっしょに死ねたのだもの。」

「やかましいぞ、このがきやあ。」と、ばあさんはいいました。「泣いたってわめいたって、なんにもなりやあしないぞ。」

あくる日は、朝つばらから、グレートルはそとへ出て、水をいっばいはった大鍋なべをつるして、火をもしつけなければなりませんでした。

「パンからさきにやくんだ。」と、ばあさんはいいました。「パンやきかまどはもう火がはいっているし、ねり粉もこねてあるしの。」

こういって、ばあさんは、かわいそうなグレートルを、パンやきかまどの方へ、ひどくつきとばしました。かまどからは、もうちよろちよろ、ほのおが赤い舌を出していました。

「なかへ、はいこんでみなよ。」と、魔女はいいました。「火がよくまわっているか見るんだ。よければそろそろパンを入れるからな。」

これで、もし、グレートルがなかにはいれば、ばあさん、すぐとかまどのふたをしめてしまうつもりでした。すると、グレートルは中で、こんがりあぶられてしまうところでした。そこで、これもついでにもりもりやってしまうつもりだったのです。でも、グレートルは、いちはやく、ばあさんのはらの中を見てとりました。そこで、

「あたし、わからないわ、どうしたらいいんだか。中へはいるって、どういうふうにするの。」と、いいました。

「ばか、このくそが、ちよう。」と、ばあさんはいいました。

「口はこんなに大きいじゃないか、目をあいてよくみろよ。このとおり、おばあさんだつてそっくりはいれらあな。」

こう言い言い、やつこら、はうようにあるいて来て、バンやきかまどの中に、首をつつこみました。ここぞと、グレーテルはひとつき、うしろからどんとつきました。はずみで、はあさんは、かまどの中へころげこみました。すぐ、鐵の戸をぴんとしめて、かんぬきをかってしまいました。うおッ、うおッ、ばあさんはとてもすごい聲でほえたけりました。グレーテルはかまわすかけだしました。こうして、罰^{ばち}あたりな魔女は、あわれなさまに焼けただれて死にました。

グレーテルは、まっしぐらに、ヘンゼルのいる所へかけだして行きました。そして、犬ごやの戸をあけるなり、

「ねえヘンゼル、あたしたちたすかつてよ。魔女のばあさん死んじやってよ。」と、さけびました。

戸があくと、とたんに、ヘンゼルが、鳥がかごからとび出したように、ばあつととび出して来ました。

まあ、ふたりは、そのとき、どんなにうれしがって、首つ玉にかじりついて、ぐるぐるまわりして、そしてほほずりしあつたことでしたか。こうなれば、もうなんにもこわがることはなくなりましたから、ふたりは魔女のうちの中に、すんすんはいつて行きました。

うちじゅう、すみからすみまで、眞珠^{しんじゆ}や寶石のつまつた箱だらけでした。

「こりや、小砂利^{こじやり}よりずっとまじだよ。」と、ヘンゼルはいつて、かくしの中に入れられるだけ、たくしこみました。すると、グレーテルも、

「あたしも、うちへおみやげにもつてくわ。」と、いつて、前掛にいつぱいにしました。

「さあ、ここらでそろそろ出かけようよ。」と、ヘンゼルはいいました。「なにしろ、魔女の森からぬけ出さなくては。」

それで、二三時間あるいて行くうちに、大きな川の所へ出ました。

「これじゃあ渡れやしない。」と、ヘンゼルはいいました。「橋にも、いかだにも、まるでわたるものがないや。」

「ここには、渡し舟も行かないんだわ。」と、グレーテルがいいました。

「でもあすこに、白いかもが一わおよいでいるわね。きつとたのんだらわたしてくれてよ。」そこで、グレーテルは聲をあげてよびました。

「かもちゃん かもちゃん 小がもちゃん、

グレーテルとヘンゼルが 来たけれど、

橋もなければ いかだもない、
おまえの白い おせなかに のせてわたして くださいな。」

かもは、さつそく来てくれました。そこで、ヘンゼルがまずのつて、小さい妹に、いっしょにおのりといいました。

「いいえ。」と、グレーテルはこたえました。「そんなにのつては、かもちゃん とてもおもいでしよう。べつべつにつれてつてもらいますわ。」

そのとおり、このしんせつな鳥はしてくれました。それで、ふたりぶじにむこう岸に渡りました。それから すこしまたあるくうち、だんだんだんだん、森が、おなじみのけしきになって来ました。そしてとうとう、遠くの方に、おとつあんのこやをみつけました。さあ、ふたりはいちもくさんに、かけだしました。ぼんとおへやの中にとびこんで、おとつあんの首根つこにかじりつきました。

この木こりの男は、こどもたちを森の中に置きざりにして来てからというもの、ただの一ときでも、笑える時がなかったのです。ところで、おかみさんも死んでしまっていました。

グレーテルは、前掛をふるいました。すると、しんじゆ眞珠とほうせき寶石が、おへやじゆうところがりだしました。こんどは、ヘンゼルが、かくしに片手をつつこんで、なんどもなんどもつかみだしては、そこにばらまきました。

まずこんなことで、心配や苦勞はきれいにふきとんでしまいました。親子三人それこそうれしいすくめで、いっしょになかよく、くらししました。

わたくしのお話もこれで市がさかえました。ほら、あすこに、小ねずみがちよろちよろかけていますね。たれでもつかまえた人は、あれで、大きな毛皮のすきんを、ごじぶんでこしらえてごらんさい。

仕立屋のちび勇士

一

あ

る夏の朝のことでした。仕立屋のちび公は、窓ぎわの仕事臺にむかいながら、上きげんで、げんきいっぱいな力を出して、せつせと着物をぬっていました。そのときお百姓の女が、おもてを通りかかって、

「上等なジャムはよしかな、上等なジャムはよしかな。」と、呼びたてました。

この聲が仕立屋のちび公の耳に、ピンとひびいて、いい音をたてました。そこで、ちび公は、窓からちびけな頭をつき出して、



「おい、おい、おかみさん、ここだよ。賣りものこらず總じまいにしてあげようよ。」と、聲をかけました。おかみさんは、ほくほくしながら、重たいかごをかかえて、だんだんを三階まで上がって行って、仕立屋の前に、持って来ただけのジャムのつぼをならべてみました。仕立屋はそのつぼをひとつひとつしらべて、頭の上に持ち上げて見たり、鼻先へ持って行ったりしたあげく、

「ふん、このジャムはなかなかよさそうだね。まあそのうち、四ロートだけはかってもらおうか、なに四半ポンドでもかまわないよ。」と、いいました。

おかみさんは、ここで、いい商賣をさせてもらうつもりでいたのが、大きにあてがはずれたので、しかたなしに、仕立屋のうだけの分量をはかって出して、そのかわりぶんとふくれかえって、出て行きました。

「さあこい、このジャムは神さまがくださった、げんきづけのおまじないだ。これで力もつくし、げんきもでるだろう。」

仕立屋はこういって、戸棚からパンを出して、そのなかからひとときれちぎって、ジャムをべたべた上になすりました。

「これで、パンのがみはないだろう。だが、まあ、よろしくやるまえに、ジャケットだけし

上げてしまおうせ。」と、仕立屋はいいました。

そこで、パンをわきにおいて、せっせとあとをぬいました。ごちそうが目先の先にぶらさがっているので、よけい針先のはこびが、かるいようでした。するうち、このあまつたるいジャムのおいが、かべの上まではい上がっていったと見えて、ちょうどそこにかたまってとまっていたはえのむれが、おいにさそわれておちて来て、ひとかたまりになって、ジャムの上にたかりました。

「やい、だれがてめえたちをよんだんだ。」と、仕立屋のちび公はどなって、このよばれもしないお客に、さっそく出ていってもらおうとしました。ところがはえには、仕立屋の國のことばがわからないものですから、へいこうして退陣するどころでなく、よけいたくさんかたまってやって来ました。そこで仕立屋のちび公も、よくいうとおり、かんしゃくの虫をおこして、

「待て、ちきしょう、こうしてくれるから。」と、言い言い、仕立臺の下から、あさのぬのを持ち出しました。そうして、ようしゃなくそれではえをたたきつけました。ぬのをひきあげてかぞえて見ると、七ひきより少ないはえが、枕をならべてうち死にしています。

「ざまあ見ろ、弱虫め。」といって、仕立屋はじぶんながら、勇もうなのにかんぶくしてしまいました。「どうだい。こりゃあひとつ、町じゅうに知らせてやらなきゃあ。」

そこで、大いそぎで、仕立屋のちび公は、きれを一本、おびにたって、ぬって、大きなもじで、その上に、

「ひとつち七つやつつける。」
と、ぬいつけました。

「なんてすてきなことだ。町ぐらいなんだ。世界じゅうに知らせてやらなきゃあ。」

こういううちに、もううれしさが、ぞくぞくこみあげて来て、むねのなかは、小ひつじのしっぽのように、びくんびくんしました。

一一

さて、仕立屋は、ぬいとりをしたおびを、からだにまきつけて、いよいよ広い世の中へ出て行こうとおもいました。なにしろじぶんぐらいの勇士が、こんなちっぽけな仕事場なぞにちぢかまってはいられないとおもったのです。そこでいよいよ出かけるまぎわになっ

て、なにか旅に持って行けるものはないかと、うちじゅう、さがしてみました。でもやっとみつかったのは、ふるチーズのかけらひとつだけでした。仕立屋はそれをかくしにしまいこんで出かけました。

さて、町の門を出ると、一羽の小鳥が、やぶの中にもぐって、出られなくなっているところを見つけました。これもいやおういわずかくしへ入れて、チーズと同居どうきよさせることにしました。そこで、勇ましく細脛はそすねにまかせて大またにあるきだしました。なにしろ、めかたのない上に、身軽みがるでしたから、つかれるということを知りません。やがて、山みちにかかつて、いよいよよつペンまであがったとき、そこにひとり、強そうな大男が、どつかとすわりこんで、のんびりそこらをながめまわしていました。仕立屋のちび公はそれを見ると、大はしやぎで、いきなり、つかつか進みよつて、こう話しかけました。

「いよう兄弟きょうだい、おはよう。どうしたい、大將、そんな所にじんどつて、ぼんやりむこうの廣い世界をながめて、どうするのかい。おいらは、これからひとつ、そのむこうの世界まで出かけて行って、ようすを見てくるつもりだ。どうだな、なかまになつて、行く氣はなかい。」

大男はあたまからばかにしたようすで、じろりとひと目、仕立屋のほうをみたなり、

「どこの豆つぶ粒だ。ちびっこのくせに、しやらくさい。」と、いいました。

「なんとでもいやあがれ。」と、言い言い、仕立屋のちび公は、上着うわぎのぼたんをはずして、大男にれいのおびを見せました。「おれがどんな人間だか、これを讀んだらわかるだろうぜ。」

大男が讀んでみると、

「ひとつち七つやつつける。」

と、書いてありました。七つというのは、仕立屋が殺した人間のかずだろうとおもつて、大男も、すこしばかり、このちび公に尊敬そんけいをよせることにしました。でも、いったいどのくらいやれるのか、ためしてやろうとおもつて、まず、じぶんから、石をひとつひろつて、手のなかでぎゅつとにぎると、じくじく、石から水が出てきました。

「どうだ、きさま、力らしいものでもあるなら、おれのまねをしてみい。」と、大男はいいました。

「なんだ、ぞうさもないことじゃないか。こどものいたずらみたいなものだ。」

仕立屋はこういつて、かくしのなかに手をいれて、チーズをつかみ出して、ぎゅつとにぎると、じくじく、汗あせが出て來ました。

「どうだ、すこしばかり、おまえさんよりあざやかだろうせ。」

大男は、なんといいかかわからなくなりましたが、でもそれだけで、このちび公を信用する気にはなりません。そこで大男は、また石をひとつひろって、もうとても目では見ることはできないほど、高いところへ投げあげました。

「どうだ、このへちま野郎、このまねはできまい。」

「なかなかうまく投げたな。だがいくら遠くへ投げたって、あの石は地びたへ、また落ちて来るよ。おれの投げる石は、投げたがさいご、二どとかえって来ないのだ。」

こういって、ちび公はかくしのなかへ手をつこんで、小鳥をつかみ出すとすばやく、大空にむかって投げあげました。小鳥は自由になったので、大喜びでとびあがって、まっしぐらに、空をめがけてまいあがると、それなり二どとはもどって来ませんでした。

「どうだね、兄弟、今の藝當は。」と、仕立屋はいいました。

「うん、なかなかよく投げるな。だが、すこしはどうにかしたもので、持てるかどうか、ついでにひとつためてやろう。」

大男はこういって、仕立屋をひっぱって、大きなかしの木が、地びたにたおれている所へつれて行きました。



「きさま、ほんとうに力があるなら、手つだって、この木を森のそとへはこび出してくれい。」と、大男がいうと、

「よし来た。」と、ちび公は、こまった顔もしませんでした。

「じゃあ、おめえ、先に立って、そのまん中のところをかついでくれ。おいらは枝のたくさんついたうしろのほうを持ちあげるからな。どうしてこれがいちばん重いところなのだ。」

大男が木の幹のところをかつぐと、仕立屋は、ちよこちよこ一本の枝の上のりしました。でも大男は、うしろをふりかえってみる事ができませんから、ひとり大きな木をしゃわされた上に、重荷の小づけの仕立屋のちび公まで、いっしょにのせて、はこばなければなりません。

うしろでは大げんきで、仕立屋は口笛くちぶえを吹きながら、

「三人の仕立屋さんが

町の門から

馬に乗って

出て行った。」

という、小唄をうたって、木をかつぐなんということは、ついおもしろい遊びごとのようでした。

それとはちがって、さすがの大男も、しばらく行くと、せなかの荷物がどうにも重くなつて、いじにも前へすすめなくなつて来たので、

「おおい、木をおつことすぞ。」と、どなりました。

仕立屋はすばやく、とびおりて、さも今までそれをかかえていたようすで、兩うでで木にとりついてみせながら、大男にいいました。

「おめえ、なんだ、そんな大入道おおにゆうざうのくせにして、このくらいの木がはこべないのか、あつ

はつは。」と、いいました。

ふたりはそれからつれだつて出かけました。やがて一本のさくらの木のそばまで来ると、大男は、おいしそうなさくらんぼのたくさんあったこすえをつかんで、ぐつと下までおり

まげて、仕立屋の手につかませて、

「このさくらんぼをくえ。」と、いいました。

けれども仕立屋のちび公は、なにしろちいさいからだで、とてもその木をおさえている力はありませんでした。ですから大男が手をはなすと、木はいきおいよく空の上へはねかえつて、はずみで仕立屋は、大空たかくけしとんでしまいました。でも、べつだんけがもせずに、またふらふら、地びたへおりて来ますと、大男は、

「どうしたい。それぐらいな枝がつかめないなんて、いくじがないなあ。」といいました。

「なに、いくじがないと。ひとつちに七つもやつつけたおれさまだ。これくらいのもものが、どうしたというのだ。なあに今しがた、かりうどがあの下をやぶの中にかくれていて、てっぽうをうちこんでいたから、わざと木をとびこえたのだ。おめえ、とべるなら、とんでみな。」

大男がそこでまねをしてとびましたが、木をとびこえることができないで、木の枝のあいだにつつかかってしまいました。そこでこண்டும்仕立屋が勝ちました。

そのとき、大男はいいました。

「きさま、ひどくげんきがいいなあ。どうだ、ひと晩、おれたちの巢にとまりに来て見るか。」

「よし来た。」と、仕立屋はふたつへんじで、のこのこついて行きました。

やがて大男のすむ洞穴^{ほらあな}まで来てみますと、そこにはほかの大男たちが、たき火をとりまいてすわっていました。そうして、てんでに、丸ごといぶつたひつじを、大きな手でつかんで持って、むしゃむしゃかじっていました。仕立屋のちび公は、きよろきよろそこらを見まわして、心の中で、

「どうして、こりやあ、おいらの仕事場より、ずっとひろいぞ。」とおもいました。

大男は、そこにならんでいる寢臺^{しんだい}をひとつ指さして、あの中にもぐって、ゆっくりねるがいいといってくれました。ところが、その寢臺は仕立屋のちび公には、ずいぶん大きすぎたので、中へはいらずに、ついすみっこにごそつともぐりこんでねました。

さて、夜中すぎになると、大男は、ちび公め、ぐっすりねこんでいるにちがいないとおもって、やおら立ち上がると、大きな鐵のぼうをかついで来て、ただひとつちに寢臺の上からどやしつけました。そうして、こんどこそはばったため、息の根をとめてやったとおも

いました。

あくる朝、もうくらいうちから、大男たちは森の中へ出て行って、仕立屋のちび公のことなんか、きれいに忘れていました。するとそこへ、またもやひよっこり、ちび公が、しかもたいしたげんきで、いばりかえってあらわれました。大男たちはびっくりして、こりやあこうしていると、おれたちのこらずやられてしまうかも知れない、こわい、こわいと、おじけづいて、大あわてにあわててにげだしました。

三

仕立屋のちび公は、あいかわらずとんがり鼻^{はな}のむくほうへ、ずんずんすすんで行きました。さんざん、はるばると流れあるいたすえ、ある王さまのお城^{しろ}の庭^{にわ}にたどりつきました。そうすると、急につかれが出て来たのか、ごろり草の上に横になると、そのままぐっすりねこんでしまいました。ねているあいだに、ほうぼうから、家來^{けらい}たちが、うじゃうじゃあつまつて来て、ちび公の頭^{かぶ}のてっぺんから足の先まで、ながめまわしたのち、

「ひとつち七つやつつける。」と、書いたおびの上の字を讀みました。

「やれやれ、この太平の御代に、なんという勇士があらわれて来たのだろう。これはたいした強い人にちがいない。」と、みんないいました。

そこで、ぞろぞろ王さまのところへ出かけて行って、この話を申しあげて、

「いまいくさでもはじまりますと、こういう勇士は、どんなたからにもかえがたい大事な人になりましょう。せひこの國におとどめあそばすように。」と、のべ立てました。

王さまは、このすすめをもつともだとおおもいになって、ご家來をひとり、仕立屋のちび公のいるところへお使者におつかわしになりました。そうして、目がさめしだい、ちび公に、せひ軍人になつてもらおうよう、すすめさせてごらんになりました。お使者はねている仕立屋のそばにつつ立ったまま待っていますと、やがて、小さな手足をうんとおぼして、ぽつかり目をあいたので、そこで、うやうやしくお使者の口上をのべました。

「いや、そのことなら、はじめからそのつもりでここへやって来たのだ。よろしい、王さまにご奉公いたしましょう。」と、仕立屋はこたえました。

そこで、仕立屋はていねいにむかえられて、とくべつのおぼしめしで、りっぱなお屋敷をいただくことになりました。

ところが、本職の軍人なかまでは、仕立屋のちび公をじゃまにして、どうか千里もとお

くへおいはらってしまいたいと、のぞんでいました。

「せんたい、どうなるというんじやい。」と、この連中は、ぶつぶついあいました。「われわれがあいつにけんかを吹つけてたかうとする、あいつは、ひとうちに七人もやつけるというのだ、それではでんで、われわれも齒が立たないじやないか。」

そこで、みんなは決心をきめて、うちそろって王さまのところへ行つて、ながいおいとまをいただきたいと申し出ました。

「どうもわれわれは、ひとうちに七人もやつけるような人物と、肩をならべてご奉公いたすわけにはまいりません。」

王さまも、ただひとり勇士のために、ほかのおおせいある忠義な家來たちのこらす、なくしてしまうことを、なさけなくお思いになつて、どうかしてあの男を目どおりからおざけたい、どこかへ行つてしまつてもらいたいと、おかんがえになりました。でも思いきつて仕立屋にひまをやることできないというわけは、もしこの男がおこつて、王さまぐるみ、この國の人民をみな殺しにやつつけて、じぶんが王さまの位にのぼりはしまいかと、それをこわがつておいでになつたからです。王さまは、しばらく、あれかこれかと考えたあげく、ひとつうまい工夫を思いつきました。そこで王さまは仕立屋のちび公のところへ、お

使者をおやりになつて、口上を傳えさせました。それは仕立屋のちび公が、古今むそうの大勇士であるについては、ひとつたのみたいたことがある。それはこの國の森の中に、ふたりの大男が巢をくつているが、しじゅう里へ出て物をかすめたり、人を殺したり、火をつけたり、さまざまなわざわいをするので、みんなよわつてゐる。たれでも、うっかりそばへよれば、一命をうしなうことになるので、おそれて近よるものがない。もしこのふたりの大男をたいじてくれるなら、ただひとりしかない、王さまのおひめさまをおよめにやつた上、王國の半分を持參金としてそえよう。ただし、大男退治には、百人の騎兵隊を加勢につけてあげようというのです。

「こりや、おれのような人間にはもつてこいだらうよ。きれいな王さまのおひめさまと、王國の半分がごほうびに出るなんていうことは、毎日あることじゃないからな。」と、こよう仕立屋は心の中におもいました。

そこで、

「へい、へい、よろしゅうございます。たかが大男ぐらい、さつそく退治てあげましよう。それから、百人の騎兵隊をつけてくださることは、ご無用になさいまし。ひとつうち七つやつつけるものが、大男のふたりばかりおそれるわけはありません。」

仕立屋のちび公は、そこで出かけて行きました。百人の騎兵隊も、あとからついて行きました。やがて、森の入口まできますと、仕立屋はついて來た兵隊に、

「まあ、君たち、ここに待っていてくれ。おれは、ついひとりで出かけていって、大男を片づけてくるから。」といつて、じぶんひとり、森の中へとびこんで行つて、右か左かと、きよろきよ見まわしました。

しばらくして、なるほど、ふたりの大男が見つかりました。ふたりとも、一本の木の下に横になつて、ぐうぐう高いびきをかいていました。そのいびきで、近所の大木の枝が、そこでもここでも大ゆれにゆれて波うっていました。仕立屋のちび公は、兩方のかくしに石をいっばい入れて、するすると木の上ののぼりました。やがて木の中ほどのところに、一本のふとい枝を見つけて、すべりおりて行つて、ちょうど大男たちのねてゐるま上に、すわりこみました。そうして、そこから、石をひとつづつ、まずひとりの大男の胸の上におとしました。この大男はしばらくなんとも感じないようでしたが、するうち、とうとう目をさますと、なかまをつついで、こよいいしました。

「きさま、なんだつてぶつんだ。」

「きさま、夢を見たんだろう。おれはぶちはしないぞ。」

これでふたりは、またねこんでしまいました。そこで仕立屋は、こんどは、もうひとりの大男の上に、石をおとしました。

「なにをするんだ、きさま、おれをどうするつもりだ。」と、その大男はどなりました。

「おれはなにもしやあしないぞ。」と、はじめの大男はこたえて、ぶつぶついつていました。ふたりは、しばらくがやがやいいあいましたが、なにしろ、ふたりともつかれきつているものですから、めんどろくさくなって、いかげんによして、また目をくつつけてしまいました。

仕立屋のちび公は、さつそくまたいたずらをはじめました。いちばん重たい石をさがし出して、ありつたけの力をこめて、さいしょの大男の胸にしたたかたたきつけました。

「ひどいことをするにもほどがある。」と、大男はわめいて、氣ちがいのようにとびあがると、ずしんとはげしく仲間なかまについて、木におしつけました。そのいきおいで木がぐらぐらゆすぶれました。すると、もうひとりも、まけずにむかっていつて、こんどこそ、ものすごい大げんかがはじまりました。なん本もなん本も、大木を根こぎにし、それを得物えものにたたかったあげく、とうとう、しまいには、兩方りょうほうともいっしょにうちたおれて、地の上にもろがりました。

そのとき、仕立屋のちび公は、木の上からとびおりて、

「まあ、おいらののつていた木を引っこぬかなかつたのはめつけものよ。へたをすると、おれはりすのように、こつちの木からむこうの木へ、とんではねて、にげまわらなければならぬところだった。とにかく、こつちは身がかるいんだ。」

こういいながら、劍けんをぬいて、ひとりひとり、大男の胸を、ぶぶつぶつきさしました。それから、騎兵隊のまっているところへ行って、こういいました。

「しごとはすんだよ。ふたりとも息の根をとめてやった。だがなにしろ汗をかかされたよ。あいつら、くるしまぎれに、やたらと木をひっこぬいて、むかって来たもんだ。だがそんなことをしたつて、どうなるものか、なにしろ、ひとりうち七つやつつけるおれさまにかかつては、なにをしたつてかなうものか。」

「それで、あなたさまに、おけがはございませんでしたか。」と、兵隊がたずねました。

「とんでもないことだ。かみの毛一本よじくれやしないよ。」と、仕立屋はいいました。でも兵隊は、どうしてもほんとうにはしないで、森の中へはいつてみました。するとなるほど、そこには大男どもが、じぶんの流した血の海の中をおよいでいて、そのまわりに

は、根こぎにされた木が、なん本なんもなん本も、ぶつたおれていました。

そこで、仕立屋のちび公は、かえるとさつそく、王さまにおやくそくのごほうびをねだりました。でも王さまはいまさら、つまらないやくそくしたことをこうかいして、どうかしてこの勇士をおいはらう工夫をまた考えだしました。そこでいうには、

「おまえは、わたしの娘と王國の半分をうけるについては、もうひとつ、てがらをたてなければならん。森の中に一角獣がすんで、村をあらしてこまる。あれをおまえ、行ってつかまえて来てもらいたい。」

「なあに、一角獣の一びきぐらい、大男ふたりにくらべれば、わけのないことですよ。ひとうちに七つやつつけるというのが、てまえの表かんばんで。」と、仕立屋のちび公はいいました。

そこで一本のつなと、一ちょうのおのを持って森へ出かけて行って、こんどもおともについて来たものを、森のそとへ待たせておきました。



たいして、てまもとれずに、もうさつそく一角獣があらわれて来ました。そうして仕立屋をめぐらして、ただひとつきに殺してしまいういきおいで、とびかかって来ました。

「まあ、まあ、せくなよ。そう短兵きゆうにやってくるなよ。」と、仕立屋はいいながら、そこに立ちはだかつて、けものがずつとそばまで、かけよつてくるところを待って、ひよいと身をかかわすと、もう木のうしろにかくれていました。一角獣はありつたけの力をこめて、まっしぐらについて来ました。はすみで一本角を木のみきへずぶりつきさしてしまいました。もうそれなり、角をひきぬく力もなく、やすやすと生けどられてしまいました。

「さあ、小鳥をものにしたぞ。」と、仕立屋はいいながら、木のかげから出て来ました。まず一角獣の首につなをかけておいて、それからおの角を木から切りはなして、すっかり用意ができたところで、けものを引っぱって、王さまのところへつれて行きました。

王さまは、それでもなかなか、やくそくのごほうびをきれいにしようとはしないで、三ばんめの条件をもちだしました。仕立屋は、ご婚禮までこぎつける前、これも森の中であれば、持っているのししを、一頭つかまえてこなければなりません。加勢には、りょうし

「いや、けつこうでしようよ。こりやあ、こどものあそびみたいなものだ。」と、仕立屋は



いました。

こんども、りょうしたちは、森の外でまっていることになりましたが、なにしろ、いのししはたびたびおいつけていて、めずらしくもなくなっているのです、この連中もおとなしく、いうことをきいてくれたのです。

さて、いのししは、仕立屋を見ると、口からあわを吹き吹き、きばをむき出して、とびかかって来て、相手をいきなり地びたになげとばすいきおいでしたが、どうして、このすばしい勇士は、じょうずに身をかわして、すぐそばにあったお堂どうの中にとびこみました。そうして、ちようど戸の上にあった、小さいまどから、するりと外へぬけられました。いのししは、むこう見ずに仕立屋のあとをおっかけて、これも、お堂の中へとびこみました。とびこむといっしょに、すばやく、そとから戸をしめられてしまったので、さすがの猛獸もうじゆうも、おめおめとりこ

なりました。なにしろ、からだがぶきように重いので、もちろんぬけ出すことなぞできません。さて、仕立屋のちび公は、りょうしたちをよびあつめて、いのししがこのとおり生いけどられてるところを、見とどけさせました。

これで、三つのがらをりっぱにしとげた大勇士は、意氣いきようようと、王さまのところへがいせんして行きました。

こうなるといやでも、王國の半分と、おひめさまとを、ごほうびにやらなければなりません。それも、じぶんの前に立っているちび公だとわかったら、よけいくやくしくおもったにちがいありません。

こういうわけで、ご婚禮こんれいはたいそうりっぱに、ただし、いっこうおめでたくもなく、あげられました。そうして仕立屋のちび公は、とうとう王さまになりました。



灰だらけ姫（シンデレラ）

一

あ
 るお金持の男のうちで、奥さんがひどくわずらっていました。奥さんは、もういよいよ死神のおむかえがやって来たことがわかったので、まだちいさいひとりの子の女の子を、まくらもとによんで、「嬢や、すなおに神さまをねがって、いい心をもっていてください。そうすれば、いつも神さまはそばについてくださるでしょうし、おかあさんも、天国からあなたをみまもってあげて、あなたの身をはなれ

ないでしょうよ。」

これだけいって、このおかあさんは目をとじると、それなりあの世の人になりました。女の子は、まいにち、おかあさんのお墓へおまいりしては泣いていました。そして、すなおに神さまをねがって、いい心をもっていました。やがて冬が来て、雪が白いぬのを、やさしくお墓の上にかかけました。さて、春になって、お日さまがまたそのぬのをおどけに言ったとき、お金持のその男は、べつの奥さんをもっていました。

こんどの奥さんは、ふたりまで、じぶんのむすめをつれて来ました。むすめたちはきれいで白い顔はしていながら、いじくねわるいまっ黒な心をしていました。ですから、かわいそうに、ままつ子のむすめには、くるしいやなその日その日が、すぎることになりました。「あほうながちょうむすめのくせに、よくもうちで、へやの中にちゃんとしていられたものだよ。」と、この母と子が、口をそろえていいました。「バンがたべたかったら、だれだつてじぶんでかせぐにきまつてらあね。さあ、女中のなかま入りして出て行くんだぞ。」こういって、この女の子の着ていたきれいなきものをはいで、そのかわりに、ねずみ色にはげたふる着の上ッぱりを着せて、木の靴をはかせました。「まあごらんよ、あのすましやのお姫さまをさ。お化粧がとんとよく似あうじゃないの。」

三人の母娘は大きな聲でいって、わらいはちけながら、女の子を台所へつれて行きまし
た。

一一

こんなわけで、女の子は、朝から晩まで、つらい台所仕事をしなければならぬことにな
りました。朝は日の出るからおきだして、水をはこんだり、火をもやしたり、にももの
すれば、せんたくもしました。それさえあるのに、腹ちがいのきょうだいたちふたりが、
あの手この手といじめるくふうばかりしていましたし、ひどいにくまれ口もききました。
そして、わざと、えんどう豆やひら豆を灰の中にぶちまけておいて、女の子がいやでもす
わってそれをひろいださなければならぬようにしました。さて、日がくれて、もう一日
はたらいてくたびれきついても、女の子には休む寢床ねどこがありません。かまどの前の灰の
中でごろりと横になるほかはないのです。そんなわけで、この子は、いつもごみをかぶっ
てよごれくさったふうをしているので、アッシュンブッテル——灰だらけと、たれもこの子
をよぶようになりました。

ところである日、この女の子たちのおとうさんが、歳としの市に出かけることになりました。
おとうさんは、まずふたりのままむすめに、なにをおみやげに買ってこようかとさきま
した。

「きれいなきものをね。」と、ひとりがいいました。

「眞珠しんじゆと寶石ほうせきよ。」と、もうひとりがいいました。

「それで、灰だらけちゃん。」と、おとうさんはいいました。「おまえはなにがほしいな。」

「おとうさん、では、おとうさんのおかえり路にね、帽子に木の枝がさわったら、いちば
んさきにさわった枝を、折ってきてくださいね。」

おとうさんは、ふたりのまま子きょうだいのおみやげに、きれいなきものと、眞珠と寶
石を買いました。それから、かえりみちに、あるみどりぶかい木だちのなかを馬でとおっ
て行くうち、はしばみの木の小枝がさわって、帽子をはねとばしました。そこで、おとう
さんは、その枝を折ってもつてかえりました。それから、うちにかえると、まま子のむすめ
たちに、おのぞみの品をそれぞれわけてやりました。そして、灰だらけには、はしばみの木
の小枝をやりました。灰だらけは、おとうさんにお禮をいってから、その枝をもって、お
かあさんのお墓へ出かけました。そして小枝をお墓にさして、もうそれははげしく、泣い

て泣いて泣きじゃくりましたから、涙がじんじんおちて枝にそそぎました。枝はおかげでふくれて育って、美しい木になりました。灰だらけは、まいにち三ど、その下へ行つて、泣いておいのりしました。すると、そのたんびに、一わのまつ白な小鳥が木の上に来て、灰だらけが、それにむかつて、なにか望みのものをいうと、小鳥はなんでも上からおとしてくれました。

三

さて、そのうち、この國の王さまが、大宴會たいんかいを催もよおされることになりました。宴會は三日もつづくことになつていました。そして、國じゅうの、ありとある美しいおとめたちが、それに招かれることになつたのですが、それは王子の花よめになるひとを、そのなかから



さがしだすためでした。ふたりのまま子きょうだいも、その宴會に出られることになつているときいて、大はしやぎにはしゃいでいました。そこで、灰だらけをよびつけて、

「さあ、あたしたちの髪かみを梳すくんだ。あたしたちの靴くつもみがいて、それから、胸むねをきゅつと、しめがねでしめておくれ。あたしたち、王さまのお城へご婚禮のおよばれで出かけるのだからね。」といいました。

灰だらけは、おとなしくいうとおりしてやりました。けれど、じぶんだって、いっしょにそういう所へ出て、ダンスがしてみたいとおもつて泣きました。それで、ママ母に、あたしにも行かせていただけないでしょうか。きいてみました。

「なにをまあ、灰だらけが、」と、この女はいいました。「そんなごみだらけすすだらけなからだで、お祝の席に出るってのかい。きものも靴もなくせに、ダンスしようってのかい。」それでも、女の子はひるまず、せひにといってせがみました。それで、ママ母もやっとなんか、それでは、大皿おおいにいっぱい、ひら豆が灰の中にぶちまけてある、あれをまず、いまから二時間のうちに、豆まめだけでもとのおりひろいだしたら、いっしょに行かせてやろうよ。」といいました。

女の子はうらの戸をあけて、庭へ出て、

「やさしいはとちゃん、きじばとちゃん、お空の下の小鳥ちゃん、だあれもかあれも、みんな来て、あたしのお豆ひろいのお手つだい、してちょうだい、」

いい豆アおつぽに

いけない豆ア餌えぶくろに。」

とよびました。すると、台所の窓の所に白ばとが二わとんで来ました。それから、きじばとがなんばもやって来ました。するうち、ばたばた、ばたばた、羽音をたてて、空の下の小鳥のこらす寄つて来て、灰のお皿をとりまきました。それから、はとなかまが、ちいさいあたまをこくりと下げて、ピコ、ピコ、ピコ、ピコとくちばしでやりだしました。すると、ほかの小鳥たちもやはり、ピコ、ピコ、ピコ、ピコとくちばしでやりだして、いいほうの豆粒まめつぶのこらす、お皿の中へよりだしました。それこそ一時間とたたないうち、みんなしてしまつて、またばあつととんで行きました。そこで、女の子は、このお皿をママ母の所へもつて行きました。そして大にこにこで、これでお祝の席へつれて行つてもらえらるとおもいこんでいました。でも、ママ母は、

「だめなこつた、灰だらけなんか、きものがなくて、ダンスなんかできるかい。いいわらいものにされるだけさ。」といました。

それで、女の子が泣きだしますと、ママ母は、

「そんなら、ふたつの皿にひら豆をいっぱい入れて、それを一時間できれいに灰からより出せたら、いっしょに行かしてやるよ。」といました。

こういいながら腹の中では、(とてもできっこないにきまつてるさ)とおもっていました。さて、ママ母が大皿に二皿のひら豆を、灰の中へぶちまけてしまったとき、女の子はうらの戸をあけて庭に出て、

「やさしいはとちゃん、きじばとちゃん、お空の下の小鳥ちゃん、だあれもかあれも、みんな来て、あたしのお豆ひろいのお手つだい、してちょうだい、」

いい豆アおつぽに

いけない豆ア餌えぶくろに。」

とよびました。すると台所の窓の所に、白はとが二わとんで来ました。それから、きじばと

がなんばもやって來ました。するうち、ばたばた、ばたばた、羽音を立てて、空の下の小鳥のこらす寄つて來て、灰のお皿をとりまきました。それからまず、鳩なかまが、ちいさいあたまをこくりと下げて、ピコ、ピコ、ピコ、ピコとくちばしでやりだしました。すると、ほかの小鳥たちもやはり、ピコ、ピコ、ピコ、ピコとくちばしでやりだして、いいほうの豆粒のこらす、お皿の中へよりだしました。それこそ半時間とたたないうち、みんなしてしまつて、またばあつとんで行きました。そこで、女の子は、このお皿をママ母の所へもつて行きました。そして、大にこにこで、こんどこそ、お祝の席へつれて行つてもらえるとおもいこんでいました。でも、ママ母は、

「なにをしたつて、おまえなんかだめなこつた。おまえはいっしょに行けやしないよ。だつて、そうじゃないか、きもの一枚なくて、ダンスができるかい。おかげでわたしたちがはじをかかされるにきまつてらあね。」

こういうなり、この女はくるりとせなかをむけて、いばりやのふたりむすめをつれて、さつさと出て行きました。

さて、うちじゆうにたれもひとのいなくなったとき、灰だらけは、おかあさんのお墓のはしばみの木の下に行つて、

「はしばみの木ちゃん、ゆすれてね、ふるえてね、

ゆらゆら、ぶるぶる、金と銀をおとしてね。」

とよびました。

すると、いつもの鳥が、金と銀の糸でおったきものと、絹糸と銀糸でぬいとりしたうわばき靴をおとしてくれました。大いそぎで、女の子はきものを着かえて、お祝の席へ出て行きました。でも、ママ子のきょうだいたちにしても、ママ母にしても、それがわからなのままに、きつとどこぞの王さまのお姫さまだとおもつていました。金の衣裳いしやうにつつまれたこの子の姿は、それほど美しくみえました。まさかこれがうちの灰だらけだともゆめおもわず、あいつもいまごろは、うちでごみあぐたの中にすわつて、灰の豆でもより出しているよと、おもつていました。

灰だらけがはいつてくると、王さまのむすこはさつそくむかえに出て來て、その手をとつて、いっしょにダンスしました。そのほかのたれともまるでおどろうとはしませんでした。ですから、いちどとつたその手を、まるではなそうともしず、たれかほかのものが來て、灰だらけのあいてにといつても、王子はきつぱりと、

「いや、このひとは、ぼくのおどり手だよ。」といいきりました。

こうして、日のくれるまでおどりました。灰だらけも、ここらでもうかえらせていただきますといいました。でも王子は、

「ぼくがいつしよについて行ってあげる。」と、いいました。と、いうのは、この美しい女のひとが、どこのむすめだか、王子は知りたかったからでした。むすめはでもうまくすりぬけて、はとごやへとびこんでしまいました。それで、たれか出てこないかと王子が待っていますと、やっと父親が出て来たので、よその女の子がはとごやの中にとびこんだようだとおしえました。父親はきいて、(はてな、そいつは灰だらけのほかにはないが)とかがえしました。そこで、おのとなたをもつてこさせて、はとごやをまっぶたつにたたきわってみました。でもなかにはたれもおりませんでした。さて、みんなしてうちにはいつてみると、灰だらけはいつものひどい身なりで、灰の中にうずくまっています。そして、ねぼけた石油ランプが、けむだしの中にしょんぼりとぼつていました。これは、灰だらけがいちはやくはとごやからとびだして、いつもののはしばみの木の所へかけて行ったからでした。そこで、この子はさつさときれいな衣裳をぬいで、お墓の上におきますと、いつもの鳥がそれをもつて行きました。それで、灰だらけはまたいつものねずみ色のうわっばりをきて、臺所

へはいつて、灰の中にもぐりこんでいたのです。

そのあくる日も、催しもよおがまた新しくはじまりますと、ふた親はまま子のきょうだいをつれて出て行きましたから、灰だらけはさつそく、はしばみの木のところへ出かけて、

「はしばみの木ちゃん、ゆすれてね、ふるえてね、
ゆらゆら、ふるふる、金と銀をおとしてね。」

といいました。

すると、いつもの鳥が、きのうのよりもいちだんとごうせいな衣裳を、なげおとしてくれました。さてこの衣裳を着て、灰だらけがお祝の席にあらわれますと、その美しいこと、たれもかれもあつといつて、目をみはるばかりでした。

ところで、王子は、灰だらけのくるのを待ちかまえていたところでしたから、すぐとその手をとって、このむすめだけあいてにしておどりました。ほかのものが来て、ダンスのあいてにしようとする時、

「いやこのひとはぼくのおどり手だよ。」といいました。やがて日がくれて来たので、灰

だらけがうちへかえろうとしますと、王子はあとからついて行って、どこのうちにはいるかみようとしました。でも、女の子はすばやくとんでにげて行って、うちのうしろの庭にはいつてしまいました。そこには一本、みごとななしの大木があつて、それにとてもすばらしいなしの實が、たれるほどのみっていました。むすめはりすのようになしにちよちよるとのぼつて、枝と枝とのあいだにかくれてしまいました。それで、どこへ行ってしまったのか、王子にはわからなくなりました。そこで、たれかこないかと、王子が待っていますと、やっと父親が出て来たので、

「よその女の子が、ぼくをおいてにげ出したが、その子はあのないの木のの上にとび上がった。」といいました。父親はきいて、(はてな、灰だらけのほかにはないが。)とかんがえました。そこで、おのをもつてこさせて、その木をきりたおしました。けれど、たれもそのの上にはいませんでした。それでみんな臺所まで来てみますと、灰だらけはいつものとおりの、灰の中にうすくまっています。これは、灰だらけが、すぐなしの木のむこうがわへとびおりて、はしばみの木の上にいる鳥に、きれいな衣裳をかえしておいて、じぶんはねずみ色のうわつぱりを着ていたからです。

三日めも、ふた親ときょうだいたちが行ってしまったあとで、灰だらけはまたおかあさん

のお墓へ行って、はしばみの木に話しかけました。

「はしばみの木ちゃん、ゆすれてね、ふるえてね、

ゆらゆら、ふるふる、金と銀をおとしてね。」

そのとき、いつもの鳥が投げおとしてくれた衣裳は、それこそきらきらびかびか、目がさめるようで、むかしからたれひとり身につけたものがないようなものでした。それにうわばき靴もすつかり金すくめというすばらしきでした。ですからこの衣裳で灰だらけが、席にあらわれたとき、たれもかれも、おどろきあきれるばかりで、それをなんとことばでいったものか、とほうにくれていました。王子はまるつきり、このむすめとばかりおどりました。そしてたれかおどりたいといつて來ても、王子はきつぱり、

「このひとはぼくのおどり手です。」といいました。

さて日がくれたので、灰だらけはかえろうとしました。王子はいっしょについて行くこととしました。けれどいかにもすばしこくとんでにげて行ったので、追いつくことができませんでした。王子はでも、ひとつするいくふうをほどこして、かねがね階段かくだんいちめん、ちや

ん(瀝青)というくすりをぬらせておきました。ですから、とびおりて行くとき、女の左のうわばき靴が、ちゃんにくつついて、それなりあとにのこりました。

王子がこの靴をはがしてとつてみますと、それはきやしゃでかわいらしくて、のこらずが金でした。そのあくる日、王子はその靴をもって、お金持の男の所へ出かけて行って、こよいいきました。

「どうもぼくの妻になるのは、この金の靴がしっくり足にはまるむすめよりほかにはないのだ。」

こうきいて、ふたりのままきょうだいはほくほくしました。ふたりともきれいな足をしていましたからね。まず、姉のむすめが靴をもって、へやの中にはいつて、ためしにかかりました。母親もそばについてみました。ところが指の先がふとすぎてはいらないし、すべて靴がちいさすぎました。それをみると、母親はむすめに切れものをかしてやって、「指先ぐらい切っておしまい。お妃さまになつちまやあ、もう足であるくことはいらなくなるさ。」といいました。むすめは指先を切りおとして、むりやり足を靴にはめこみました。そして、痛い足をがまんしてひきずって、王子の所へ出て行きました。そこで、王子は、このむすめを花よめごにするつもりで馬にのせて、いっしょに出て行きました。とちゅうれ

いのお墓のそばを通ることになりました。すると、はとが二わ、はしばみの木の上にとま

「うしろちよいとみな、ちよいとみな、

くच्चゆ(靴)ン中ア血イだらけ、

くच्चゆがちいぢやすぎるのだ、

ほんとのよめごはうちにいる。」

とよび立てました。こういわれて、ちらと足をみますと、なるほど、血がぼたぼた出ていました。王子はくるりと馬をあとへかえして、にせよめをまたうちへつれて行って、これはほんものではないようだ。もうひとりのきょうだいに靴をはかしてみよう、といいました。そこで、このむすめがへやの中にはいました。このほうは爪先だけうまく靴にはまりましたが、かかとが大きすぎました。それをみて、母親がむすめに切れものをわたして、

「かかとを少しけずるがいい。お妃になつちまいさえすりやあ、もう足であるくこともい

らなくなるさ。」といました。

むすめは、かかとの先をすこしけずって、むりやり足を靴におしこみました。そして、痛む足をがまんしてひきずって、王子の所へ行きました。そこで、王子は、このむすめを花よめにするつもりで、馬にのせて、いっしょに出て行きました。

ふたりが、はしばみの木のそばを通りかかると、はとが二わ、木の上ののっけていて、

「うしろちよいとみな、ちよいとみな、

くच्चゅん中ア血イだらけ、

くच्चゅがちいちゃすぎるのだ、

ほんとのよめごはうちにいる。」

王子は下目しためでむすめの足をちらとみました。それで、血がじくじく靴からながれて、白い靴下の上のほうまでまっ赤にしみだしているのがわかりました。そこで、王子は馬をあとへかえして、にせよめをまたうちへつれて行きました。

「これもやはりほんものではないよ。」と、王子はいいました。「おまえたち、ほかにもうむすめはないのか。」

「ございません。」と、主人の男がいました。「もつとも、なくなりました家内かぢにまだひとり、これは、ちびで半かたわな灰だらけのむさいむすめがおるにはおりますが、とてもおよめごさまにさしあげるようなものではございません。」

王子はそれでも、せひそのむすめを出すようにといいました。

すると、母親はさえぎって、

「とんでもないことで。まあ、あのようなもの、とてもむさくるしくて、お目通りに出せるしろものではございませんから。」と、いい立てました。

それでも王子はあくまでみたいといつてきかないので、灰だらけが呼びだされることになりました。そこで、このむすめは、まず、両手と顔をきれいに洗ってから、王子の前に出てあたまを下げました。王子は金の靴を出してわたしました。そのとき、むすめは、足臺に腰をのせて、おもたい木靴のはまった足をぬき出して、うわばき靴にはめかえました。それはまるで鑄いつけたようにあわさりしました。それから、腰をのばして立ち上がったとこ

ろを、若い王さまはひと目みて、いっしょにダンスしたあの美しいむすめだということが顔
でわかりました。で、大きな聲で、「これがほんとの花よめだ。」といいました。
まま母とふたりの女きょうだいは、ぎよつとしました。もうくやしいので青くなりまし
た。王子はかまわず、灰だらけ姫を馬にのせて、いっしょに出かけて行きました。ふたり
が、はしばみの木のそばを通りかかりますと、二わ
の白はとが、

「ちよいとうしろみな、ちよいとみな、

くच्चゆン中ア血はないよ、

くच्चゆもちいちやすぎないで、

つれて行くのは、ほんよめご。」

とよび立てました。さてそうよんだあと、はとは二
わともとんで下りて来て、灰だらけ姫のかたのとこ
ろへ、一わは右、一わは左へとまりました。そして



そのままそこにいました。いよいよ、王子と姫のご婚禮こんれいがあげられることになったとき、
にせよめの女きょうだいが、お福分けふくわけにあずかるつもりで、ついしょうたらだらやつて來
ました。

さて、花よめ花むこがそろってお寺へ行くだんになると、姉のむすめは右手に、妹のむ
すめは左手に、くつついてあるきました。そこへれいの二わのはとが来て、きょうだいの目
を、両方からひとつつつき出しました。それから、式がすんで出てくるとき、こんど
は、姉のむすめが左手に、妹のむすめが右手に、くつついていました。すると二わのはと
が、両方から、のこった目をひとつつつきだしました。

こんなしないで、ふたりはいじわるをしたり、にせよめになつたりした罰はぢで、一生めく
らでくりました。



赤ずきんちゃん



む
かし、むかし、あるところに、ちいちゃいかわいい女の子がいました。それはたれだつて、ちよいとみただけで、かわいくなるこの子でしたが、でも、たれよりもかれよりも、この子のおばあさんほど、この子をかわいがつているものはなく、この子を見ると、なにかもやりたくてやりたくて、いったいなにをやつていいのかわからなくなるくらいでした。それで、あるとき、おばあさんは、赤いびろうどで、この子にずきんをこしらえてやりました。すると、それがまたこの子によく似あうので、もうほかのものは、なんにもかぶらないと、きめてしまいました。そこで、

この子は、赤ずきんちゃん、赤ずきんちゃん、とばかり、よばれるようになりました。

ある日、おかあさんは、この子をよんでいいました。

「さあ、ちよいといらっしゃい、赤ずきんちゃん、ここにお菓子かしがひとつと、ぶどう酒しゅがひとつとびんあります。これを赤ずきんちゃん、おばあさんのところへもつていらっしゃい。おばあさんは、ご病氣でよわつていらっしゃるが、これをあげると、きっと元氣になるでしょう。それでは、あつくならないうちにおでかけなさい。それから、そとへでたら氣をつけて、おぎょうぎよくしてね、やたらに、しらない横道へかけだしていったりなんかしないで、おぎょうぎよくしてね、ころびでもしたら、せつかくのびんはこわれるし、おばあさんにあげるものがなくなるからね。それから、おばあさんのおへやにはいったら、まず、おはようございます、をいうのをわすれずにね。はいると、いきなり、おへやの中をきょろきょろみまわしたりなんかしないでね。」

「そんなこと、あたし、ちゃんとよくしてみせてよ。」と、赤ずきんちゃんは、おかあさんにそういつて、指きりしました。

ところで、おばあさんのおうちは、村から半道はなれた森の中になりました。赤ずきんちゃんが森にはいりかけますと、おおかみがひよつこりできてきました。でも、赤ずきんちゃん

んは、おおかみって、どんなわるいけだものだから、べつだん、こわいともおもいませんでした。

「赤ずきんちゃん、こんちは。」と、おおかみはいいました。

「ありがとうございます、おおかみちゃん。」

「たいそうはやくから、どちらへ。」

「おばあちゃんのところへいくのよ。」

「前かけの下にもってるものは、なあに。」

「お菓子に、ぶどう酒。おばあさん、ご病気でよわっているでしょう。それでおみまいにもってあげようとおもって、きのう、おうちで焼いたの。これでおばあさん、しっかりなさるわ。」

「おばあさんのおうちはどこさ、赤ずきんちゃん。」

「これからまだ、八、九町もあるいてね、森のおくのおくで、大きなかしの木が、三ぼん立っている下のおうちよ。おうちのまわりに、くるみの生垣いながきがあるから、すぐわかるわ。」

赤ずきんちゃんは、こうおしえました。

おおかみは、心の中でかながえていました。

「わかい、やわらかそうな小むすめ、こいつはあぶらがのって、おいしそうだ。ばあさまよりは、ずっとあじがよからう。ついでにりょうほういっしょに、ばつくりやるくふうがかんじんだ。」

そこで、おおかみは、しばらくのあいだ、赤ずきんちゃんとならんであるきながら、道みちこう話しました。

「赤ずきんちゃん、まあ、そこらじゅうきれいに咲いている花をごらん。なんだって、ほうぼうながめてみないんだらうな。ほら、小鳥が、あんなにいい聲で歌をうたっているのに、赤ずきんちゃん、なんだかまるできないやうだなあ。学校へいくときのやうに、むやみと、せつせこ、せつせこ、あるいているんだなあ。そとは、森の中がこんなにあかるくてたのしいのに。」

そういわれて、赤ずきんちゃんは、あおむいてみました。すると、お日さまの光が、木と木の茂った中からまれて、これが、そこでもここでも、たのしそうにダンスしていて、どの木にもどの木にも、きれいな花がいっぱい咲いているのが、目にはいりました。そこで、

「あたし、おばあさまに、げんきでいきおいのいいお花をさがして、花たばをこしらえ

て、もってつてあげようや。するとおばあさん、きつとおよろびになるわ。まだ朝はやいから、だいじょうぶ、時間までに行かれるでしょう。」

と、こうおもつて、ついと横道から、その中へかけだしてはいつて、森の中のいろいろの花をさがしました。そうして、ひとつ花をつむと、その先に、もつときれいながあるんじゃないか、という気がして、そのほうへかけて行きました。そうして、だんだん森のおくへおくへと、さそわれて行きました。

ところが、このあいだに、すきをねらつて、おおかみは、すたこらすたこら、おばあさんのおうちへかけていきました。そして、とんとん、戸をたたきました。

「おや、どなた。」

「赤ずきんちゃんよ。お菓子とぶどう酒を、おみまいにもつて来たのよ。あけてちょうだい。」

「とつ手をおしてくれ。おばあさんはご病氣でよわつていて、おきられないのだよ。」

おおかみは、とつ手をおしました。戸は、ぼんとあきました。おおかみはすぐとはいつていつて、なんにもいわずに、いきなりおばあさんのねているところへ行つて、あぐりひと口に、おばあさんのみこみました。それから、おばあさんの着物を着て、おばあさん

のすきんをかぶつて、おばあさんのお床とこにごろりと寝て、カーテンを引いておきました。

赤ずきんちゃんは、でも、お花をあつめるのにむちゆうで、森じゆうかけまわつていました。そうして、もうあつめるだけあつめて、このうえ持ちきれないほどになったとき、おばあさんのことをおもいだして、またいつもの道にもどりました。おばあさんのうちへ来てみると、戸があいたままになっていたので、へんだとおもいながら、中へはいりました。すると、なにかが、いつもとかわつてみえたので、

「へんだわ、どうしたのでしょうか。きょうはなんだか胸がわくわくして、きみのわるいこと。おばあさんのところへくれば、いつだつたのしいのに。」と、おもいながら、大きな聲で、「おはようございます。」

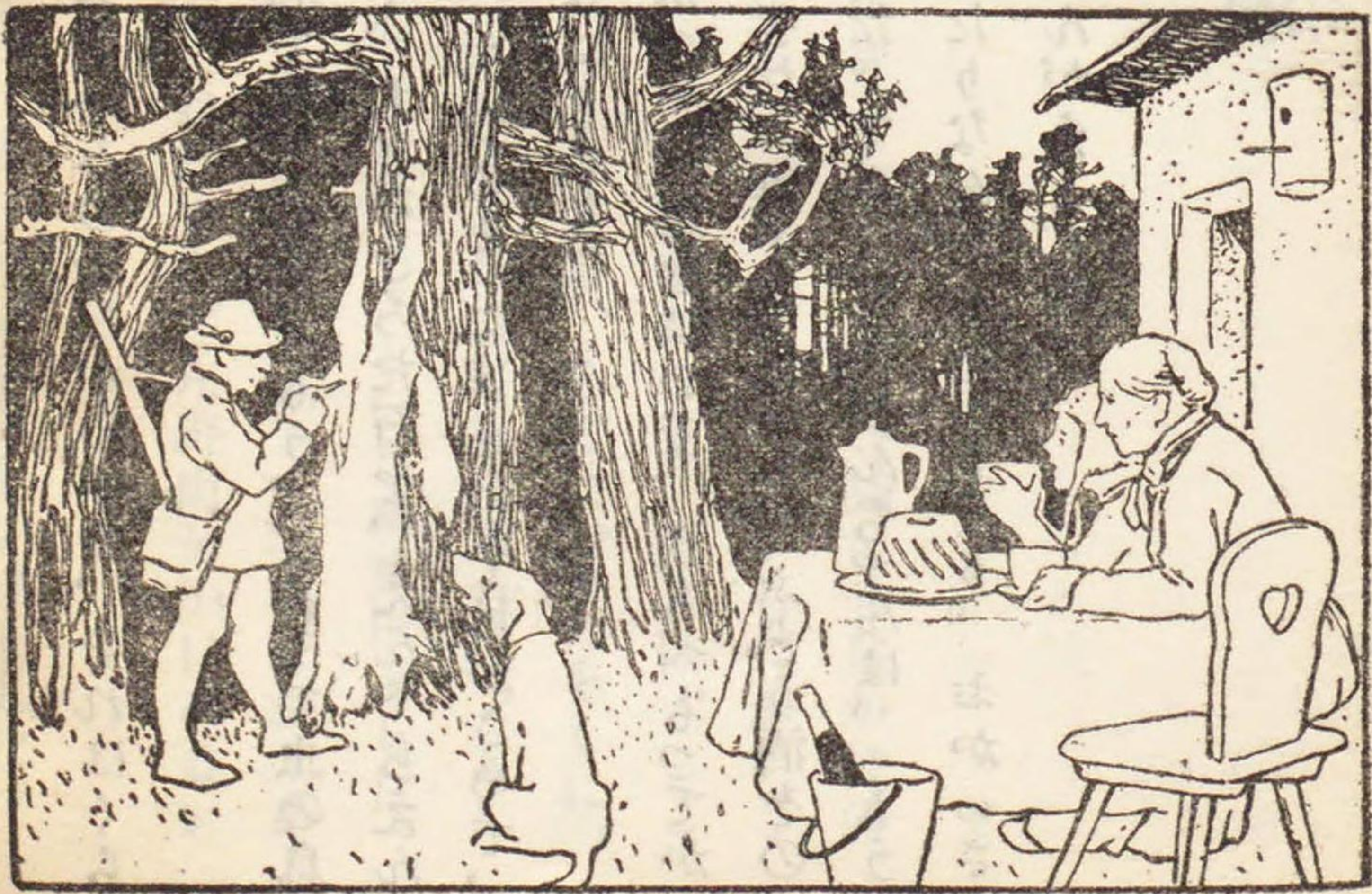
と、よんでみました。でも、おへんじはありませんでした。

そこで、お床とこのところへいつて、カーテンをあけてみました。すると、そこにおばあさんは、横になっていましたが、すきんをすっぽり目までさげて、なんだかいつもとようすがかわっていました。

「あら、おばあさん、なんて大きなお耳。」

「おまえの聲が、よくきこえるようにさ。」
「あら、おばあさん、なんて大きなおめめ。」
「おまえのいるのが、よくみえるようにさ。」
「あら、おばあさん、なんて大きなおてて。」
「おまえが、よくつかめるようにさ。」
「でも、おばあさん、まあ、なんてきみのわるい大きなお口だこと。」
「おまえをたべるにいいようにさ。」
「こういうがはいか、おおかみは、いきなり寢床からとびだして、かわいそうに、赤ずきんちゃんを、ただひと口に、あんぐりやっしてしまいました。」
これで、したたかおなかをふくらませると、おおかみはまた寢床にもぐって、ながながと寢そべって休みました。やがて、ものすごい音を立てて、いびきをかきだしました。ちやうどそのとき、かりうどがおもてを通りかかって、はてなと思つて立ちどまりました。
「ばあさんが、すごいいびきで寢ているが、へんだな。どれ、なにかかわったことがあるんじやないか、みてやらすばなるまい。」
そこで、中へはいつてみて、寢床のところへ行つてみますと、おおかみが横になっていました。
「ちぎしよう、このばちあたりめが、とうとうみつけたぞ。ながいあいだ、きさまをさがしていたんだ。」
そこで、かりうどは、すぐと鉄砲をむけました。
とたんに、ふと、ことによると、おおかみのやつ、おばあさんをそのままのんでいるのかもしれないし、まだなかで、たすかっているのかもしれないぞ、とおもいつきました。そこで鉄砲をうつことはやめにして、そのかわり、はさみをだして、ねむっているおおかみのおなかを、じよきじよき切りはじめました。
ふたはさみいれると、もう赤いずきんがちらと見えしました。もうふたはさみいれると、女の子がとび

「おまえの聲が、よくきこえるようにさ。」
「あら、おばあさん、なんて大きなおめめ。」
「おまえのいるのが、よくみえるようにさ。」
「あら、おばあさん、なんて大きなおてて。」
「おまえが、よくつかめるようにさ。」
「でも、おばあさん、まあ、なんてきみのわるい大きなお口だこと。」
「おまえをたべるにいいようにさ。」
「こういうがはいか、おおかみは、いきなり寢床からとびだして、かわいそうに、赤ずきんちゃんを、ただひと口に、あんぐりやっしてしまいました。」
これで、したたかおなかをふくらませると、おおかみはまた寢床にもぐって、ながながと寢そべって休みました。やがて、ものすごい音を立てて、いびきをかきだしました。ちやうどそのとき、かりうどがおもてを通りかかって、はてなと思つて立ちどまりました。
「ばあさんが、すごいいびきで寢ているが、へんだな。どれ、なにかかわったことがあるんじやないか、みてやらすばなるまい。」
そこで、中へはいつてみて、寢床のところへ行つてみますと、おおかみが横になっていました。
「ちぎしよう、このばちあたりめが、とうとうみつけたぞ。ながいあいだ、きさまをさがしていたんだ。」
そこで、かりうどは、すぐと鉄砲をむけました。
とたんに、ふと、ことによると、おおかみのやつ、おばあさんをそのままのんでいるのかもしれないし、まだなかで、たすかっているのかもしれないぞ、とおもいつきました。そこで鉄砲をうつことはやめにして、そのかわり、はさみをだして、ねむっているおおかみのおなかを、じよきじよき切りはじめました。
ふたはさみいれると、もう赤いずきんがちらと見えしました。もうふたはさみいれると、女の子がとび



だしてきて、

「まあ、あたし、どんなにびっくりしたでしょう。おおかみのおなかの中の、それはくらいついたらなかったわ。」と、いいました。

やがて、おばあさんも、まだ生きていて、はいだしてきました。もう、よわって虫の息になっていました。赤ずきんちゃんは、でも、さっそく、大きなごろた石を、えんやらえんやらはこんできて、おおかみのおなかのなかにいっぱい、つめました。やがて目がさめて、おおかみがとびだそうとしますと、石のおもみでへたばりました。

さあ、三人は大よろこびです。かりうどは、おおかみの毛皮をはいで、うちへもってかえりました。おばあさんは、赤ずきんちゃんのもってきたお菓子をたべて、ぶどう酒をのみました。それで、すっかりげんきをとりかえました。でも、赤ずきんちゃんは、（もうもう、二どと、森の中で横道にはいって、かけまわったりなんかやめましょう。おかめさんがいけないと、おっしゃったのですものね。）と、かんがえました。



ブレーメンの町楽隊

一

主

人もちのろばがありました。もうなが年、こんきよく、おもたい袋をせなかにのせて、粉ひき所へかよっていました。さて、年をとって、だんだんからだがいうことをきかなくなり、さすがにこのうえ追いつかうのがむりだとわかると、主人は、こちらでろばのかいぶちをやめたものか、と考えだしました。ところで、ろばは、さっそくに、こりや、ろくなことではないとさとして、逃げだして、ブレーメンの町をめあてに、とここ出かけました。そこへ行ったら、町の楽隊にやとってもらえようという胸算用でした。しばらくあるくうちに、往來に一びき、りょう犬が、だるそうにころがって、口ばかりあけて、はっは、はっは、あえいでいるのに出あいました。それはさんざん野山をかけあいて、へとへとになっているというようすでした。

「おい、すたこら大將、なにをあつぷ、あつぷいっている。」と、ろばは聲をかけました。

「いやはや、きいてくれ、こういうわけだ。」と、犬はいいました。「なにしろ年はとる、いくじがなくなる、おいらもむかしのげんきで獵場りやうばをかけあるくわけにはいかない。主人は、それならいっそ、たたき殺してしまえということになった。あわてて逃げだしたというわけだが、さて、この先どうしてパンにありつくか、じつはかんがえているところだよ。」

「ところで話だが、おいら、これからブレーメンの町へ出かけて、町の樂隊にやとつてもらおうとおもうんだ、どうだ、おめえ、いっしょに行つて、いちばん、音樂でめしをくう氣はないか。おいらリュウトをひくから、おめえ、カンカラ太鼓たいこをたたくがいい。」

りよう犬は、うん、よかろうというので、いっしょに出かけました。

それからあまり行かないうちに、ねこが一びき、往來にすわりこんだまま、それこそ三日も雨をくつたような顔をしていました。

「やあ、どうしたい、床屋とこやの親方、どうやらおひげの手入どころではないという顔つきだ。が。」と、ろばはいいました。

「いのちとかえがけというところだ。けいきのいい顔をしてもらえまい。なにしろ年をとつて来てね、齒はばくばくになる、ねずみのやつをおいまわすよりか、ろばたで香箱こほこつく

つて、ごろにゃん、ごろにゃん、のどをならしていたくなるさ。そこで、主人のかみさんが、いっそ水にはめておしまいよといひだした。そうされないうちに、とびだしては來たが、さていい思案しあんはないしさ、いったいどこへどう行つたものかと、あぐねているのだよ。」と、ねこはいいました。

「おれたちとなかまで、ブレーメンの町へ行けよ。おまえさんは、夜の音樂ならお手のものだろう、町の樂隊につかつてもらえるぜ。」と、ろばはいいました。

ねこは、さっそくさんせいして、いっしょに出かけました。

やがて、三人組の脱走者だつそうしやは、とある屋敷内やしきに來かかりました。門の上に、その家のおんどりがのつていて、ありつたけの聲をふりしぼつて、さけび立てていました。

「おい、骨のしんまで、じいんとくるような聲を出すなあ。どうかしたのかい。」と、ろばはいいました。

「なめに、あしたはいいお天氣ですよって、知らせてやっているところだよ。」と、おんどりはいいました。

「なにしろ、けつこうなお聖母せいけさまの日だ、おちいさいキリストさまの下着の、おせんたくして、ほしなすつた日だ。ところが、そのあしたの日曜日にちようびに、お客があるというんで、ここ

のおかみさんが、なさけ知らずにもほどがあらあ、女中の話だがね、それで、あすはおいらをスーブにしてたべつちまうつてんでね、こん晩、さっそく、首をチョン切れといいつかつたよ。だから、せめて聲のだせるうちとおもつて、おいら、のどのやぶれるほどわめき立てているんだよ。」

「やれやれ、なんとということだい、赤ずきん、おれたちといっしょに行くがいいよ。ブレメンの町へ出かけるところだ。ころされて死ぬくらいなら、すこしは氣のきいた所が、どこへ行つたつてあろうじゃないか。おめえはいい聲しているから、なかまになつて音楽をながしてあるけ、いっばしかせげるぞ。」と、ろばはいいました。

この申し出は、しごくおんどりの氣に入りました。そこで、こんどは四人つれだつて出かけることになりました。

一一

ところで、ブレメンまでは、なかなか一日では行けません。そのうち日がくれたので、森の中へはいつて、そこでひとばんあかすことにしました。

まず、ろばと犬とは、一本の木の下にごろりと横になりました。ねことおんどりとは、木の枝の上にやすみました。ところで、おんどりはわざわざこすえの先まで行つてとまりましたが、これが、いちばんの安全な場所であつたのです。さてねようとすまへ、このおんどりはもういちど、東西南北、風のふく方角がどこかとながめまわしたとき、ふと、むこうに、ちらちら火らしいものがみえたので、なかまに聲をかけて、どうしても、そうとおくないところに家があつて、あかりがついているらしいといつてしらせました。

ろばが、そこで、

「じゃあおれたち、ここをひきはらつて、もつと先まで行つてみようや。どうもこの宿は上等とはいかないから。」と、いいますと、犬もそこへ行つたら、骨の一、二本、ことによると肉の香ぐらいかげようかとおもつて、さっそくさんせいしました。

こういうしだい、四人組は、そのあかりのさしている方角にむかつて、出かけました。するうち、あかりはずんずんはつきりしてきて、ばあつとてりだしたとおもうと、そこはどろぼうの家で、中にはこうこうと灯がともっていました。

ろばは、なかまでいちばんのせいたかのつぼなので、窓のところまで行つて、中をのぞいてみました。

「親方、なにかあったかね。」と、おんどりはたずねました。

「どうして、あったかどころのさわぎじゃないぞ。」と、ろばはこたえました。「ちゃんとテーブルごしらえがしてあって、けっこうなごちそうと、のみものが、山とならんでいるよ。どろぼうども、てんでに、はちきれそうな顔で、よろしくやっているとところさ。」

「そいつをものにしてようじゃないか。」と、おんどりはいいました。

「うん、うん、どうしたってわりこまなきやあな。」と、ろばはいいました。

そこで、まず、どろぼうどもを追っばらうには、どうすればいいかと、四人組の動物は、相談をはじめましたが、やがていくふうがみつかりました。

ろばは、前足を窓にのせることになりました。犬は、ろばのせなかにとびあがることにしました。ねこは犬のせなかによじのぼることにしました。おしまいに、おんどりが、ばさばさととびあがって、ねこの頭の上ののっかりました。いよいよしたくができあがると、一、二、三のあいずで、四人組はいっせいに、音楽をやりだしました。ろばはひひんとわめきました。犬はわんわんほえたてました。ねこはにゃおんとなきました。おんどりはこけこつこうと、ときをつくりました。とたんに、まどをつきやぶって、一同へやの中へとびこみました。がらん、がらん、がらん、音をたててガラスはこわれました。

どろぼうど

もは、びっく

りぎょうて

ん、きやあと

さけび聲をあ

げてとびあが

りました。たいへんな怪物がとびこんで来た、

そうとよりしか考えません。もうすっかりおび

えきって、てんでに、あたまをかかえて、そと

の森の中へ、にげだして行きました。

そこで、四人組は、ゆうゆうテーブルにつき
ました。ごちそうは、のこりものでも、がまん
することにして、それでも、これからあと四週
間ぐらい断食してもいいといういきおいで、つ
めこめるだけ、たらふくつめこみました。



さて、四人組の樂隊なかまは、おながができると、あかりをけして、めいめいのうまれつきとすきずきにまかせて、いいぐあいの寢床ねこしをさがして休みました。ろばはそとのつみごえの上にねました。犬は戸のかげにねました。ねこはへつついの上で、灰のぬくみをさがしてねました。おんどりは、とまり木のかわりに、屋根うらのはりの上にのりました。なにしろ、みんな遠道をして来て、くたびれていましたから、もうさっそくに、ぐっすりねつきました。

真夜中をすぎたときに、どろぼうどもが、とおくからみますと、うちの中にはあかりがともっていない、中はひっそりかんと、しずまりかえっているようでした。

「どうもおれたち、おどかされて、にげだしたといわれちゃあ、がまんできないぞ。」
おかしらはこういって、ひとり手下てしたにいいつけて、ようすをみせにやりました。

さて、いいつかつた手下がはいってみると、家の中はどこもひっそりしていました。そこであかりをつけてみようとおもって、臺所へ行きました。すると、やみに光っているねこ

の目だまを炭火すすびとまちがえて、いきなりマッチをつっこみました。ところが、ねこのほうは、おやすいご用とうけてはくれず、うろう、とたけりながら、顔にとびついて、めったらやたらに引つかきました。

いやはや、おどろいたのなんの、手下のどろぼうは、したたかにやられて、びっくり、はいもう、うらの戸口から逃げだそうとしますと、そこにねていた犬が、とびあがって、むこうずねにかみつきました。そこで、庭へかけだして、つみごえのそばをかけぬけようとしみますと、ろばがあと足でしたたかに、けとばしました。すると、このさわぎで目をさまさせられためんどりが、はりの上から、はしやぎきって、ひと聲、キケリッキキ、とどなりました。

どろぼうは、いのちからがら、足にまかせてにげだして、おかしらの所へかえりました。そうしてこういしました。

「どうもはや、たいへん、あの家には、すごい魔物まものがはいりこんでいて、いきなり、きみわるく、ふうう、と息をふっかけて、ながい指で顔をひっかきました。それから、戸の前にはひとり、男が待ちぶせていて、小刀をすねにつきたてました。庭へ出ると、なんともえたいの知れない、まっ黒なばけものが立っていて、こんぼうをふって、したたかなぐりつけ



かし、むかし、ある所に、粉屋こながあり
 ました。だんだんうちが貧乏びんぼうになつて、
 もういまでは、粉をひく水車小屋と、そのうし
 ろに一本立っている大きなりんごの木よりほ
 か、なにひとつなくなつてしまいました。
 ある日、粉屋は、たきぎとりに、林の中には
 いました。すると、そこへ、つい見たことな
 いじいさんが、ひょっこり出て来て、こういま
 した。
 「おまえさん、骨をおつてたきぎなんかとるも

手なしむすめ



ました。その上、たかい所には、ちゃんと裁判官さいはんかんがひかえていまして、さあ、そのわるも
 の、ここへつれて来い、とどなりました。いやもう、さんざんのていたらくで、まっくら
 さんぼう逃げて来ました。」
 それからは、どろぼうどもも、こりて、二どとふたたび、この家にはいろうとはしませ
 んでした。ところで、ブレーメンの樂隊なかも四人組も、ひどく、ここが氣に入ったので、
 それなりもうよそへ出て行こうとはしませんでした。
 さて、これまで申したことは、ついこないだ、それこそ湯氣ゆけの立つほやほやの口からき
 いたお話ですよ。

のではないよ。おまえさんとこの水車小屋な、あのうしろに立っているもの、なんでも、わたしにしてくれると約束おし、そうすればすぐとお金持にしてあげる。」
「はてね、うちの水車小屋のうしろに立っているよといやあ、りんごの木よりほかないわけだ。」

粉屋はそうおもって「よし。」としょうちして、その知らない男に、しょうもん 證文をかいてわたししました。ところが、あいて 相手は、へっへ、とうすきみ 氣味わるくわらって、
「いずれ三年あとには、わたしのにきまつたものをもらいにくるよ。」といて、それなりどこかへ行つてしまいました。

さて、粉屋は、なんの氣なしに、うちにかえりますと、おかみさんがまちかねたようにとんで来て、まあ おまえさん、どこからかおもいもかけないお金がまいこんで来てね、うちじゅうの箱も小箱も、たちまちお金でいっぱいになってしまったよ。だれが持つて来たというではなし、いったい、どうしたということだろうね。」
「うん、そりやあな、さつき林の中で知らないじいさんに出あつてね、たいした福をくれると約束してくれたんだ。そのかわり、うちの水車小屋のうしろに立っているものはなんで

もやるという、證文をかいてわたしした。まあ、あの大きなりんごの木を、かわりにくれてやればいいんだよ。」とこたえました。

ところが、おかみさんは、

「まあ、おまえさん。」と、ぎょつとしたようにいいました。「そいつはあくま 悪魔だったのだよ。そいつが目をつけたのは、りんごの木じゃあない、うちのむすめだよ。あの子は、さつき水車小屋のうしろに立っていたのだよ。ちやうどうら庭をはいていたからね。」

この粉屋のむすめというのは、うまれつき顔がうつくしいばかりでなく、心がすなおでつねづね信心しんじんのあつ子でしたから、それから三年というもの、ずっと、身をつつしんで、すべて神さまのお心まかせですごしました。

さて、月日ははやくすぎて、いよいよこの子を、悪魔がとりにくるときまつた日、むすめは、きれいにからだを洗つてきよめて、チョークで、じぶんのまわりに、まるい輪をかきました。

その日は朝早くから、さつそく、悪魔はやつて來ましたが、むすめのそばに近よることができません。悪魔はおこつて、いまいましうに粉屋にいました。

「なんだ、からだなんか清めやがつて、もうあいつが水一てきも使えないようにしろ。こ

れじゃあ、おれだって、どうしようもないじゃないか。」

粉屋はおどされて、悪魔のいうとおりにしました。

そのあくる朝、悪魔はまたやって來ましたが、むすめは兩手をなみだでぬらして、それはみごとに清められていました。そのため、悪魔は、こんども近よることができないので、きちがいのようにたけり立って、

「やい、粉、屋、むすめの兩手を切つてしまえ、これじゃあおれがどうしたくも、まるで手も足も出ないじゃないか。」と、どなりました。

粉屋はびつくりして、

「やれまあ、げんざいじぶんのむすめの兩手が、どうして切れましょう。」と、いいました。すると、悪魔は、なおもかさにかかつて、こういいました。

「きさま、それをしないなら、よし、きさまはおれのものだ。かわりにきさまをつれて行くぞ。」

こうおどされて、このじいさんは、すっかりおじけて、つい悪魔のいうとおりにすると約束してしまいました。そこで、むすめの所へ行って、こういいました。

「むすめや、わたしがおまえの兩手をさらないと、悪魔は、かわりにおとうさんをつれて

行くというのだよ。ついこわくなって、わたしはそのとおりにしますと約束してしまった。どうかわたしのなまぎをたすけるとおもつて、すまないが、とうさんは鬼おにになる。どうか、かんにんしておくれ。」

むすめはおとなしく、

「おとうさん、いいようにしてください、わたしはとうさんのことでもすもの。」と、こうこたえて、兩方の手首を切らせました。

悪魔は、三どめにやって來ました。でもむすめは、ながい間、さんざん泣いて泣いて、きりくいのようになった兩うでを、きれいに、なみだで洗い清めていました。それで、さすがの悪魔も、もうむすめをどうする力もなくなつて、すごすごと退散たいさんしました。

粉屋はそこで、むすめにいいました。

「わたしは、おまえのおかげで、たいしたお金もうけをした。そうおもつて、わたしは一生おまえを、うちの大恩人にして、世話せわしてあげるつもりだよ。」

でも、むすめはこたえていいました。

「いいえ、わたしもうここにはおられません。わたしはこれから出かけて行くつもりです。世間には、かわいそうにおもつてくれる人がいて、わたしのいりようなものぐらいきつと

わけてくれるでしょう。」

こういつて、むすめは、手んぼうになつた兩うでを、せなかでいわいつけてもらうと、お日さまののぼるのをまちかねて、うちを出ました。さて、一日じゆうあるきどおしにあるくうちに、夜になりました。そのとき、來かかったのは、ある王さまのお宮のお庭で、お月さまの光で見ると、きれいなくだものいっばいなつた木が、なんぼんかそこに立っていました。でも、そこへはいつて行けないというわけは、お堀の水がお庭をとりまいてい

たからです。
むすめは、まる一日あるいて、ひとかけのパンも口にいけないので、ひもじくてたまりません。そこで、

「まあ、あたし、どうかして中へはいりたいわ、そうしたら、あのくだものがたべられるでしょう。さもないと、わたし行きだおれになるほかはないわ。」

そこで、むすめはひざまづいて、神さまのお名をよんでいのりました。すると、たちまちそこへ、ひとりの天使があらわれて、お堀のせきをしめてくれました。それでお堀の水がひあがつて、むすめは、らくらくと、お庭にはいることができました。

むすめはお庭にはいりました。天使もいっしょについて行きました。

むすめは、くだものなつた木をみました。それはみごとに實のつたなしでしたが、そのかずはちゃんとしらべてありました。そんなことにはかまわず、むすめはそばへ行つて空腹のたしに、ひとつあんぐりやりましたが、それひとつだけでやめました。

それをお庭番は見ていたのですが、でも、天使がそばについているので、それがこわいので、あのむすめはうれしいだろう、くわばら、くわばら、と心の中となえるばかりで、人をよぶこともできず、ましてうれしいものをいいかけるところではなく、小さくなつていました。

むすめは、なしをたべてしまうと、それでまんぷくして、やぶの中にはいつて行きませんでした。お庭の持主の王さまが、そのあくる朝、お庭におりて來て、くだものかずをかぞえると、なしの實が、ひとつたりないのがわかりました。王さまは庭番をよんで、その實はどうした、あの下にもころがつていないが、どこかへやつたかとたずねました。そのとき、庭番がこたえていうのに、

「昨夜、兩手のまるでないうれしいがはいつてまいりまして、實をひとつ、ここであべて行きました。」

「こういうのを、王さまはきいて、

「そのゆうれいが、どうして堀の水をわたって来たのであろうな。そうしてなしをたべてしまったあとで、どこへ出て行ったのであろうな。」と、たずねました。

「だが、白い着物を着た方が天からおりておいでになって、水をせきとめましたので、ゆうれいもお堀をわたって来たのでございます。どうもそれはまちががなく天使さまでございましてから、わたくしも、こわくなりまして、つい、とがめもせず、聲さえかけず、見すごしてしまいました。さて、そのゆうれいは、なしをたべてしまいますと、またもとの道へもどりました。」

王さまはいいました。

「おまえのいうとおりだとすると、今夜はわしもいっしょに夜番をしよう。」

くらくらになると、王さまはお庭に出て来ました。坊さまをひとりつれて来たのは、ゆうれいと話をさせるつもりでした。庭番をくわえて三人は、木の下に陣どつて、見はりの目を光らせました。

夜中すぎるころ、むすめは、やぶの中からはい出して来て、木の下まで来ると、また口をあけて、なしの實をひとつたべました。そのそばには、やはり、まっ白な着物を着た天使がついていました。

そのとき、坊さまはすすんで行って、話しかけました。

「おまえは、神さまのおつかわしになったものであろうか。それとも人の世のものであるのか。ゆうれいか、それともにんげんか。」

むすめはこたえました。

「いいえ、ゆうれいではありません。世の中から見はなされ、神さまだけをお力にすぎるあわれなにんげんでございます。」

王さまはいいました。

「よし、世界じゅうのこらずが見はなそうとも、わたしはおまえを捨てないつもりだよ。」
こういつて、王さまは、むすめをお城につれて行きました。むすめは、ほんとうに、うつくしいうえに、信心のこころがあついで、王さまはしんからこの子が好きになりました。それで、銀の手首をかわりにつくつてやって、お妃きさきにしました。

一一

それから一年たちました。あるとき、王さまは戦場せんじょうにむかうことになったので、わかい

お妃をおかあさまにあずけて、

「あれがやがて、お産さんの床とこにつくようになりましたら、よくいたわってやってください。そうしてすぐと、しさいを手紙でしらせてください。」と、たのんで出て行きました。

するうち、お妃は、うつくしい男の子をうみました。年とったおかあさまは、さっそく手紙でこのうれしいたよりを書き送りしました。ところが、この手紙をあずかった使が、とちゅうある川の岸までくると、旅のつかれが出て、ついそこでぐつすり寝こんでしまいました。ところへ、れいのしじゅうお妃にたたろうとねらっている悪魔が、そのすきにほかの手紙とすりかえてしまいました。そのにせ手紙には、お妃が鬼っ子と行って、悪魔にとりかえられた子を生んだと書いてあったのです。

王さまはこのにせ手紙をうけとって、どんなにおどろきもし、かなしみもしたことでしょう。でも、返事の手紙には、やがてがいせんしてかえるまで、あくまでお妃をいたわってくれるように



たのんでありました。

使はこの手紙をあずかってかえる道みち、またまたおなじ川の岸で、おなじように寝こんでしまいました。すると、またもや、れいの悪魔があらわれて、使のかくしに、にせ手紙をすりかえて入れました。それには、お妃を王子と叫ぶに殺せといいつけてありました。このおそろしい手紙をうけとったとき、年とったおかあさまは、ひどくおどろいて、とてもほんとうにはおもえないといつて、また王さまに手紙を出しました。でも、どうしたつて、まえとかわった返事の来ようはずがなかった、というわけは、そのつど、れいの悪魔が、にせ手紙を書きかえてしまうからでした。それで、いちばんおしまいの手紙には、お妃とこどもをころしたしょうこに、舌と目を切りとっておけ、ということまでかいてありました。けれども、おかあさまは、なんの罪とがもないものの血をながすことを泣きかなしみませんでした。それで夜中に、そつと一びきのめじかをつれてこさせて、その舌と目を切らせて、しまっておきました。さて、おかあさまはお妃にいきかせました。

「王さまのおいつけのように、あなたのいのちをとることはわたしにはできません。そうかといって、あなたをこのままここへおくわけにはいかないのです。だから、あなたはこどもをつれて、ひろい世界のどこへでも出て行って、もう二どと、ここへはかえつてこな

いようにしてください。」

こういつて、お妃のせなかに、赤ちゃんをいわいつけました。きのどくなお妃は、泣きはらした目をして、出て行きました。

お妃は、やがて、たれも人のはいらない大きな森の中にとくと、ひざまづいて神さまにいのりました。すると、さつそく、主のおつかわしになった天使があらわれて、お妃を、そのちいさい家へつれこみました。そのかわいい家ののきには、盾形の板がつるしてあって、その上に、

「だれでもかかってに住める家」

と、かいてありました。そこへ、このこやの中から、雪のようにまっ白なむすめの人が出て来て、

「まあ、お妃さま、ようこそ。」と、中へ入れてくれました。

それから、そのむすめは、お妃のせなかの赤ちゃんをおろして、胸にだかせて、たっぷりお乳をのませました。お乳がすむと、赤ちゃんは、寝ごこちよく支度のできた、かわいい寝臺にねかされました。

そのとき、きのどくなお妃が、ふしぎにおもって、

「あなた、どうして、わたくしが妃だということを知っていらっしやるのでしょう。」と、ききました。

白いむすめは、こたえて、「わたしは、あなたと、お子さまをいたわるようにと、お妃さまがおつかわしになった天使ですもの。」と、いいました。

こうして、お妃は、そのち七年というもの、この家にくらして、やさしい介抱を受けました。するうち、このお妃の信心が、神さまにつうじて、そのお力で、きられた手首ももとのようになりました。

三

さて、王さまも、ようやく戦場からかえりました。そこで、なにはおいても、まずお妃と王子の顔がみたいとおもいました。ところが、年とったおかあさまは、いきなりしくしく泣きだして、「まあ、あなたは、わるい人です。なんだって、罪とがもない母子のいのちをとれというような、むじひなことを書いてよこしたのです。」と、こういつて、悪魔のすりかえた二通のにせ手紙を出してみせました。そのうえに、「さあ、おいいつけのお

りにしましたよ。」といって、しょうこの舌と目をもち出しました。

王さまは、そのとき、どんなにか、それはからだのながれるほど、なみだをながして、かわいそうなお妃と、いたいけなことものをかなしんだでしょう。それで、おかあさまも、王さまの本心がわかって、いたいたしくなりました。そこで、あらためて、

「安心しておいでなさい、ふたりはまだ生きていますよ。じつは、そつといいつけて、めじかの舌と目を切らせて、しょうこのかわりにしておいたのです。あれには赤さんをせなかにいわいつけて、ひろい世界のどこへでもかくれているように、といふくめて、出してやりました。あれももう二どとこちらへはもどりませんと、かたく言葉をつがえて出て行きました。それは、あなたのはらだちがいかにほげしいようだったからですよ。」と、こうきかされたとき、王さまはいいました。

「青空のはてのはてまでも、なつかしい妻と子をたずねて行って、たずねあたるまでは、食べも、飲みもいたしますまい。そのあいだに、あれらが死ぬか、うえてたおれませんかぎり、いつかはめぐりあうことでしょう。」

さあ、それから七年というもの、王さまは、しょしょほうぼうと、あてもなくたずねまわりました。それは、ありとあらゆる石の切り立ったがけの中、岩あなの奥までもさがし

あるきました。それでも、かいく行くえは知れません。このぶんでは、もういよいよふたりとも、この世にないものと、あきらめるほかはないとおもうようにもなりました。

このながい年月、王さまはついに食べず飲まずでございました。でも、神さまはいのちをつないでくださいました。

とどのつまり、王さまは、ある日、大きな森の中に来かかりました。すると、そこに小さな家があつて、その軒のきに、

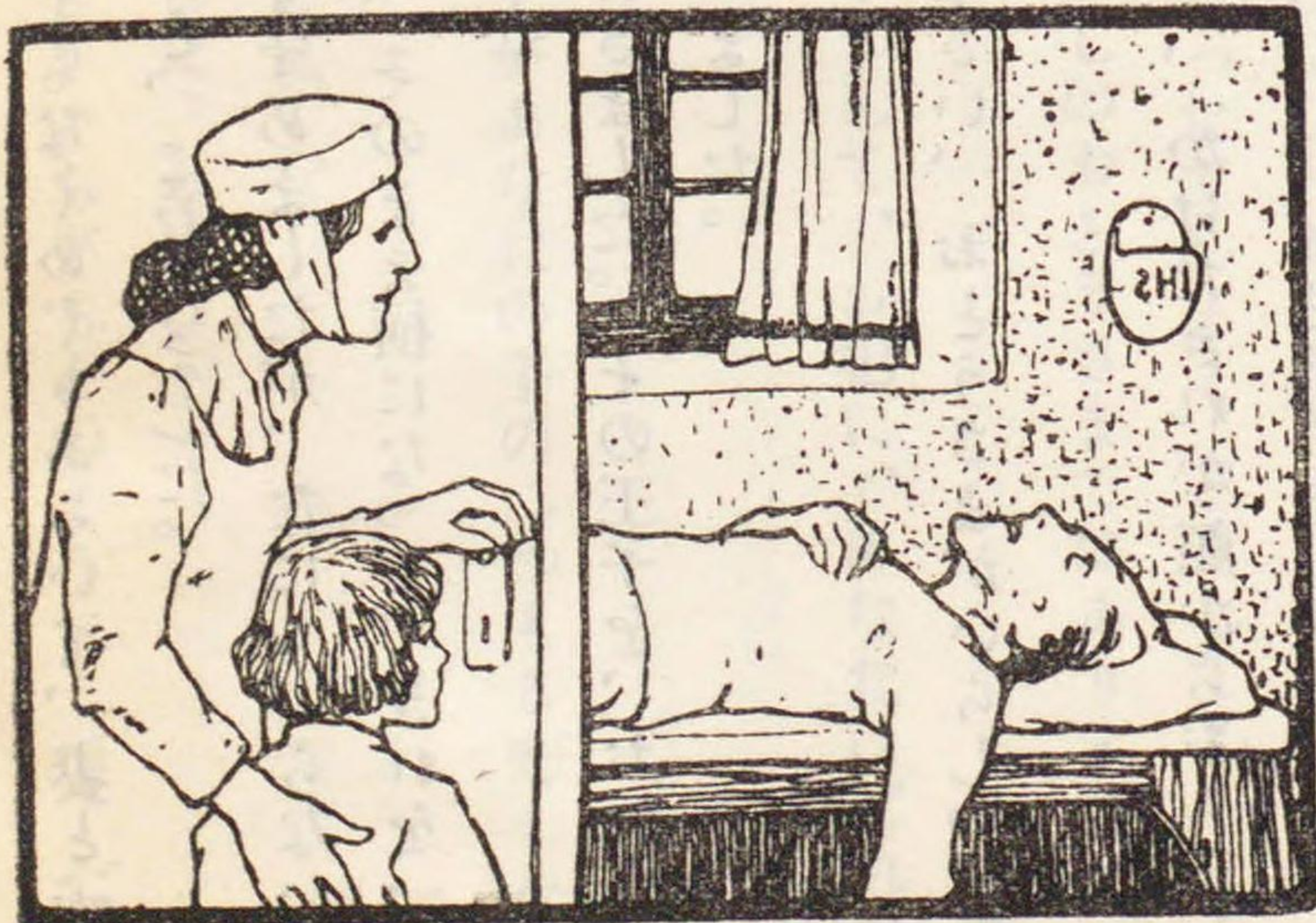
「だれでもかつてに住める家」

と、しるした盾形たてがたの札ふだのかかっているのが、目につきました。

そのとき、まっ白なむすめが出て来て、手をとって中へあげてくれました。

「これは王さま、ようこそ。」と、むすめはいつて、どこからおいでになりましたかとたずねました。

王さまは、



「わたしはもうこれで、かれこれ七年、どこというあてもなくめぐりあるいて、妻と子をさがしておりますが、いまだにたずねあたりません。」と、こたえました。

天使は、王さまに、たゞものと、のみものを出してすすめました。が、なにもいらぬ、休ませてもらえばいいとばかりいいました。そうして、そのまま横になって、きれを一まい顔にかけてねむりました。

そのあいだに、天使は、お妃母子きさきおやこのへやへはいつて行きました。その王子を、おかあさまは、いつも「つもる悲しみ」と名をつけて、よんでいました。

天使はそのとき、
「さあ、お妃さま、お坊さま、あちらへ行つてごらんさい、おとうさまがいらしてですよ。」と、いいました。

そこで、ふたりが、王さまのねている所へ行きますと、かけたきれが顔からおちました。そのとき、お妃はいいました。

「さあ、「つもる悲しみ」ちゃん。おとうさまのお顔のきれをかけておあげなさい。」

こどもはいわれるままにひろつて、また顔にかけました。
王さまは、うとうとしながら、いまの話をきいていて、わざときれをすりおとさせまし

た。それで、男の子はかんしゃくをおこして、

「おかあさま、どうして、おとうさまにかけてあげろなんていうのです。わたしには、この世の中に、おとうさまというものはないのでしょう。わたしはただ、「天にましますわれらの父よ」って、お祈いのりでならいました。おかあさまも、わたしのおとうさまは天にいらつしやるのです、神さまがおとうさまです、とおしえてくださったでしょう。どうしてこんなこわいらしい人なんか知っているものですか。これはわたしのおとうさまではありません。」と、いいました。

このことばをきいて、王さまはおきあがりました。そうして、お妃に、あなたはだれですかと、お妃は、

「わたしはあなたの妃でございます。そうして、この子があなたの子の「つもる悲しみ」でございます。」と、いいました。

ところで、王さまは、お妃の両手首りょうてくびのまんぞくなのを見て、

「わたしの妃は、銀の手首をしている。」と、いいました。お妃は、
「うまれたままの両手を、おめぐみぶかい神さまが、もういちどもとのようにしてください」

いました。」と、こたえました。

天使はべつのおへやから、銀の手首をとって来て見せました。これではじめて、これこそなつかしい妻と子であることがわかったので、王さまは、ふたりにあつい頬ずりをして、うれしそうにいました。

「おもたい石が、はじめて胸からずり落ちたよ。」

このとき、神さまのお使は、もういちど食事を出して、三人いっしょにたべさせました。そののち、親子そろって、年とったおかあさまの所へ、ぶじにかえって行きました。

さあ、どこもかしこも、國じゅうたいへんなよろこびです。そのなかで、王さまとお妃とは、もういちど、ご婚禮ごんれいのやりなおしをして、それから仲よくたのしく、死ぬまでしあわせにぐらししました、とさ。

おならべ、テーブル、「金貨きんかを生むるば」

それから、「袋出る、棒」のお話

む

かしあるとき、三人、むすこをもって、それから、たった一ぴきやぎをかってもっている仕立屋さんがありました。ところで、やぎは、なにしろそのお乳で、うちじゆうがやしなってもらっているのですから、それだけたっぷりごちそうもしてやって、毎日のように、そとの野原へもつれて行ってやらなければなりません。むすこたちも、そのことを、かわりばんこにすることにしていました。

で、あるとき、いちばん上の子が、まずこのやぎを、みごとに草のしげっている墓地へつれだしました。そして、そこでゆっくり草をくわせて、かっぺにとびまわらせておきました。さて、夕がたになって、かえる時刻になったので、むすこは、

「やぎや、いっばいたべたかい。」と、聞きました。やぎは、

「そりやあいっばいたべたとも、

草っぱ一枚、もういけぬほど。メエ、メエ。」

と、こたえました。

「じゃあ、かえろうよ。」

むすこはいつて、首なわのところをつかむと、やぎをこやへ引いて行って、しっかりとつないでおきました。

「どうだな。」と、そのとき仕立屋のおとつあんがいました。「やぎは、たっぷりたべたろうな。」

「ええ、ええ。」と、むすこはこたえました。「それは、もうはらいっばい、草っぱ一枚、もういけぬほどたべましたよ。」

そういいましたが、おとつあんは、じぶんでためしてみたいので、こやまで出かけて行きました。そして、だいじなもののせなかをさすってやりながら、

「やぎや、いっばいたべたろうな。」と、聞きました。すると、やぎは、

「なんでいっばいたべましょう、

お墓の上で、はねただけ、

草っぱ一まい、みつからない。メエ、メエ。」

と、こたえました。

「こりやあ、なんて話だい。」と、仕立屋さんはどなりました。どなりながらかけもどつて、むすこにいました。「やい、このうそつき、やぎははらいっばいたべさせたなんていやがって、なんのひぼしにしゃがつたくせに。」

こういつて、かんしゃくまぎれに、壁にかけたものさしをとるなり、さんざんにたたきたてて、むすこをうちから追いだしました。

あくる日は、次のむすこの番でした。むすこは、お庭の垣根かきねのそばで、おいしい草の、申しぶんなくたっぷり生えているところを、さがしてやりました。やぎは、それをきれいにたべつくしました。やがて、日がくれたので、かえろうと思って、むすこが、

「やぎや、いっばいたべたかい。」と、聞きました。やぎは、

「そりゃあいっばいたべたとも、
草っぱ一枚、もういけぬほど。メエ、メエ。」

と、こたえました。

「じゃあ、かえろうよ。」

むすこはいつてやぎを引いてかえりました。そして、こやにしつかりつないでおきました、「どうだな。」と、仕立屋のおとつあんがいました。「やぎは、たっぶりたべたろうな。」

(158)

「ええ、ええ。」と、むすこはこたえました。「それは、もうはらいっばい、草っぱ一まい、もういけないほどたべましたよ。」

こういっても、仕立屋のおとつあんは、それだけではしょうちがならないので、こやま

で出かけて行きました。そして、

「なんで、いっばいたべましょう、

お墓の上で、はねただけ、

草っぱ一枚みつからない。メエ、メエ。」

と、こたえました。

「へっ、とんだばちあたりの、悪黨あくどうやろうだぞ。」と、仕立屋はどなりました。「こんなおとなしいものを、ひもじいめにあわせるなんて。」

こういふなり、かけもどって行って、れいのものさしで、むすこをおもてへたたき出し
ました。

(159)

いよいよ、三男むすこに、じゆんぱん順番がまわってきました。こんどは、うまくやってみせよう
とおもつて、このむすこは、それこそみごとに葉のしげっている草やぶをみつけたして、
そこで、みっちりやぎにたべさせました。日がくれて、かえりたくなつたとき、むすこは、
「やぎや、いっばいたべたかい。」と、聞きました。

「そりゃあ、いっばいたべたとも、

草っぱ一枚、もういけぬほど。メエ、メエ。」

と、こたえました。

「じゃあ、かえろうよ。」

むすこはいつて、やぎをこやへつれこみました。そして、しっかりたないでおきました。「どうだったな。」と、仕立屋のおとつあんがいました。「やぎは、たっぷりたべたろうな。」

「ええ、ええ。」と、むすこはこたえました。「それは、もうはらいっぱい、草っぱ一枚、もういけぬほどたべましたよ。」

こういつても、仕立屋は、ほんとうにしないで、こやまで出かけて行きました。そして、「やぎや、いっばいたべたろうな。」と、聞きました。

ところが、いじわるなけものは、

「なんで、いっばいたべましょう、

お墓の上で、はねただけ、

草っぱ一枚みつからない。メエ、メエ。」

と、こたえました。

「やれ、やれ、大うそつきの、くそがきめが。」と、仕立屋はどなりました。「どいつもこいつも、ろくでなしのごくどうもだ。そうそう、あほうにされちゃあいねえぞ。」

そこで、かんしゃくまぎれに、ぶいとかけあがって行って、れいのもさしをふりまわしながら、きのどくなむすこのせなかを、がんというほどくらわせたので、はずみで、むすこは、ぼんとそとへとびだしました。

一一

さて、こんなわけで、仕立屋のおとつあんは、やぎとふたりつきりになりました。そのあくる朝は、仕立屋がじぶんでこやへ出かけて行って、やぎのせなかをなでてやりながら、いいました。

「さあ、おめえとはなかよしだな。きょうは、おれが草をくわせにつれてってやる。」

「こういつて、やぎのつなをひっぱりながら、みどりぶかい生け垣のところや、「ひつじのあばら骨」の下や、そのほか、やぎの大好物な草のあるところへ、つれて行ってやりました。」

「そこで、これから、はらいっぱい、たんのうするまでたべるがいい。」

「こうやぎにいいきかせて、目のくれるまで、ゆつくり草をくわせておきました。そこで、
「どうだ、やぎや、いっぱいたべたかい。」と、聞きました。そこで、
やぎは、

「そりゃたべたとも、

草っぱ一枚、もういやなほど。メエ、メエ。」

と、こたえました。

「じゃあ、かえろうよ。」

仕立屋は、こういつて、やぎをこやへつれこんで、しっかりつないでおきました。さて、いっぺんそこをはなれたものの、またもう一ど、もどつてきて、

「どうだな、これでおめえも、やっとはらいっぱいたべたというものだ。」と、いいました。ところが、やぎは、あいてがかわつても、おなじように、

「なんでいっぱいたべましょう、

お墓の上で、はねただけ、

草っぱ一枚、みつからない。メエ、メエ。」

と、さげびました。

仕立屋は聞いて、びつくりしました。これでやつと、これまで罪もないのに、三人までむすこを追い出してしまったことが、わかりました。

「こら、待ってる。」と、仕立屋はどなりました。「ちきしょう、きさまのような恩知らずは、ただ追っばらったのでは、はらがいえねえ。ひとつ目じるしをつけてくれて、れつきとした仕立屋さんなかまへは、二どと、つら出したらねえようにしてくれるぞ。」

「いうなり、とっぱくさ、かけあがって行って、じぶんのひげをあたるかみそりをもちだしてきました。そして、やぎのあたまに、したたかシャボンをぬりたくつたうえ、じぶんの

手の甲こめどうよう、つるつるにそりへがしてしまいました。それから、れいのもさしをつかうのは、もったいなすぎるとでもいうのでしょうか、むちをふりまわして、したたかぶちたいたので、やぎは力いっばいとびあがって、どこかへ逃げ出して行ってしまいました。

三

仕立屋は、まったくのひとりぼっちに

なっていました。もうどうにもつまらなくなつて、むすこたちに、またかえつてきてもらいたくなりました。でも、みんなどこへ出て行ってしまったものやら、たれもゆくえを知るものはありませんでした。

さて、いちばん上のむすこは、ある指物師さしものしに弟子奉公でしほうこうしました。ひととおりの年期ねんきをつとめ



て、これから他國修業たこくしゆぎょうに出ることになったとき、親方はこの弟子に一きやく小さいテーブルをくれました。ちよつと見には、いっこうかわつたところもないし、ありふれた木でできていましたが、それがたいしたはたらきを、そなえてもっていました。たれでも、このテーブルをそこにすえて、「おならべ、テーブル。」と、いいますと、すぐと、このけっこうな小テーブルに、小ざつぱりしたテーブルかけが、かかりました。すると、すぐそのあとに、大皿が出て、ナイフとフォークが出て、煮にものと焼きもののめいめいの皿が、ところせましとならびました。そこへ、大コップにいっばい、赤ぶどう酒がなみなみとつがれるのですから、たれだつてうれしくなるではありませんか。

若い職人は、そこでおもうには、

「どうも、これだけで一生こまらないだけのものがある。」

そんなわけで、このけっこうな男は、世間せけんをめぐりあるきながら、宿屋が上等じょうとうだろうが下等かたうだろうが、そのうちにたべるものがあるうがなかるうが、いっこうにへいきでした。時のひょうしで、宿屋にとまらないでも、畑の上だろうが、森の中だろうが、牧場まきはのすみだろうが、好きかってなところに腰をおろして、れいのテーブルをせなからおろして、前にすえて、「おならべ、テーブル。」といいますと、さっそく、ほしいものがなんでも、ぞ

ろぞろ出てきました。

そうこうするうち、このむすこも、そろそろおやじさんのところへ、かえって行きたくなりなりました。おやじさんだって、いつまでおこつてばかりはいないだろうし、この「おならべ、テーブル。」を持って行けば、大よろこびでうちに入れてくれるだろう、とおもいました。それで、家路へと志して行くとちゆう、晩がた、一けんいんの宿屋にはいることになりました。

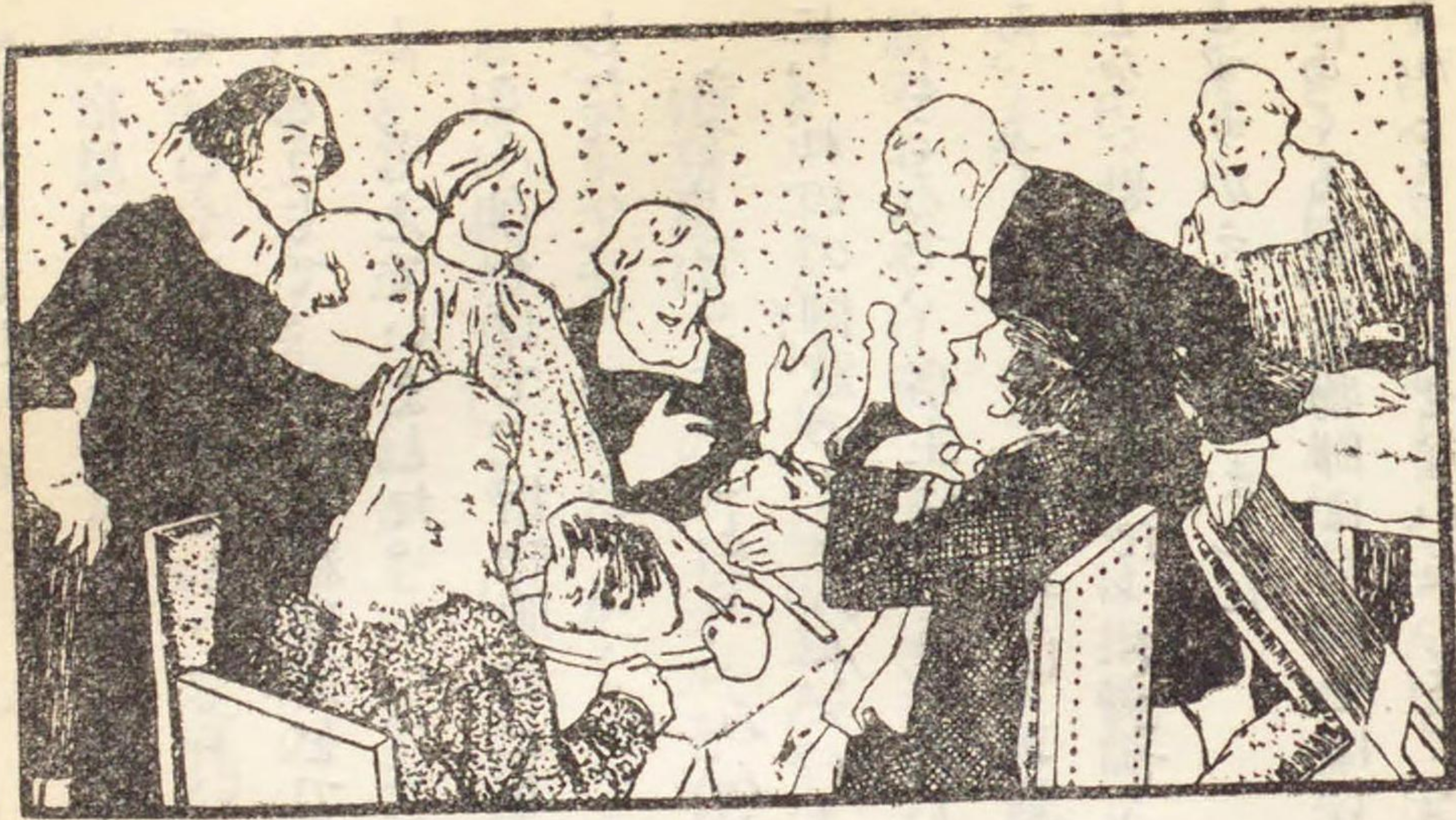
ちようど、お客が立てこんでいましたが、その人たちは、むすこのはいつてくるのをみて、

「さあ、いらっしやい。ここへ来て、いっしょにやりましょう。」と、いつてよんでくれました。

そうでもしないと、なかなか、あとのしたくが、間まにあうまいというのです。

「いや、どうも。」と、そのとき指物師はこたえました。「たとえわずかでも、せつかくみなさんのお口にはいるものを、よこどりしたくはございません。いっそ、こちらでお客さまをいたしましょうよ。」

これで、みんなわらいました。そして、この男はおれたちをからかうつもりなのだ、と



おもいました。それにはかまわず、職人は、れいの小テーブルを、へやのまん中にすえて、

「おならべ、テーブル。」と、いいました。

みるみる、そこに、ごちそうがならびました。それは、このうちの亭主ていしゆなどのおよびもつかないような、とてもみごとなおこんだてで、おいしそうなにおいが、ぶんぶんお客たちの鼻をかすめました。

「さあ、どうかご自由にあげてください。」と、指物師がいきました。これで、この男のいったいみが、お客たちにはわかったので、えんりよは損そんとばかり、二どとはいわせず、てんでにナイフをひらめかしながら、よつてたかつて、ゆうかんにごちそうをたいらげました。

ところで、なにより奇妙ふしぎなとおもわせたことは、お皿がひとつからになったとおもうと、すぐそのあとに、おかわりのお皿が、ごちそうを山もりに盛って、あらわ